



ビザンツ帝国マケドニア朝時代の
教会建築における皇帝の儀礼に関する研究

太記祐一

ビザンツ帝国マケドニア朝時代の
教会建築における皇帝の儀礼に関する研究

『儀式について』に見る宗教儀式と教会建築の関連について

太記祐一

目次

0 : はじめに	1
0-1 本論文の主題	1
0-2 史料について	3
0-3 先行研究	13
0-4 目的と手法	15
0-5 付論：『儀式について』の翻訳に関する覚書	16
1 : 皇帝の参加する宗教儀式	25
1-1 不動暦の祭	27
1-2 動暦の祭	62
1-3 まとめ	86
2 : 皇帝が使用する教会建築	95
2-1 ハギア・ソフィア	97
2-2 他の市内の教会	133
2-3 大宮殿内の教会	173
2-4 まとめ	179
3 : 考察	185
註	193
主な参考文献と略号一覧	222
図版目録	225
用語一覧	230
あとがき	242

表

図版

目次

1. はじめに 1

2. 研究の動機と目的 2

3. 研究の概要 3

4. 研究の方法 4

5. 研究の結果 5

6. 研究の結論 6

7. 研究の意義 7

8. 研究の限界 8

9. 今後の研究の展望 9

10. おわりに 10

はじめに

0 : はじめに

0-1 本論文の主題

ビュザンツ帝国の長い政治史を概観したときに、多くの歴史家は7世紀から12世紀までを中期ビュザンツ帝国として区分している¹⁾。この600年ほどの期間はさらに、843年のイコン破壊運動の終焉と1081年のコムネノス朝時代の幕開けとで、三つに区切られる。通常マケドニア朝の名で知られる王朝は[表0]のように、867年のバシレイオス1世の即位をもって始まり、1028年のコンスタンティノス8世の死をもって終わる²⁾。この時期はビュザンツ帝国が内政上の問題を克服し、文字通り「帝国」として周囲に覇をとらえた時代である。

マケドニア朝はおそらく皇帝の個性によって二つに分けることができるだろう。在位期間の短かったアレクサンドロスとロマノス2世、コンスタンティノス8世を除くと、後半の3人の皇帝、ニケフォロス2世とヨアンネス1世の二人の軍人あがりの帝位篡奪者、そして「ブルガル人殺し」とあだ名されたバシレイオス2世は、文化に興味を示さず政治と軍事に心血を注ぎ「軍人皇帝」としての色彩が強い。これに対して9世紀末から10世紀前半にかけて帝国を統治したレオン6世、コンスタンティノス7世といった皇帝は、自身も一流の文化人であっただけでなく積極的に文化事業を推進した³⁾。特に両帝の残した百科事典的あるいは記録集性格を持った著作は⁴⁾、当時を知るうえでの重要な史料である。

建築史の分野では、クラウトハイマー、マンゴなど主立った研究者は⁵⁾、この時代に関連して843年から1204年までを「中期ビュザンツ建築」として取り扱っている。この時代はビュザンツ帝国において最も造営活動が盛んな時代だった。また建築形態においても大きな変化が見られ、教会建築ではかつて主流であったバシリカ式教会堂とその派生形のドームド・バシリカは、新しく地方で誕生した内接十字形平面の教会堂に完全に取ってかわられた。

特に目をコンスタンティノポリスに転じると、この傾向が顕著に現れている⁶⁾。それまで停滞していた帝都での建設事業は、イコン破壊運動末期のテオフィロス帝⁷⁾を前奏曲に拡大し、同運動終焉後のバシレイオス1世で一つの頂点を迎える。そして10世紀後半から11世紀始めの「軍人皇帝」の時代を挿んで、11世紀に再び興隆を見せるのである。そして教会建築において分類学的視点から言えば、この時代はまさに内接十字形平面などの新しい平面形式の独壇場であった。この形式の教会堂は、しかし帝都においては地方よりも登場するのが遅く、先に述べた9世紀における建設事業の拡大と期を一にしている。

この9世紀後半から10世紀前半という時代を扱った既存の研究を見ていくと、同時代の建築全体に関

して、ルッジェリが先行する時代において提示したような⁹⁾、文献史料から背景となった世界を描き出し、現存する建築遺構と対照させることで建築物のありかたを描き出そうとする試みは、まだなされていない。

これは事実上、ビュザンツ建築史の現状における大きな問題点なのだが、ウスタールートが指摘したように⁹⁾、歴史学的手法という名の実証主義へ傾倒したこの二十年間、ビュザンツ建築史はより大きな流れの中に統合されるのではなく、むしろ細分化された個々の問題へと解体していった。その結果我々がビュザンツ建築の展開を語ろうとするときに利用できる言説は、古びた機能主義的發展史観に則ったものか、細分化された様々な各論になってしまうのである。それゆえに現在、多くの研究者達は、個々の各論を新たに統合する接続点を捜し求めているようにみうけられる。

さらにこの9・10世紀といった時代のコンスタンティノポリスの建築を取り扱った研究も、個々の建築物のモノグラフ以外ほとんど存在しない。その理由は一つには、当時新たに建設された建築物のほとんどが現存しないことにある。だが一方でこの時代は、先に述べたマケドニア朝前期の諸帝の文化政策のおかげもあって、多くの文献史料に恵まれている。

そこで本論文においては、これら文献史料を頼りに、9・10世紀のコンスタンティノポリスにおける皇帝の教会の使用について検討してみたい。なぜ皇帝と教会とを取り扱うのかという理由を以下説明する。

なぜ教会か。まず教会建築はビュザンツ帝国を通じて最も重要視された建築物であり遺構も多い。ビュザンツ建築史は、すなわちビュザンツ教会建築史と言い換えることも可能であろう。逆から言えば、ビュザンツ帝国の世俗建築に関して、我々はほとんど知らないのが現状である。

なぜ皇帝か。一つには後に触れる史料上の制約がある。もう一つは異なる二つの要素を突き合わせることで、通常可視化されない事実が浮かび上がるのではないかという期待がある。第三には先に述べたように、この時代の建設事業は皇帝が大きな役割をはたしたことがあげられる。

なぜ使用か。ビュザンツ建築において、一つの建築物が建設当初にどのような意図をもって計画されたかは扱われても、既存の建築物が後の時代にどのように使用されたのかという問題は、ほとんど注目されてこなかった。しかしながら、既存の建築物がいかに取り扱われたかは、一つの時代の建築観について推し量るうえで重要な要素たりうるものである。そして逆に既存の建築物の使用方と、新しい建物のそれとを比較することは、新しい建築物を評価するうえでも重要な視点である。

さらに付け加えるならば本研究は、教会堂における皇帝の儀礼を取り扱うことで、先に述べた同時代の建築を扱った各論を統合するための、接続点を見つける足掛かりを探す試みでもある。

0-2 史料について

ここでは宗教儀礼における皇帝の行動を再現するうえで、重要と思われる史料を順を追って見ていくことにする。

●コンスタンティノス・ポルフェロゲネトス『儀式について』

『キリストに愛されし、また永遠の皇帝キリストのその中にいる皇帝、賢明の極みにして永久に記憶されし皇帝レオンの子、コンスタンティノスの論説、宮廷の活動に関する真に高貴な作品』¹⁰⁾という長い見出しを持つこの文章は、四つの写本によって現在まで伝えられている¹¹⁾。このうち三つはかなり細かい断片でしかなく、文章の全体像を伝えうるものでは到底ない。我々は唯一、ライブツィツヒに残されている写本を通してのみ、この一連の文章を知ることができる。この写本の成立年代に関しては、10世紀との説が有力ではある¹²⁾が12世紀や13世紀初頭とする説¹³⁾もある。

この史料はこれまでに二回、刊行されている。最初はライスケによる校訂、ラテン語訳、注釈で後に『ビュザンツ史史料大全』の中の一冊として全巻が刊行された¹⁴⁾。二回目はヴォクトの校訂、注釈、そしてフランス語訳によるもので、前半部分、第一巻のみが出版されている¹⁵⁾。またライスケ及びヴォクトの注釈以外の、この史料に関する先行研究としてはバリーのもの¹⁶⁾が、古いものではあるが大変重要であり、大体の点に関して定説となっている。またこの史料の成立の背景に関しては、キャメロンの論文¹⁷⁾に興味深い議論を見ることができる。

さてこの文章は10世紀に「紫の生れの者(ポルフェロゲネトス)」と呼ばれた時の皇帝コンスタンティノス7世によって、あるいはその命により、まとめられた。より短く『宮廷の秩序についての解説』¹⁸⁾と呼ばれることもあるが、通常は『ビュザンツ宮廷の儀式について』¹⁹⁾あるいはより単純に『儀式について』²⁰⁾と呼ばれる。このため本論文でも『儀式について』という名称を使うことにする。

この文章は一見しても非常に様々な内容から成り立っている。「秩序」をこよなく愛したとされるビュザンツ人の好みをそのまま反映しているかのように感じさせる、非常に整理され統一感のあるところと、逆に世に言う中世的無秩序さで雑然と覚書風に書き記してある部分、さらには明らかに過去の独立した著作の写しと思われる箇所、これらが一つの題名のもとに並置されている。このため各部分の執筆時期は異なるし、また執筆者もコンスタンティノス本人、あるいは彼の命令をうけた代筆者ないし代筆者達以外の人物の筆による部分もかなり多い。

またライブツィツヒの『儀式について』の写本には約9章分散逸した箇所がある。この欠落部分はライスケの第9章の途中である。写本では途中までの第9章、途中からの章、それに続く番号のない章、第2

0章という配列になっている。ライスケはこの欠落部分を考慮せずに全体の番号をつけなおしたために、彼の本では章番号は順に第9章（途中までしかない第9章と途中からの章）、第10章（番号のない章）、第11章（本来の第20章）と、当然になっている。バリーはこれらを第20章から逆に数えて、順に第9章、第18章、第19章、第20章と見做している。そしてヴォクトは内容から第9章が前半と後半とで異なることを知っていながら²¹⁾、章番号をふるにあたってはライスケ同様、第9章途中の欠落部分を無視し、なおかつ写本の章番号に従っているために第9章（途中までしかない第9章と途中からの章）、第10章（番号のない章）、第20章（本来の第20章）と章番号をつけている。しかしこの考え方は、あまり支持されていない。ちなみに現在、研究者の間ではライスケの章番号に従うのが通例となっているため、本論分でもこれに準じる。

以下その概要について見ていくことにする。『儀式について』は2巻からなっている。各章のタイトル、あるいは内容はまとめると[表1]のようになる。これについてコンスタンティノス自身は第2巻の序文で、第1巻は記録に基づき、第2巻は口伝に基づいているむね、述べている²²⁾。しかし各巻とも種々雑多な内容を有しており、バリーはこれを以下のようにまとめている²³⁾。

・第1巻

1 A 1) 第1章～第8章：『儀式について』の本文

1 A 2) 第8章～第9章：ペトロス・パトリキオスの6世紀の記録からの抜粋

1 C) 第9章～第9章：ニケフォロス2世による追加

・第2巻

2 A 1) 第1章～第25章：『儀式について』の本文

2 A 2) 第26章～第40章途中までと第51章：様々な儀式に関する記録の写し

2 B) 第40章途中から～第50章と第55章：その他

2 C) 第52章～第54章と第56、57章：その他

彼は1 A 1) がコンスタンティノスの言う記録に基づく部分で、これに対応する口伝に基づく部分は2 A 1) であり、基本的な性格として第1書への補筆とみている。本来あるべき『儀式について』の本文はこの両者である。一方、続く1 A 2) と2 A 2) とは、それぞれ先行する本文に対する付録で、参考資料としてコンスタンティノス自身によって付け加えられたと、バリーは解釈している。そして2 B) は文章の形式や歴史的背景から考えて、主題上は、外国での軍事行動や歴代皇帝の墓所など、その意図は計りかねるところがあるものの、やはりコンスタンティノスによって追加されたと考えている。これに対して1

C) はニケフォロス2世の時代の再編集で追加され、2 C) はさらに後の時代に付け足されたものである。

そこでこの文章の中心とも言うべき部分は1 A 1) といえることができる。この83章は大きく以下の二つの部分に分けられる²⁴⁾。

第1章～第37章：宗教儀式

第38章～第83章：世俗儀式

本論分で取り扱うのは主に宗教儀式に関する部分である。このうち第36章は教会和解の日について述べているが、分量も少なく記述も簡単で覚悟的性格が強い。第37章の内容は、皇帝が宗教儀式に参加する際の服装であるが、バリーはこの二つの章を宗教儀式に関する部分の最後に付録的に置かれたものと見ている。そこで残りの35章分の内容について、バリーの意見を参考にしながら検討してみる。

まず[表1]の各章題を見てすぐに気がつく点は、他の章において常に使われている共通の言い回し「・・・見られるべきこと²⁵⁾」が、第2章から第9章までの部分では用いられていないことである。そして第2章から第6章までは「・・・の歡呼²⁶⁾」となっている。本来この単語には「行動」、「行為」などの訳語が適切なのかも知れない。しかし章の内容を見ていくと、各儀式の際に、何時何処でどの人物がどのような内容の称賛の言葉を皇帝に対して歡呼するのかが、記述の中心となっている。そこでライスケ、ヴォクト共にこの言葉を「歡呼²⁷⁾」と訳していることもあり、ここでもこれに従った。

次に気がつくのは第9章までの部分とそれ以降とで、章題に重複が見られることである。具体的には例えば、神現祭を扱ったと章は第3章と第26章の二つである。以下同様に各章の主題を整理してみると[表2]のようになる。ここで興味深い事実が明らかになる。つまり第9章までの部分は生誕祭、言い換えればクリスマスから始まって聖霊降臨祭までの行事を、時間軸に則って説明したものであり、一方それ以降の部分は、同じ年の行事を、おそらくは復活祭を基準点に据えて、多少混乱はあるもののやはり時間軸に添って論じたものである。本論分では便宜上、第9章前半までをグループ1、第9章後半からをグループ2とする。

ちなみに第1章は題名が「大教会への行進の際に見られるべきこと、すなわち序列と儀礼、皇帝達が教会へと向かう際に引き連れていた輝かしく華々しい随員たちについて」²⁸⁾となっており、章の途中で以下のような記述がある。

「このような順序と型に従って、復活祭の聖大日曜日、聖霊降臨祭、神の輝きの変容祭、我等が主、神の神聖な生誕の祭、神聖かつ壮麗な光の日（神現祭）を執り行わねばならない。」²⁹⁾

そしてこれに続いて復活祭³⁰⁾、聖母生誕祭³¹⁾、受胎告知³²⁾、聖大土曜日³³⁾の各場合が補足解説されて

いる。バリーはこの章を、生誕祭をモデルとして大教会、つまりハギア・ソフィアでの儀式を説明したもので、第2章に続いて行くものとしている。言い換えれば、第1章はそれ以降と同様、グループ1に属するのである。

では第9章途中にある欠落部分はどうかとらえるべきか。バリーは前述のように本来の第9章は現在の第9章の途中まで³⁴⁾と考えている。ここまでの記述が聖霊降臨祭に関するものとなるわけである。一方、本来の第20章(ライスケの第11章)は復活祭の火曜日に関するもので、この章に先行する本来の章番号がない章(ライスケの第10章)は復活祭の月曜日に関して述べている。そして一連の記述の最後に来るのは第35章で、これは聖大土曜日、すなわち復活祭の日曜日の前日が主題である。このことから彼は現在の第9章の後半部分は、本来の第18章の前半部分が失われたもので、復活祭当日、復活祭の日曜日が語られていて、後半の一連の章の最初に位置するものであると解釈している。

そうであるならば失われてしまった本来の第10章から第17章までの章は、前半のグループに属することになる。そしてこの一連の章の主題は、当然のことながら聖霊降臨祭から生誕祭までの宗教行事、具体的には変容祭、聖母生誕祭、十字架挙米祭などということになる。

以上のことからコンスタンティノスが、いかなる形にせよ最低二つのまったく異なる儀式の次第書を持っており、これを編集して現在ある第1章から第37章までの部分が産み出されたことがわかる。

ではこの部分の成立年代は何時なのだろうか。バリーはこれらの章で用いられている、用語を分析し、特に皇帝を示す単語の違いに着目した³⁵⁾。

グループ1では「主人達³⁶⁾」が通常用いられている。これは二人の皇帝がいたことを示している。これに対してグループ2では一人の皇帝を表す「皇帝³⁷⁾」が一般的ではあるが、これに加えて先の「主人達」、「大きな皇帝・小さな者³⁸⁾」、「大きな皇帝・小さな者達³⁹⁾」といった表現が用いられている。これらを整理して様々な歴史的事実と照らし合せたうえで、バリーは以下のように結論付けている。

グループ1はコンスタンティノス7世の治世(913-59)の最晩年、彼の息子ロマノス2世(957-963)が皇帝に即位した957年以降に制作された。

グループ2はミカエル3世(847-67)治下に成立したものを基本とし、バシレオス1世(867-86)の時代の追加(第19章~第21章)とレオン6世(886-912)によるもの(第24章、900年前後か)を含んでいる。そしてこのグループは少なくともレオンとコンスタンティノスの時代に筆を加えられている。

さて以上に加えて第2巻から宗教儀式を扱った部分を拾い出すと、第6章から第9章と第11章、第13章が重要である。これらの部分は2A1)に属することから考えて、成立はコンスタンティノス7世が、第1巻が成立したのちに第1巻で書きもらしたことに、口伝で、ないし慣例として伝わっていたこ

とを書きとめたものと思われる。それ以上の考察をバリーはこの部分に関しては加えていない。

ここで第2巻各章の主題についてまとめてみる。ちなみに第13章は複数の儀式について記載してあるために、各主題ごとに番号を付け加えた。その結果が[表3]である。ここでもう一度、[表1]を見るとわかるが、第6章から第13章までが第2巻のうちで年中行事を扱った部分である。そして第6章から第11章までは5月21日から四旬節までの行事が書かれている。おそらくこれは復活祭を記述上の区切りと考え、復活祭から書き始めた年中行事のうち、書き漏らしたものをまとめているのではないだろうか。第12章と第13章の最初の部分は皇帝が儀式を望んだ場合についてである。第13章のそれ以降の部分は、最後の8月29日を除いて、3月9日から11月1日まで、皇帝が他の教会を訪れる場合について日付順に説明している。おそらくここでは、生誕祭を一年の区切りと見做して、記述しているものと思われる。そして最後の8月29日に関する部分は、第13章成立後に書き足されたものであろう。

以上のことから、第2巻のこの部分の構成は以下になるとと思われる。

復活祭を区切りとした年中行事：第6章から第11章

皇帝が望んだ場合の宗教儀式：第12章と第13章の最初の部分

生誕祭を区切りとした年中行事：第13章の真中の部分

追加：第13章の最後の部分

このことからおそらく、第6章から第11章まではある時期に一括して編集されたと考えられる。続く第12章と第13章がこれらと同時期に編集されたかどうかは定かではない。しかし第14章が総主教の任命を主題としていることを考えると、第12章、第13章の最初の部分、第14章が、年中行事以外に皇帝が教会を訪れる場合としてまとめて編集された可能性は高い。すると第13章の残りの部分はのちの時代に挿入されたのではないだろうか。

いずれにせよ第6章から第11章までが復活祭を一年の区切りとする点で第1巻のグループ2と対応し、第13章の後半が生誕祭を区切りとする点でグループ1と対応する点は重要な意味を持つように思われる。

そしてここでバリーの手法に従って皇帝を示す単語見てみると以下ようになる。

第9章では「皇帝」が、それ以外では「主人達」が通常用いられている。

第6章、第13章には「第一の皇帝」との記述を見ることができる。⁴⁰⁾

コンスタンティノス7世統治期間のうち、皇帝が複数いたのは彼の舅ロマノス1世ラカベノス(920-944)との時代、この時は事実上ロマノスが皇帝だった、と自分の息子ロマノス2世との時代である。

その他、文中の表現で歴史上の事実との関連で気付いた点を以下に列挙する。

まず第6章には「ポーヌスの新宮殿」⁴¹⁾との表現が見れるが、このポーヌス貯水池のそばの宮殿は口

マノス1世によって建設されたことが知られている⁴²⁾。この章は、もともとポームヌ宮が新築された時に書かれたものなのだろうか。それとも慣例上、この宮殿は常に「新宮殿」と呼ばれていたのであろうか。

また第7章では、万聖人の祭は復活祭の月曜日や復活祭の次の日曜日に準じて聖使徒教会で執り行われる旨⁴³⁾、書かれている。ここで皇后聖テオファノの礼拝所が使用されるが、このテオファノは893年に夭折したレオン6世の妃で、後述するが彼女のために皇帝はこの礼拝所を建設している。つまりこの章はそれ以降に成立したわけである。

第8章は内容面でも表現の上でも、第11章と共通する箇所が非常に多い。そして第11章は、第1巻第29章と同じ主題を扱っている。内容的には第2巻第11章は十字架をどう扱うかが主題で、第1巻第29章は皇帝が何をするか为主题である。

第9章では進堂祭と同様に儀式がおこなわれる旨、記されているが第1巻の進堂祭に関する記述は第27章でグループ2に属する。またこの章では皇帝をさすのに単数形の「皇帝」が用いられている。この章は第1巻のグループ2と同時期に成立した可能性が高い。

なお同じ観点で見ると、第14章は933年2月2日の総主教テオフィラクトスの選出について記した第38章と後半部分がほとんど同じで、おそらく一方が他方の写しと思われる。第14章では「皇帝」が通常使用されており、一箇所だけ「皇帝達」が使われており比較的统一性がある。第38章では前半は「主人達」が使用され、後半は第14章と同じで統一性に欠ける。つまり第38章が成立したときに、すでにあった第14章が写されたわけで、第38章の成立は当然933年以降、おそらくロマノス1世とポルフィロゲネトスの共同統治時代の終わる944年までではないだろうか。

これらのことから考えて、専門外の領域なので深い議論はなしえないが、第6章から第11章まで（あるいは第13章後半部分を除く第14章まで）は、コンスタンティノス7世の最晩年に、つまり957年以降に第1巻が完成してから959年に死ぬまでの間に一括して編集されたものではあるが、もともなった素材は様々な時代に起源を持つものと思われる。そしてこの編集作業が完了してから第13章の後半部分が追加され、さらにそのあとで同じ章の一番最後の部分、8月29日に関する所が追加されたのではないだろうか。

ここで第2巻は第1巻で書き漏らしたことを書いたものだと考えると、いくつかの興味深い点が浮かび上がってくる。

まず以上のような論を踏まえてもう一度【表2】を見てみると、グループ2において章番号と日付が一致しない部分が、第19章から第21章で丁度バシレイオス1世による改訂部分と重なるのである。これはグループ2に対するこのときの作業の内容を、何らかの形で示唆するものではないか。これと前後して興味深いのは、昇天祭の後に来る聖霊降臨祭に関する記述が、グループ2にはないことである。変容祭

（8月6日）、聖母就寝祭（8月15日）、聖母生誕祭（9月8日）など当時重要視されていたであろう祭典の記述も抜けている。

また第1巻第1章はハギア・ソフィアでの儀式についての概論として性格を持っているが、その補足部分で唐突に、まるで重要なものを忘れていたことを思い出したかのように聖母生誕祭の記述がでてくる。これはグループ2にこの部分の記述がなかったことに起因するのであろうか。またここでは一方の聖母就寝祭に関しては何も述べていない。そして第2巻にその記述があることから考えて、欠落部分も含めて第1巻の何処にも決してこの儀式に関する記述はなかったはずである。そして第2巻の宗教儀礼に関する部分のうちこの聖母就寝祭も含めて第6章から第9章の主題となっている祭日が、日付の順序から考えて、前述のグループ2の欠落部分で、取り上げられていた可能性がある。

以上のことから次の仮説を提示できないだろうか。コンスタンティノス7世ポルフィロゲネトスは作業開始時に、古い儀式の次第書を持っていた。これがグループ2に属する一連の章である。これはミカエル3世の時代に成立したものであるが、バシレイオス1世、レオン6世の最低2回に渡る改訂作業によって、あるいは他の何らかの理由によって欠落した部分が生じてしまった。その後、彼はこの欠落部分に気付き、それを埋める素材を集めたが、何らかの原因でこの素材は第1巻の編集作業の際には、省みられることがなかった。彼は基本的にはこのグループ2をもとに、欠けている所や現状に合わない所を補足する意味で、グループ1を書いた。その後、第1巻の補足である第2巻をまとめるにあたって、かつて集めた素材の存在に気付き、あるいは思い出し、第1巻で触れなかった儀式を、これをもとに説明した。そのさらに後で、今迄考慮に入れていなかった、言い換えれば重要度の低い、いくつかの儀式についてまとめ、これを第2巻第13章に加えた。

さてここで『儀式について』の史料価値について考えてみる。残念なことにこの史料に含まれている文章は、全体としては成立年代もまちまちで統一性に乏しい。取り上げられた祭日について考えてもわかるように、ここに書かれた儀式が当時皇帝が参加した宗教儀式のすべてでは決してない。しかし個々の祭日に関して言えば、記述の残されている限り、儀式の次第は比較的正確に説明されている。それゆえに実際にこの史料に記録されているように、一日一日と毎日の儀式が行なわれたと見るのではなく、9世紀後半から10世紀中頃にかけての年中行事の一つの姿を描き出したに過ぎないと見るべきであろう。

次章で他の史料と比較しつつ、詳しく見ていくことにするが、実際に皇帝の行動を再現しようとしたときに、この史料以上に詳細な記録は存在しない。多くの研究者がこの史料を高く評価しているのも、まさにこの点である。

●フィオテロス『クレートロロギオン』⁴⁴⁾

この史料は899年に書かれたものと考えられている。クレートロロギオンとはクレートリオン、すなわち宴会、あるいは晩餐会から派生した語で、宴会の席次に関する論述を指す。ちなみにこの『クレートロロギオン』という名も通称で、もとの写本には『皇帝の宴席の序列、及び各官位の呼称と名譽の精密な論、古の宴会席次論から、神の友、最高の智をもつ我等が皇帝レオンのインディクティオ第三年、天地創造6408年、9月、皇帝のプロートスパタリオス、かつアトレクリネース、フィオテロスが作成』という長い題名が冠せられている。著者のフィオテロスについて、我々は何も知らないが、彼の肩書きプロートスパタリオスは名譽称号の一つである。もう一つの肩書きアトレクリネースは官職の一つで、皇帝主催の晩餐会の出席者やその席次を調整するのが役割である。

この史料の写本は完全なものが二つ知られている。一つは前述のようにライブツィッヒの『儀式について』の写本に含まれているもの⁴⁵⁾で、もう一つはイェルサレム総主教の蔵書に属するものである。

史料の構成は四章からなる本文と付録、参考史料で、第1章でまず官位、官職の構成が示され、第2章では皇帝と同席できるような高官の席次について、第3章ではより低い位の者の席次について解説している。本論分において重要なのは第4章で、ここでは何時何処で誰とどのような宴会が開かれるのかが述べられている。付録は様々な機会に皇帝が臣下に贈る金品の解説で、参考史料はキュプロスの主教エビファニオスの総主教以下の聖職者達に関する文章である。

本論分の主題と密接な関連がある第4章について、もう少し詳しく見ていく。ここでは生誕祭、つまりクリスマスから始まって翌年の9月までの、帝室の年中行事とそれに関連して開催される宴会が説明される。しかし基本的な史料の性格、宴会の席次を決める役職にあった人物が書いた宴会の席次に関する論述、から明白なように、宴会と無関係な儀式の記述はなく、また記述の内容も、例えば教会での儀式よりもそのあとに行なわれる晩餐会の方が中心となっている。このため、宗教儀式に関する記述は概要だけで、『儀式について』と比較して皇帝の行動の細部を検討するというような作業にはまったく適さない。

●『大教会のテュピコン』

テュピコンとは、教会での日々の儀式の次第を記述したもので、通常の教会のものと修道院のそれとに分けられる。通称『大教会のテュピコン』と呼ばれるものは、その名のおり大教会、つまりコンスタンティノポリスのハギア・ソフィアの毎日の宗教儀式の次第を記録した文書である。この史料は幾つかの写本が現存しているが、最も完全なものはイェルサレムの聖十字架修道院の写本で、これと比較しうるのはバトモス島の福音書作者聖ヨアンネニス修道院の写本である。それ以外にもパリに二つ、オックスフォード、キエフ、ドレスデンに一つづつ写本が残されているが、これらはいずれも完全からは程遠い。本論文

ではこのうち、マテオスによって校訂され仏語訳をつけて出版された⁴⁶⁾イェルサレムのものを使用し、今後単に『テュピコン』と呼ぶことにする。この著作は聖十字架修道院の写本の全文のみならず、バトモス島やその他の写本との相違点もそれぞれ記載されている。なお史料の成立年代は、バトモス島のものが10世紀、イェルサレムのものは10世紀末と考えられている⁴⁷⁾。

当時の教会の儀式は一定の枠組みが完成しており、そこにどのような内容を組み入れるかで性格付けがなされていた。例えば小聖入の後に聖書のどの部分を朗読するかとか、どの聖歌を歌うのかといった要素を変えていくのである。『テュピコン』はこのうち、日々の儀式で変化する内容を詳細に記録したものである。よってその記述の中心は、どのような祭で、何処の教会で、どの型の儀式を、どのような素材（聖書、聖歌など）を用いておこなうのかが中心になっている。それゆえに個々の人物の詳細な行動に関しては、通常の儀式の枠から逸脱しない限り記述されない。この儀式の枠部分に関しては、残念ながら同時代の史料は存在しない。12世紀以降、ディアタクセイスと呼ばれる文章が編纂されるようになり、これが前述の枠の部分を説明したものである。しかし本論文で取り扱う9ないし10世紀においては、この内容はまだ口伝によっていたと考えられている⁴⁸⁾。しかし同時代の儀式の基本的な構造と、その中で参加者の行動に関しては、前節でも述べたマテオスとタフトの著作が大変参考になり、これと合わせることでかなりの部分まで当時の大教会の典礼が再現できる。

本論文の主題に関してこの史料は、以下の二つの制約を持っている。まず上に述べた理由により、常に詳細な記述が見られるわけではない。そしてこれは大教会、つまり総主教側の記録であるが、特別な理由がないかぎり皇帝の言動は触れられていない。

●その他

以上の史料以外に、このテーマに関連があると思われるものを以下にあげる。

10世紀の『コンスタンティノポリスのシュナクサリオン』⁴⁹⁾は、現代で言う所のカレンダーのように、教会の儀式の日程を記したもので、祭事の日程を把握するためには重要な史料だが、個々の祭りに関する記述が簡単なため、本研究においては余り重要ではない。

同様な史料として、10世紀末の『バシレイオス2世のメノロギオン』⁵⁰⁾がある。これも『シュナクサリオン』と同種の史料である。こちらは儀式を絵日記の様な形式で記述したものである。それ故に『シュナクサリオン』と同じ問題点を持っている。

●まとめ

以上見てきたように、この時代の皇帝が儀式にどのように参加したかという問題を取り扱うにあたって

は、いくつかの問題点を含むものの『儀式について』がほとんど唯一の詳細な記録ということになる。そこで本論文においても、他の史料の記述を補助的に使用しつつ『儀式について』の記述を中心に見ていくことにする。

0-3 先行研究

上でとりあげた『儀式について』を始めとする史料はこれまでも、様々な角度から研究の対象となってきた。本節では『儀式について』を中心に、これら史料を使用したこれまでの研究に関して、建築史を中心にみていくことにする。

研究者の間で『儀式について』が注目を集めたのは、19世紀末のことであった。当時の研究者の間で興味の対象となったのは、皇帝や廷臣達の行動そのものではなく、儀式の舞台として言及されている様々な建築物であった。

現在のイスタンブール旧市街東部、アヤソフィア・ムゼシ、スルタン・アフメト・ジャーミー等の文化遺産が世界中の観光客を魅了する一角には、かつていわゆるビュザンツ帝国の中心部として様々な建築が集中して建っていた。この中で現在我々が目にすることができるものは、テオドシウス帝のオベリスクやアヤソフィアなど、数えるほどしかない。これらも、現在アヤソフィアと呼ばれる教会堂がよい例ではあるが、往時の姿からは掛け離れたものとなっている。

そこで当時の研究者達は、過ぎ去りし日の姿を追い求めていくなかで『儀式について』の記述に大いなる可能性を見出したのである。『儀式について』の記述に登場する建築物のうち、特に登場回数が多いのは大宮殿、戦車競技場（ヒポドロモス）、ハギア・ソフィア（アヤソフィア）である。この中で唯一現存するハギア・ソフィアの当時の状況を再現するために、アントニアデス⁵¹⁾やウベソル⁵²⁾はこの史料を使用している。しかし何よりもこの史料に重きをおいた研究は、ウベソルによる大宮殿の研究⁵³⁾であろう。これは後にヴォクトやマンゴ⁵⁴⁾、そしてギロン⁵⁵⁾に受け継がれていくことになる。

しかしこれら一連の大宮殿に関する研究は、60年代以降、ほとんど停滞した状況にある。その理由は、既存の文献史料で得られる、ほとんどすべての情報が検討され分析された結果、大宮殿の復元は満足いく状態からは程遠い所で限界に来てしまったためである。

70年代前半に建築史の分野で、それまでとはまったく異なる視点から『儀式について』を使用した研究が二つ、相次いで発表された。一つは6世紀の教会建築のありかたを考察したマシューズのもの⁵⁶⁾で、もう一つはシュトゥルーベのやはり6世紀の教会建築の西立面について考察した論文⁵⁷⁾である。これらは研究対象として、ともに6世紀、ビュザンツ帝国において最も建築造営活動が盛んであった時期の建築遺構を対象にしている。しかしながら我々には、6世紀の宮廷儀式に関してほとんど史料が残されていない。そこでこれらの研究においては、『儀式について』の記述から6世紀の宮廷儀式を類推することがおこなわれている。

これに対して宗教史の分野においては、別の理由でこの史料が注目されることになった。その理由は

簡単で、当時の正教会は儀式の次第を口伝によって伝えており、文書の形では残っていないためである。

当時の典礼文自体は前世紀末のブライトマン⁵⁸⁾の研究以降、たびたび取り上げられてきたが、その方向性は、シュルツの著作⁵⁹⁾が代表するように、象徴体系を重視したものであった。実際の典礼のありかたを明らかにしたのは、マテオスの著作⁶⁰⁾とタフトのそれ⁶¹⁾で、どちらも大変緻密な研究で、現在の所、決定版的なものとみなされている。またコンスタンティノポリス、イェルサレム、ローマの各都市の都市空間を用いた宗教儀式に関してはボールドヴィンの研究⁶²⁾が重要で、同時代の信仰の在り方について新しい地平を切り開くものである。タフトやボールドヴィンは、9世紀ないし10世紀の儀式の様子を再現するにあたって、『儀式について』の記述をもとに考察を進めている。

一方、歴史学に目を転じると、当然のこととして皇帝権力の在り方に関心を持つ歴史家達が『儀式について』を研究対象とした。第二次世界大戦前にすでにトライティンガー⁶³⁾は、この観点から『儀式について』に注目している。同じテーマに関するものからもう一つあげるならば、おそらくマクコルミクの凱旋行進に関する研究⁶⁴⁾であろう。しかしながらこの分野の研究は、我々の目にはいささか物足りない部分がある。一つには例えば戴冠式や結婚式、凱旋式といった特殊な儀式に重点がおかれることと、儀式における各動作の意味合いや、各廷臣の機能などに重点がおかれ、建築物あるいは建築空間と儀式の関係はあまり省みられないことである。

0-4 目的と手法

『儀式について』を始めとする史料を用いた研究を考えたときに、大宮殿内の儀礼は非常に魅力的なものである。しかし残念ながら大宮殿の建築は、建築形態を考えるうえでも『儀式について』が重要な史料となるため、この主題は循環論法に陥る危険性が高い。その意味では他の遺構、考古学上の成果や他の文献史料が活用できる、教会堂建築での儀礼のほうがはるかに取り扱いやすい。

しかし『儀式について』と教会建築という視点から先行研究をみていると、一つの事実に気がつく。それは『儀式について』を用いた既存の研究には、当時の皇帝がどのように当時の教会建築を使用したのか、という主題を扱ったものがほとんどないことである。タフトを始めとする研究者は、当時の堂内での聖職者の行動を記録した史料がないため、類似的史料として、代用品的に『儀式について』を用いている。またマシューズやシュトゥルーベは、同じく現存しない6世紀の儀礼に関する記録の代用品として、『儀式について』を使用している。

これには一つの理由がある。それは『儀式について』が9世紀ないし10世紀の状況を記述した史料であるにもかかわらず、登場する教会建築は6世紀以前に建設された物が圧倒的に多いからである。しかしながら一度、建設されず都市の一部になった建築物がどのように使用されていったか、という問題は決してないがしろにされるべき問題ではない。また同時にこの点に当時の皇帝、あるいは人々の建築観を解く鍵があるように思われる。そしてそこには明らかに、当時の皇帝のありかたが写し出されているはずである。

以上のことを踏まえ本論文は、マケドニア朝時代におけるビュザンツ皇帝の教会での儀礼を描き出すこと、を主眼とする。そして以下の各章によって構成されている。

まず第1章では年中行事としておこなわれたであろう、宗教儀礼における皇帝の行動を先に紹介した文献史料をもとに再現し整理する。

続く第2章では、第1章で取り扱った儀礼のうち、皇帝の様子がある程度の具体性をもって再現できるものに関して、その舞台となった教会堂の9・10世紀における建築遺構の状況を、現存遺構、考古学調査、文献史料などから復元し整理する。

そして第3章では、先行する各章の結果を対照させ、当時の教会堂における皇帝の儀礼の特徴と、それに関連する教会建築の特徴を指摘し、加えてこれら特徴に関して、その性格をビュザンツ建築の流れを踏まえつつ考察する。

0-5 付論：『儀式について』の翻訳に関する覚書

本論文は『儀式について』からの引用に多くを負っている。この史料は繰り返し、様々な研究書で言及されてきたが、実際に日本語に翻訳されたことはない。現代語訳としては先述のヴォクトによる第1巻の仏訳以外には、リヒターの史料集⁶⁵⁾に独語の部分訳がある。またタフトの「大聖入」⁶⁶⁾に何箇所か英訳の引用を、シュナイダー、ケーラー⁶⁷⁾のハギア・ソフィアに関する研究書に、やはり関連部分の独訳を見ることができる。

本論文における引用は、基本的にこれらの現代語訳とライスケのラテン語訳を参照しつつ、ギリシャ語原文から日本語に訳出したものである。この際に変参考になったのは、言うまでもなくこの史料を駆使して書かれた幾つかの研究書である。大宮殿とその周辺の地誌学的研究であるマンゴとギロン⁶⁸⁾の著作、教会儀礼と教会建築の関連について考察したマシューズの研究⁶⁹⁾、そして教会儀式と教会堂西正面の関連を扱ったシュトゥルーベの論文⁷⁰⁾が主なものである。

ここで当時のギリシャ語から日本語に訳すにあたって、幾つかの用語に関して、通説に疑問が生じるところや、適当な日本語を見つけていくといった問題が生じてきた。ここではそれらのうち特に重要と思われるものについて、取り上げてみていきたい。

なおビザンツ帝国においては、書き手の教養や文章の目的などによって、ホメロスなどの叙事詩のギリシャ語、いわゆるアッティカ方言による古典ギリシャ語、新約聖書のコイネーという国際語としての共通ギリシャ語、聖人伝など宗教説話特有の文語、一般庶民が使ったであろう口語など、様々なものが使用された。厳密に言えばこれらはすべて発音が異なっただけであるが、おそらく当時、すでに各単語の発音は古典ギリシャ語よりも現代語に近かったと考えられている⁷¹⁾。しかしながら、アヤ・イリニよりハギア・エイレーネーが、セオゾラよりテオドラが、ヴィザンティオンよりビュザンティオンの方が、言い換えれば現代語よりも古典語の方が我々の耳に馴染みがあると思われるため、本論文では基本的に古典ギリシャ語に従い音訳した。

●建築：空間：装置

ナオス

『儀式について』においても、繰り返し「ナオス」⁷²⁾という単語が登場する。この単語は語源的には「神殿」の意味であり、転じて「教会」の意味でも使用される。しかし同時に教会の核となる部分、例えばバシリカ式教会堂の至聖所を含まない身廊部分、をも意味する⁷³⁾。

『儀式について』においてこの単語は、例えば第17章に「そこから（ベルシャ人の聖ヤコーボスを通じてから）（一行は）殉教者聖モーキオスの高貴な教会（ナオス）に入る。」⁷⁴⁾と、また第25章には「聖ステファノスの教会（ナオス）の近くのダフネー（宮の）私室に入り」⁷⁵⁾とあり、「教会」、正確には「教会堂」、場合によっては「教会堂とその敷地」、の意味で使用されているようである。このことは第10章の聖使徒教会に関する記述に、「皇帝と総主教の二人は教会（ナオス）の左の部分、即ち側廊を通して、」⁷⁶⁾とあることからもうなずける。しかし同時に第23章には小聖入の際の記述で、ナルテックスから「身廊（ナオス）の中央を通して入り、アンボの横とソレアを通り過ぎる。神聖な扉の前に立ち、」⁷⁷⁾とあり、我々が理解している意味での「教会堂」よりも、若干意味が狭いようにも思われる。「教会」をあらわすもう一つの単語「エックレーシア」に関して、第26章に「身廊（エックレーシア）に入る。ソレアを通ると神聖な扉の前に立ち、」⁷⁸⁾とあり、同様な用法を見ることができる。

以上のことから本論文では、この二つの単語を、基本的には「教会」と訳したが、場合によって「身廊」と意訳した箇所もある。

ペーマと至聖所

ペーマとは語源的には「一段高い所」の意味で、教会建築においては祭壇の周囲の空間をさす。これはビュザンツ建築では堂内東端部のアプスを中心とした、身廊から障壁で切り取られた空間を差し、通常、至聖所と同一視される⁷⁹⁾。

『儀式について』においては、祭壇の周囲の空間を示すのに、語源的には「祭壇」という意味の単語「テュシアステリオン」⁸⁰⁾が通常用いられる。「ペーマ」⁸¹⁾は時折登場するが、至聖所の意で使用される他の単語⁸²⁾はまったく登場しない。また祭壇自体を指すときは「神聖な食卓」⁸³⁾が用いられている。そしてこの「テュシアステリオン」は他の史料においても至聖所の意味で使用されている⁸⁴⁾。このため本稿ではこの両者に間に何らかの使い分けがあるのかもしれないと思い、「祭壇」を『至聖所』と訳し、「ペーマ」はそのまま『ペーマ』として残すことにした。

そこで『儀式について』において、この問題に関してみていくことにしたい。先に述べたように回数上は「祭壇」が多いが、「ペーマ」しか使用されない部分もある。章単位で見ると、第1巻第1章、第2巻第6章、第10章、第14章である。また同第13章のうちストゥーディオス修道院に関する部分もそうである。これに対して「祭壇」のみが用いられているのは、第1巻の第9、10、11、18、21、22、26、27、29、34の各章である。第1巻の第17、19、20、23、28、35の各章、それに第2巻の第7、第12、第13章では「祭壇」と「ペーマ」の両方を見ることができる。

このうち両方が見られるものに関して詳しく見ていくことにする。なお以下引用箇所では「至聖所」が

原文の「祭壇」に相当し、「ペーマ」はそのままである。

第19章、第20章は多くの部分で完全に記述が一致し、どちらか一方が他方のもとになったと思われる。ここではファロスの聖母教会で「至聖所まで入り」、「至聖所から出ると」との記述があり、ネアに関しては「至聖所に入る」が、ここから「ペーマを通り退出」し、この際に「ペーマでは」蠟燭を灯して布に接吻する。

第17章に「至聖所で」、「至聖所まで入り」、「至聖所から出ると」とある中に「至聖所の横を通り、右側から、ペーマの神聖な扉まで」との表現が見られる。

第2巻第7章には以下の表現がある。「神聖なペーマの柵の外で」、「至聖所に入る」、「ペーマから出た」、「ペーマへ入場し」、「至聖所を通過」、「ペーマに向かって」。

第12章で見られるのは聖母教会で「至聖所に入り」、「ペーマで」、「ペーマの東に向かって右側の部分と」、聖遺物を納めた箱の堂に関しては「ペーマの前で」と「ペーマから退出し」である。

第13章では「神聖なペーマの扉の外に立ち」、「聖なる至聖所に入り」とある。

以上見てくると、両者には微妙な違いがあることがわかる。つまり至聖所の障壁、テンブロンに触れるときには「ペーマ」が用いられ「至聖所」は用いられない。「ペーマの神聖な扉まで」、「神聖なペーマの柵の外で」、「神聖なペーマの扉の外に」などがその例である。おそらく基本的な単語の意味は守られていて、「ペーマ」は至聖所全体を差すのに対して、厳密な意味では「祭壇」は至聖所ではなく「祭壇(の周囲の空間)」なのであろう。

このような用法は『儀式について』に限らず『テュピコン』などにもみることができる。また至聖所に限らず、ブラケルナイやカルコブラティアの聖母教会の「箱(ソロス)」やハギア・ソフィアの「神聖な井戸」も同様である。本論文の第2章で見たように、前者は「(聖遺物を納めた)箱(の置いてある空間)」の、また後者も「神聖な井戸(の遺物が保管されている空間)」の意味であらう。

以上の微妙な違いに加えて、もう一つ興味深い事実がある。これを端的に示唆しているのが、第28章の正統信仰に祝日に関する新旧二つの記述で、古い次第の方には「至聖所に入り」とあるが、新しい次第の方には「ペーマに入り」となっている。二つの単語は各章の成立年代と関係があるのであろうか。

ここで『儀式について』にたびたび見られる記述の重複箇所について比較してみる。聖大土曜日扱った第35章と第1章とでは、以下ようになる。

小聖入：「至聖所に入り」35。「ペーマに入り」1。

香炉：「至聖所のぐるりに」35。「一」1。

至聖所からメータトーリオンへ：「側面左側」35。「ペーマの左側」1。

帰路：「ペーマの左側の門を」35。「ペーマの左側の部分」1。

退出：「ペーマの後ろの」通路を、35。「聖ニコラオスを」1。

ハギア・ソフィアにおける儀式を扱った第23章、第9章、第1章では以下ようになる。

小聖入：「至聖所の中に入る」23。「至聖所に入る」9。「神聖な扉に跳いてから入る」1。

退出：「ペーマの横を通過」23。「至聖所から出て」9。「ペーマの右側の部分を通って」1。

大聖入：「一」23。「至聖所の外を」9。「ペーマの右側の部分の外を」1。

接吻：「一」23。「至聖所の右側の脇に」9。「ペーマの右側の部分で」1。

領聖：「一」23。「至聖所の前に」9。「ペーマの右の部分」1。

さらにここで参考までに、共通点の多い二つの儀式についても比較してみることにする。一つは第30章の受胎告知の祝日で、もう一つは第1章の聖母の生誕祭である。どちらもハギア・ソフィアからフォロスを経て、カルコブラティアの聖母教会まで行進しここで中心となる奉神礼に参加する。

神聖な井戸から：「一」30。「ペーマの右側の部分に向かって」1。

ハギア・ソフィア：「至聖所に入る」30。「神聖な扉に入る」1。

カルコブラティア：「至聖所に入る」30。「ペーマに入る」1。

ここでもう一度『儀式について』各章の成立年代を振り返ってみると、大雑把に三つに分けることができる。これと至聖所を示す単語を対照させると以下ようになる。

	ミカエル3	バシレイオス1+レオン6	コンスタンティノス7
祭壇	1.9+,10,11,18,22,26,27,29,34.	1.21.	
祭壇+ペーマ	1.17,23,28,35.	1.19,20,11.7?.	11.12?,13?.
ペーマ			1.1,11.6,11.10?.

なお第2巻の各章は成立年代が不明確なため、あまり参考にはならない。上の表からは成立年代と用語の使用方の間の関係には、一つの傾向が見られるが、決定的と言いうるものではないことがわかる。同時代の他の文献史料を検索していない状態では、この結果から明確な結論を導きだすことは困難である。

以上、二つの単語の使い分けに関してみてきたが、『儀式について』全体で一貫した法則性があるというわけではなく、各章ごとに使用基準は一定しない。確かに幾つかの傾向は見ることができるが、これはむしろ各章を担当したであろう原著者に起因するものといえるだろう。

側廊とギャラリー

『儀式について』において繰り返し、ギユナイティケース⁸⁵⁾とカテークーメニア⁸⁶⁾という二つの単語

が登場する。

ヴォクトはグユナイティケースを「女性達の場所」と訳しており、これは字義的にはまったく正しい。しかしそこで「女性達の場所」が何処を具体的に示すのが問題となる。長い間この単語は「北側廊」を指すと考えられてきた。これはプロコピオスなどの史料に、側廊は片方が女性用、他方が男性用と読める記述⁸⁷⁾があるためである。しかし『儀式について』においては、単語の字義的な意味と実際上の用法が一致しないことが多い⁸⁸⁾。シュトゥルーベはこの単語について、「北側廊」を指す例が多いが「南側廊」を指すこともあり「両方の側廊」に対して使用される例もある、ということを指摘している⁸⁹⁾。またマシューズも、基本的には「側廊」を意味し通常は「北側廊」を指す、としている⁹⁰⁾。そして『儀式について』においては、「左のグユナイティケース」のように具体的な説明が付くことが多い。これらのことから本稿においてはグユナイティケース＝「北側廊」と機械的には考えず、単に「側廊」と訳すことにした。

また「カテケーメニア」をヴォクトはそのまま音訳しているが、この単語は本来、「洗礼志願者のための場所」を意味する。しかしマシューズやシュトゥルーベが指摘するように⁹¹⁾、この単語は7世紀以降「ギャラリー」を指す言葉として使用されている。またそう考えたときに、『儀式について』において記述内容に矛盾が生じる例は見いだせない。このため本稿でも「ギャラリー」として訳している。

皇帝用の空間

『儀式について』には皇帝が使用するために教会堂内に用意された空間がたびたび登場する。このような空間を指し示す単語は、多岐に渡り混沌としている。以下にそれらを列挙する。メータトーリオン⁹²⁾、バラキュプティコン⁹³⁾、エウクテーリオン⁹⁴⁾、コイトーン⁹⁵⁾、プロセウカディオ⁹⁶⁾、テトラセロン⁹⁷⁾、またこれら以外にも聖使徒教会には名称の記載されていないカーテンで区切られた空間が、ギャラリーとナルテックスにあった。

さて以上のうちでエウクテーリオンとコイトーンは、意味が比較的明確である。字義的には前者は「礼拝のための場所」、後者は「寝室」である。ここで注意すべき点は、教会内の皇帝用のコイトーンに言及があるのはブラケルナイとペーゲーの二箇所、何れも領聖後に皇帝が、おそらくは休憩のために使用する。エウクテーリオンは『儀式について』によると、ブラケルナイとハギオイ・セルギオス・カイ・バックスで皇帝が領聖を受ける場所として言及されている。またエウクテーリオンは教会内⁹⁸⁾や宮殿内⁹⁹⁾、特定の聖人に捧げられた礼拝所を差すのにも用いられる。

同様な視点で見えていくと、メータトーリオンについても興味深いことがわかる。復活祭や生誕祭の記述からも明白であるが、ハギア・ソフィアの側廊のメータトーリオンは、事実上、皇帝が儀式に参加しない

ときの控え室として使用されている。シュトゥルーベによれば¹⁰⁰⁾、これは他の教会を通して共通の特性である。メータトーリオンは休憩室であり更衣室であって、決して礼拝所ではない。このことは食堂として使用される例からも明らかである。以上のように彼女は主張している。

またさらに彼女はバラキュプティコンとの比較をおこない、教会内のバラキュプティコンは礼拝に参加するための空間、礼拝所であり、メータトーリオンやコイトーンはバラキュプティコンやエウクテーリオンとは峻別されるとしている。そのうえで彼女はバラキュプティコンに関して考察を進め、以下のように結論付けている。この単語の「覗き見るための場所」という本来の意味から考えて、もともとは皇帝が自分よりも低い空間でおこなわれる物事を見るための場所であった。それゆえに建築的には、皇帝の前方がカーテンなどによって開閉可能な空間で、もよおしがおこなわれる広場などの空間に向かって一段高いところに設置されたものを指す¹⁰¹⁾。

さて一方、プロセウカディオンは語源的にはエウクテーリオンに近く、「礼拝者のための場所」を意味する¹⁰²⁾。この単語はネアに関する記述にのみ登場するが、ここには椅子が用意されており、礼拝の後、この椅子に座った皇帝は晩餐会の段取りをすることになっている。このことから、プロセウカディオンは機能的には、メータトーリオンやコイトーンの機能とバラキュプティコンやエウクテーリオンの機能の両方を兼ね備えているものと思われる。

一方、テトラセロンは皇帝が福音書の朗読を聞くときに使用したようである。この空間に関してはメータトーリオンなどと違い、実例が少なく記述も簡潔なために、これ以上のことはわからない。なおこのテトラセロンについて、ヴォクトは語源的には「四つの鍵」と関係はあるが、建築的にはトリコンク（三葉）型の平面形態を指す可能性を指摘している¹⁰³⁾。一方、ギロンは半円形からアプスが三つ突き出した平面形態をもつ教会堂の脇のアプスのいずれかとしている¹⁰⁴⁾、にわかには信じがたい。マンガは「四つのベイ（を持つ建築）」の意味で、中央の一つの方形の空間と三つの周囲の半円形のコンクから構成されるトリコンク型の平面を指すと、ヴォクトと同じ結論に達している¹⁰⁵⁾。この場合、おそらくは教会堂本堂に付属する半独立の三葉形平面の堂が想定できるのだが、堂内に組み込まれた小さなニッチを三つ持つ方形の部屋もテトラセロンと呼ぶのかどうかは不明である。

これらのことから本稿では、各単語の微妙な意味の差を考慮して、メータトーリオン、バラキュプティコン、プロセウカディオ、テトラセロンはそれぞれそのまま残し、単語としての一般性を意識して、コイトーンを「私室」、エウクテーリオンを「礼拝所」と訳すことにする。

●位階：称号と官職

ビュザンツ帝国の宮廷は複雑な身分制度の上に成り立っていたことが知られている。当然、『儀式につ

いて』においてもこの身分制度に対する理解が、重要な鍵となる。しかしこの身分制度は本論分の主題ではなく、論文中でこの複雑な制度を十分な形で取り扱うことは、不可能かつ不必要である。

また同時に『儀式について』を訳すうえで問題となるのは、この複雑な身分制度である。例えば日本語で「衛兵隊長」と訳すことができる単語は、プロトスバタリオスを始めとして幾つかあげられるが、言葉の意味としての「衛兵隊長」と職能としての「衛兵隊長」とが、多くの場合一致しない。その理由はビュザンツ特有の二重の位階による。以下それをみていくことにする。

ビュザンツ帝国の廷臣達は二つの異なる位階によって、秩序付けられていた。一つ目は「物による位階」に属するもので、称号とも言うべき名譽職的な意味合いを持っていた。この称号は西欧の爵位のように世襲制ではなく、皇帝から手渡される「贈り物」あるいは「褒美」¹⁰⁶⁾によって決められる。これは基本的に職務は伴わず終身制であり、年金が給付されるが、官職とある程度連動してはいた。また多くの称号が古代ローマに起源をもつ¹⁰⁷⁾。『クレートロギオン』には全部で18の称号があげられている。このうち本論文において登場するのは以下のとおりである。

マギストロス (第5位)

アンテュバトス (第6位)

パトリキオス (第7位)

プロトスバタリオス (第8位)

スパタロカンディダートス (第10位)

ベステートル (第16位)

シレンティアリオス (第17位)

称号が基本的には実質的な職務を持たないのに対して、実際に官僚として機能していたのが、「言葉による位階」に属する役職であった。これは称号が「贈り物」とも訳すべき物品の授与によって任命される終身制の名譽職であるのに対して、後者は「言葉」によって任命される任期制の官職ともいうべきものである。『クレートロギオン』には7種60個の皇帝直属官をあげている。またこれとは別に宮中の宦官による官職もあった¹⁰⁸⁾。

これらのうち特に注意を要するものについて、以下で触れておく。

ドメスティコスとはもともと幅広い意味を持った単語だったが、『クレートロギオン』においては軍事的なドメスティコスが重要である。これはストラテゴスが地方の軍団の司令官を指すのに対して、中央の皇帝直属の軍団の司令官を指すのに使用された。『クレートロギオン』を始めとする官職の序列を記した史料では幾つかのドメスティコス職が登場するが、『儀式について』において重要な役割をはたしているのは、スコライ軍団長(ドメスティコス・トーン・スコローン)とエクスクービテース軍団長(ドメ

スティコス・トーン・エクスクービトーン)である。この二つは、それぞれ「郊外の(ペラティコイ)」青党と「郊外の」緑党を率いることになっている¹⁰⁹⁾。

デマルコスに対して、『儀式について』においては「都市の」青党と「都市の」緑党を率いる職である¹¹⁰⁾。青党、緑党というのはローマ帝政時代の戦車競争の応援団に起源を持つ。これは青、緑、白、赤の各組が競技を闘っていたことに由来し、当初は、多くの研究者が繰り返し喩えて言うように、現代のサッカー・チームの熱狂的なサポーター集団の様のものであった。しかし次第にこの応援団の組織が社会的重要度を増して党派化するとともに、試合結果などが引き金となって、政治的、経済的要求を主張する叛徒と化すことがあった。532年に首都を大混乱に陥れたニカの乱は典型的な例で、青党と緑党の喧嘩に対する政府の対応がきっかけとなり、喧嘩の当事者の即時釈放を求めた集会が短時間のうちに対立皇帝を選出する反乱にまで発展したものである。この各党派は皇帝が競技に隣席する際に歓呼するなど、宮廷儀礼には欠かせない存在となったが、7世紀以降、戦車競争そのものが衰退するに従って、儀式のための存在に変容した。『儀式について』においては、通常、総称としてデモスと呼ばれる彼等は、ブライポシトスから給料を受け取り、儀式の際に皇帝に歓呼する組織化された存在であった¹¹¹⁾。

以上のような状況を鑑みて、本論文においては特別なものを除き、すべて原語のまま通すことにした。各役職名については、用語一覧を参照されたい。

●教会関係の役職名

宮中における肩書きと同様、教会組織における役職名も複雑な側面を持っている。この分野においても、多くの単語は原語のまま残すことにした。以下特に、気がついたことを記す。

ヘーゲーメノスは修道院内で選出される指導的立場の修道僧のことで、実際には修道院長と訳すことができよう¹¹²⁾。ただし本稿においては、修道院長という言葉が、西ヨーロッパにおけるそれを連想させるため、両者の違いを考慮してあえて音訳することにした。

レフェンダリオスは皇帝と廷臣達との連絡を担当する官吏を指す言葉であったが、教会においては皇帝と総主教の間の連絡を担当する聖職者を指す¹¹³⁾。同様に、宮廷の役職名が教会組織に移植された例としては以下のようなものがある。カルトゥーラリオスはもともと宮廷の文書を担当する官吏を指す単語であり、後にはこの官吏は記録や財務を司るようになった。同様な仕事をおこなう役職を、教会ではカルトフルクスというが、しばしば両者は混同される¹¹⁴⁾。また同様にカストレーシオスも本来、宮廷の宦官で、宮中の晩餐会の食卓を担当していた者を指し¹¹⁵⁾、オスティアリオスも、門番の意味から転じて、後には皇族に廷臣達を紹介する式部官的役割の宦官を指すようになった¹¹⁶⁾。これらの単語は『儀式について』から本論文で引用した箇所においては、教会の役職名として登場しており、宮廷と類似

の役割を負っていたものと思われる。

●服装

服装に関しては、当時と現代の日本との服飾文化の違いが壁となって、やはり適切な訳語を見つけることは困難である。それゆえに、この分野においても原語のまま各単語を残すことにした。

第1章

皇帝の参加する 宗教儀式

1：皇帝の参加する宗教儀式

既に周知の事実ではあるが、キリスト教の宗教儀式は、クリスマスに代表される日付が固定した祭と、復活祭に代表される年毎に日付の動く祭に二分される。正教会では前者を不動暦、後者を動暦と呼ぶ。この分類は、既に見てきたように『儀式について』においては、まったく考慮されていない。しかし『テュピコン』における記述はこの分類をもとに進められている。このため、ここでは『テュピコン』に従って、不動暦、動暦に分けて作業を進めていく。また不動暦を扱う際に9月1日から、不動暦を扱う際に謝肉祭から、それぞれ始めるのも『テュピコン』に準じている。

ここで動暦についてももう少し詳しくみておくことにする。動暦の基準となるのは復活祭である。復活祭は春分の日以降の最初の満月の日の後の最初の日曜日である。それゆえ毎年、復活祭は異なる月日におこなわれる。他の動暦の祭はこの復活祭を基準に、例えば50日後であるとか、あるいは三週前の日曜日というふうに定められている。つまり復活祭が年毎に移動すると連動して、動暦の祭も年毎に動くのである。

そこで週の定義が重要になってくるが、正教会では一週間に対して大変複雑な取り扱いをしている。まず実際に当時の史料を見てみると、週の各曜日を示すのに日曜日から順に「主の日」、「第2の日」、「第3の日」・・・「第6の日」、「残りの日（サバト）」という表現が用いられている。つまり一週間は日曜日から始まり土曜日で終わるわけである。しかし教会で用いる暦では、これとは異なり月曜日から始まり日曜日で終わる一週間が一般的で、日曜日から始まる一週間は復活祭から聖霊降臨祭の間のみ使用される¹¹⁷⁾。もう少し具体的に解説すると以下ようになる。

通常教会では月曜日に始まり日曜日に終わる一週間を用いている。これは謝肉祭が過ぎ、続く「乾酪を断つ週」が終わって四旬節に入っても同じである。それゆえ例えば、四旬節第3週の日曜日はこの週の最後の日である。四旬節第6週の次の週は「神聖にして偉大な週」と呼ばれるが、この週も同様に月曜日、すなわち「聖大月曜日」から始まる。そして週の最後に来る日曜日が、復活祭である。しかし同時に復活祭は、後に続く「光の週」の日曜日でもある。なぜなら「光の週」は日曜日で始まり土曜日で終わるからである。これ以降の各週は聖霊降臨祭まで皆、日曜日で始まり土曜日で終わる。そして聖霊降臨祭の次の月曜日から、再び通常通りの月曜日で始まり日曜日で終わる一週間に戻るのである。

つまり言い換えれば、復活祭は「神聖にして偉大な週」と「光の週」の両方にまたがって存在しており、聖霊降臨祭はどの週にも属さない。ただし名称上は通常、復活祭の日曜日は「聖大日曜日」と呼ばれる。また聖霊降臨祭は「50日目の日曜日」と呼ばれる。これはこの日が復活祭から50日目であるため、こ

のように呼ばれるのであるが、同時にどの週にも属さない為に、「聖大日曜日」というような呼び方ができないためでもある。

さて『儀式について』から不動暦に属する儀式を拾い上げると〔表4〕のようになる。計22の祭日が上がっている。このうち神現祭は前夜に行なわれる準備祭、あるいは前夜祭とも言うべき儀式に関する記述も含まれている。また註釈的に触れられている場合でも、関連ある場合は章番号に記載した。このため受胎告知の祭は直接言及している章がないにもかかわらず、四つの章番号が上がっている。ここで気を付けなければならないのはしばしば『儀式について』の記述では、不動暦の場合の日付が省略されることである。本論文ではヴォクトが註釈で述べている日付に従ったが、これはもともと『テュビコン』や『シュナクサリオン』の記述をもとに割り出されたものである。このために時には、記述内容と日付が一致しないように思われることもある。

同様にして動暦に属するものを選び出すと、15の祭があることがわかる。これをまとめたものが〔表5〕である。ここで「日」の欄に記載してある数字は、その儀式が復活祭を基準にして何日前あるいは後に動いた日におこなわれるのかを表している。

次に『クレートロロギオン』における儀式を見てみよう。すでに述べたようにこの史料のうち、年中行事について語っているのは第4巻のみである。第4巻は「キリストの誕生の日」の記述から始まり、動暦、不動暦の区別なく時間の流れにしたがって、皇帝主催の宴会と関連する儀式が、その種類とは無関係に解説されていく。しかしながらライスケの版の『儀式について』に納められている『クレートロロギオン』は、この第4巻の記述が9月までしかなく、途中で終わっているものと思われる。その間に触れられている儀式のうち、教会と関係のあるものを抜き出してまとめると〔表6〕となる。

このうちで『儀式について』では記述がなく、『クレートロロギオン』にのみ見ることができるものは、「謝肉祭の次の火曜日」と「5月8日：福音書作者聖ヨアネスの記念日」、「8月16日：聖ディオメデスの記念日」である。また「聖大土曜日」と「8月29日」の記述内容に食い違いが見られる。

以下、前章で説明した三つの史料を比較検討しつつ、それぞれの祭日の皇帝の行動を追っていくことにする。

1-1 不動暦の祭

聖母生誕祭

聖母生誕祭は文字通り聖母の生誕を記念する祭である。全部で五つあるマリアの大祭の内の一つに格付けされ、毎年9月8日におこなわれる。本来イェルサレム近郊、マリアの両親ヨアケイムとアンナの家があったとされる場所で5世紀に始まった祭で、6世紀にはコンスタンティノポリスにも伝わったようである¹¹⁸⁾。

まず『テュビコン』の記述¹¹⁹⁾を見ていくことにする。この祭は「最も神聖な大教会（ハギア・ソフィア）のそばにある荘厳な彼女（＝聖母）の館」¹²⁰⁾でおこなわれる。そして祭の前夜に総主教の参加する晩禱、それに続く徹夜の勤めがある。これは大教会、すなわちハギア・ソフィアでおこなわれる。そしてあくる日、祭の当日にハギア・ソフィアから行列を組んで行進する。

「そして行進はフォロス（コンスタンティノスのフォルム）へ上る。聖歌隊はそこで『父の栄光』を歌う。再び向きを変えて行進はカルコブラティアへ向かい、総主教が入場する。」¹²¹⁾

そののち聖体礼儀（ミサ）がこの教会でおこなわれる。これらのことから聖母生誕祭の聖体礼儀は、カルコブラティアの聖母の教会でおこなわれたことがわかる。そしてこの教会とハギア・ソフィアとの間の距離は、100mと離れていない。

また『クレートロロギオン』では以下のように述べられている。

「9月8日には、最高に神聖な女主人、我等が神の母、そして処女マリアの生誕の行進をおこなう。皇帝は習慣通りに、シュンクレートス（元老院）全員とカルコブラティアの聖母の教会に進む。そして神聖な勤め（聖体礼儀）をおこない、習慣通りに金のスカラマンガオンを纏った皇帝は馬で戻り、ユスティニアノス・トリクリノスの別れた食卓で宴会を催す・・・」¹²²⁾

一方、『儀式について』ではこの祭に関して独立した章は存在しない。ただし第1巻第1章後半にまとめた記述がある¹²³⁾。それによると皇帝は宮殿内で準備をし、カルケーを通り、ハギア・ソフィアの南側、神聖な井戸と呼ばれるところに進む。そして神聖な井戸の堂に入ると、神聖な井戸の遺物に跪く。そしてここからハギア・ソフィアへと入る。教会内で総主教と挨拶を交わすと皇帝は

「そのあと、ペーマの右側の部分に向けて開いている門から入る。そこでシュンクレートス全員は皇帝に歓呼する。そこから神聖な扉に入ると、蠟燭を手に三回跪いて神への感謝を表し、残りは型通りにおこなう。その後で、総主教はカストレーシオスの手から香炉を取って皇帝に渡す。そして皇帝は祭壇の周りに香を炊く。香を炊くと総主教と皇帝は祭壇の前に立ち、長輔祭が大きな声で祈りを捧げる。総主教が祈り終わると、教会の儀式はすべて終わる。皇帝は総主教と十字架と福音書に先導されて出る。」¹²⁴⁾

そして一行がアンボをすぎて門の前に来ると、皇帝と総主教は再度祈り、そののち共に皇帝の門から出る。ハギア・ソフィアのナルテックスで総主教と別れた皇帝の一行は、フォロス（コンスタンティノスのフォルム）へと進む。フォロスにはコンスタンティノスの紫色の円柱が立っているが、その基壇の上に立つ。宮廷の高官達も同じ基壇の上に立つ。

総主教が彼に従う人々の行列と共にフォロスにやって来る。彼等は柱の基壇へと進む。

「（十字架と福音書を従えた総主教が）皇帝の上っている第一の基壇のところに来ると、プライボシトス（侍従長）は皇帝にいつもどおりの蠟燭をしきたりどおりに返す。（皇帝は）命ある十字架の畏敬の念を起こさせる聖像に跪き、神聖な福音書と価値ある十字架、その後に総主教に接吻する。そして皇帝は以前いたところに立ち、十字架はこの基壇のたいらになった台の上に据える。総主教は福音書と部下の輔祭達と聖歌隊を従えて、この柱の礼拝所に上る。つまり聖コンスタンティノスののである。プライボシトスの合図で二つの党（青党と緑党）は祭典の始まり（のトロバリオン）を歌う。それを三回繰り返すと、輔祭がこの礼拝所の左側の（高貴な）部分の窓を通して跪き、いつもの祈りをあげる。そして実際に祈りがおこなわれ、それ（祈りの最後の言葉）を総主教が大声で発生すると、皇帝は立っている所から彼に暇乞いをし、家臣達の行進と共に、カルコプラティアの最高に神聖な聖母の教会に下りていく。そしてその教会のナルテックスにおいて腰掛ける。・・・（中略：臨席する者について）・・・そして府主教は（ナルテックスを）通り抜けようとするとき、始めにおこなった御辞儀の形式に従って、再び跪く。その後、総主教の行進の先導者と聖歌隊が入って来て、その後で総主教が十字架と福音書と共に入場する。

そこで皇帝は立ち上がり、彼（＝総主教）のところへ行き、接吻する。両者は皇帝の門の前に立ち、慣例の祈りを総主教がおこなう。前述のことに従い、入場をおこない、皇帝はベーマに入り、祭壇の上に献納品を置き、この至聖所の左側の部分を通して外に出る。そしてこの教会の側廊を通る。側廊にはシュンクレートス全員がいて、皇帝を称賛する。皇帝達は総主教とクーブークリオン達と共にトロピケー（二本の柱で支えられたアーチ状の開口、あるいはヴォールト天井のこと）を通り、（聖遺物を納めた）神聖な箱の（ある堂の）祭壇（のある所＝至聖所）に入る。そして再び蠟燭を手に三回跪いて神への感謝を示し、神聖な箱にもう一つの献納品を置く。その後、同じ教会の左側の礼拝堂で蠟燭を手に祈り、いま一つの献納品を神聖な箱に置く。そしてそこから出て、神聖な箱のトロピケーに入り、総主教に接吻して暇を乞う。そして皇帝は彼の金の刺繍のある紫のスカラマンガオンを脱ぐ。福音書の朗読と祈りの後で再び総主教はこのトロピケーに入り、皇帝に冠を被せ、習慣となっている祝福を与える。つまり献上品と香とを皇帝からの献納品に対して渡す。上述のようにこれら全てのことをおこなう。そして彼らは接吻をすると、（皇帝は）彼（＝総主教）に暇乞いをし、総主教は皇帝達の（いる所）から退出する。

その後、皇帝は退出し、教会の側廊で、マギストロス達、アンテュバトス達、パトリキオス達、そして

他のオフィキアリオス達の歡呼を受ける。そしてプライボシトスの合図で儀式長官が言う：「御命令を」。シュンクレートスが退出し、皇帝達も一緒に出る。そしてポルティコで馬に乗り・・・」¹²⁵⁾ 宮殿へと戻る。

以上だいたい長い引用となったが、記述の密度に差はあるものの『クレートロギオン』、『儀式について』、『テュビコン』のそれぞれの史料でこの日の儀式の内容に大きな差がないことがわかる。例えば聖母の教会でおこなわれる儀式の内容をみると、『儀式について』では祭壇に献納品を納めた後、付属の礼拝所をまわってから、「神聖な箱のトロピケー」で福音書の朗読と祈りに参加することになっている。しかし、他の二つでは聖体礼儀がおこなわれるとなっているが、『儀式について』では領聖（聖体拝受）など聖体礼儀ならではの動作については、何も記されていない。

十字架挙栄祭

十字架挙栄祭は4世紀にイェルサレムで始まり、遅くとも7世紀には首都に伝えられたと考えられている。9月14日に十字架を礼拝するこの祭は、コンスタンティノス1世が政敵マクセンティオスとの決戦の前に十字架の幻影を見たこと、皇太后ヘレネがキリストが磔刑に処せられた真の十字架を発見したこと、ゴルゴタの丘に聖墳墓教会が建立され盛大な献堂祭がおこなわれたこと、などを背景にして成立した。そして12大祭の一つに数えられるほどに、発展した¹²⁶⁾。

この祭典で使用される「価値ある木」とは、キリストが受難の際に掛けられた十字架の破片から作られたとされる聖遺物で、小さな十字架である¹²⁷⁾。

『テュビコン』をみるとこの祭は¹²⁸⁾、直前の土曜日、日曜日に準備祭をおこない、前夜に総主教の参加する晩禱と徹夜の夜の勤めがおこなわれる。当日は、まずアンボで詩編のトロバリオン（詩の一節を繰り返す形式の聖歌）が低音で歌われる。次いで総主教が入場する。この総主教の入場のときに、宝物庫係が十字架の遺物を運び祭壇の上に置く。そして聖歌隊がアンボに上り、トロバリオンを6曲、順に歌う。そののち

「・・・総主教はアンボに上る。（彼は）自分の前に価値ある木をいれものごと捧げ持っている。そして（彼が）上ったあとで、長輔祭が総主教からオモフォリオン（肩にかけられる帯上の布）をはずす。そして（総主教は）膝を曲げて地面に屈み、土曜日や日曜日と同様に御辞儀をし、アンボで祈る。そののち立ち上がると、手で十字架をつかみ、それを持ち上げて掲げ、示す。シュンケロス（顧問僧）は後ろからそれを助け、人々に向かって叫ぶ：主よ憐れみたまえ。一回目をおこなった後、二回目、三回目と持ち上げる。三回目に持ち上げた後で、総主教はベーマに下りて、価値ある木に跪く。」¹²⁹⁾

『クレートロギオン』には9月14日、十字架挙栄祭がおこなわれ、

「低い聖歌のとき、夜の勤めの後に皇帝はハギア・ソフィアの教会へ行く。最も神聖な木を三回、掲げ
るのに参加し・・・」¹³⁰⁾

宮殿に戻ると書かれている。

これについて『儀式について』第22章には、はるかに詳細な記述を見ることができる。

「・・・皇帝はクーブクリオンの者（部屋付の侍従）達とバシリコス（護衛兵）達に先導されて、マ
ンナウラ（の建物）とその高い通路を通り、木の階段を上って大教会（ハギア・ソフィア）のギャラリー
に入る。それから皇帝は蠟燭を灯し祈ると、右側のバラキユプティコン（？）に入る。・・・（中略）・・・
皇帝は暫く腰を下ろしているが、出ると小さなセクレトン（祭具室）に行く。ここには価値ある木が保管
されている。皇帝は待つ。身廊で（聖歌）「栄光は天の神に」が始まると、皇帝はクーブクリオン達に
先導されて進み、価値ある木に跪く。価値ある木に跪くと出て、大きなセクレトンに入る。プライポシ
スは彼に受け皿のついた（？）行進用の蠟燭を渡す。このセクレトンで皇帝を、受け皿のついた（？）行
進用の蠟燭を持ったパトリキオス達とシュンクレートスが迎え、彼等はひれ伏す。その後皇帝はクーブ
クリオンの高官達やパトリキオス達、シュンクレートスの皆と共に、価値ある木に同行し、大きな螺旋階
段を下りて高貴な（左の）部分へ曲がり、復活祭の銘板のある学校を通過して段を下り、ナルテックスの
大きな門に入る。そして皇帝の門に到着する。そこに立ってプライポシスに（行進用の）蠟燭を返す。彼
はそれを持っていて、（皇帝は）彼から別ののをとって折りこれ（二回目に入ったもの）もプライポシ
スに返す。プライポシスはこれを儀式長官に（渡す）。それから行進用の蠟燭を再びプライポシスから
取って、汚れなき福音書に置き、総主教と身廊の中央を通過して、ソレアからアンボの右側の部分に入る。
パトリキオス達は蠟燭を持ったまま、ソレアに留まる。

皇帝は神聖な扉の前に立つと、例の（＝行進用の）蠟燭をプライポシスに戻し、彼から別のを取って
折り、彼にそれも返す。そして至聖所に入ると、価値ある木に跪き、それから出る。そのあとでソレアを
通過してアンボに三、四段上り、蠟燭を持ってそこに立つ。クーブクリオンの高官達はソレアに、皇帝に
向かって立つ。高官のプロートスパタリオス達はアンボの左に、ベンチの上に立つ。マンガラピオン（護
衛兵の一部隊）の者達は宦官のプロートスパタリオス達の後ろに、同じくアンボの左側に立ち、皇帝の前
を誰かが通らないようにする。総主教が貴重な木と共にアンボに上ると、皇帝は行進用の自分の蠟燭を
プライポシスに返す。そして別のを取って折り、それ（蠟燭）と共に立つと、（総主教が）それ（貴重な
木）をアンボの四つの方角に持ち上げるまで、立っている。それから皇帝は蠟燭をプライポシスに返し、
皇帝と総主教の二人は下りて、ソレアを通り至聖所に入る。価値ある木を示されて、皇帝は折り、貴重な
木に跪き、至聖所の横から出る。総主教は彼に神聖な井戸までついて行く。そこでお互いに接吻をして皇
帝は自分の行進と共に、カルケーの小さな門を入り・・・」¹³¹⁾

この祭に関しても三つの史料の内容は、一つの点を除いて、互いに矛盾しない。それはアンボ上で総主
教が十字架を手にとって掲げる際の記述である。『テュビコン』と『クレートロロギオン』では、三回持
ち上げるようになっており、『儀式について』では、四つの方角に向かってとなっている。この動作は実
際には、二つの記述を組み合わせた形式でおこなわれたと考えられている¹³²⁾。つまり東西南北の大地
の四隅に向かって三回十字架を持ち上げるのである。

福音書作者聖ヨアンネス

9月26日は福音書作者聖ヨアンネスの死を記念した祭がおこなわれる。『テュビコン』には、この日
「大教会のそばのこの使徒の聖域で」¹³³⁾ 儀式がおこなわれ、おそらくは大教会から福音書作者の教会
へ行進がおこなわれることが記されている。

『儀式について』には第2巻第13章に以下の簡単な記述があるだけである。

「9月26日。同様に（儀式を）執り行う。福音書作者聖ヨアンネスの記念日である。皇帝達はディッ
ピオンのこの聖人の畏敬の念を起こさせる教会へ行く。」¹³⁴⁾

ジャンンによれば、ディッピオンというのはメセー（中央大通り）の始まるあたりからヒッポドロモ
スにかけての一角のことで、多くの史料においてディッピオンの聖ヨアンネス教会は「大教会のそばの」
と形容されている¹³⁵⁾。ゆえにこの二つの記述は同じ行事について述べていて、この日、福音書作者聖
ヨアンネスの記念祭が皇帝参加のもと、ディッピオンの彼の教会でおこなわれたことがわかる。

聖デメトリオス

『テュビコン』の10月26日の項¹³⁶⁾には、二つの大きな祭典が書いてある。一つは「大殉教者聖
デメトリオスの勤め。彼のための儀式をデウテロンにあるこの殉教者（の教会）でおこなう。」¹³⁷⁾

となっており、もう一つは740年の地震の記念祭で、総主教と共に大教会からフォロスを経てブラゲ
ルナイの聖母の教会まで行進し、そこで聖体礼儀をおこなうことになっている。

一方、『儀式について』では、第21章に以下の記述がある。

聖デメトリオスの祭と行進の際には、皇帝は総主教と大宮殿の黄金の八角の広間、クリュソトリクリノ
スで会い、ヒッポドロモスの方向へ、ラウシアコス、ユスティニアノス、スキュラといった建物をへて進
み、向きを変えてマルキアノスの通路を進み使徒聖ペトロスまで行く。

「・・・まず総主教が至聖所まで入り、いつもと同じ祈りを行い、トロバリオンの聖歌を捧げる。そし
て総主教は神聖な福音書を持って至聖所から出ると、この禮拜堂の皇帝の門へ行く。もちろん長輔祭は行
進用の十字架を運ぶ。皇族達はプライポシスから蠟燭を受け取り、三回礼拝して神への感謝を表し、そ

して福音書と十字架に接吻し、輔祭は香を焚く。皇帝は総主教と連れ立って教会から出る。」¹³⁸⁾

そして一行はトロバリオンを歌いながら行進してクリュソトリクリノスに入り、

「・・・クリュソトリクリノスの中央を歩いて行列と共に、東の門から出る。マギストロス達、アンテュバトス達、パトリキオス達、オフィキアリオス達は聖デメトリオスの教会の向かって、言うなれば左側の部分に、クーブークリオンの方達はヘーリアコス (=テラス) の東側に沿って、皇帝は総主教と共に教会のプロピュライアに立つ。そしていつもと同じ勤め、つまり献堂の祭の入場がおこなわれる。総主教は至聖所に入り、皇帝は身廊の中央を歩いて出て、そこのテトラセロンの中に立ち、福音書の朗読を待つ。

福音書の朗読の後、銀のギャラリーの門から出て・・・」¹³⁹⁾

クリュソトリクリノスへ戻る。この日は皇帝と総主教が夕食を共にすることが書かれている。

さてここで総主教の行動に注目してみよう。『テュピコン』をみると総主教は「第一の刻」にハギア・ソフィアでブラケルナイへの行進に先立つ儀式を始める。『儀式について』では、「朝の第二の刻」に皇帝は準備を始めて総主教を待つ。ここで従来のように、『儀式について』第21章が10月26日に関する記述であると考えれば、非常に素朴であると同時に重大な疑問が湧いてくる。そも、ブラケルナイは町の北西の角、テオドシウスの市壁が金角湾につきあたるあたりのことで、ハギア・ソフィアからは直線距離でも4kmほどある。当時は日の出から日の入までを12等分して時間の単位としていたため、「第一の刻」と「第二の刻」の間は、季節によって異なるが、約1時間である。はたして総主教は、ブラケルナイまで行進し、そこで儀式をおこなった後で、大宮殿での儀式に間に合ったのだろうか。それとも皇帝は総主教が到着するまで、何時間も待ったのだろうか。なおちなみにデウテロンとは、コンスタンティノスの市壁とテオドシウスのそれとのあいだ、メセーに沿ったあたりのことで、デウテロンの聖デメトリオス教会はむしろブラケルナイの方がはるかに近いことになる¹⁴⁰⁾。

ヴォクトはこれとは別に、この日、大宮殿内の聖ペトロスの教会で儀式がおこなわれることに注目して、『儀式について』第21章で取り上げられている儀式は、聖デメトリオスの記念祭ではなく、聖ペトロスと聖パウロスならびに他の聖人の記念祭、つまり10月29日のことであるとの論を展開している¹⁴¹⁾。しかし『テュピコン』のこの日の記述を読むと献堂記念祭がオルファノトロフェイオンの聖パウロスの教会でおこなわれることになっている¹⁴²⁾。この儀式への、総主教の参加については『テュピコン』には何も書かれていない。またこの教会のあった場所は、旧ビュザンティオンのアクロポリスから金角湾沿岸にかけての何処かということしかわからない¹⁴³⁾。

『儀式について』には大宮殿の聖デメトリオスでおこなわれるのが「献堂の祭」と書かれている。つまりこの第21章に書かれているのは「大宮殿の聖デメトリオスの献堂記念祭」として見るとするのが適当である。しかしながらこの祭が、10月26日におこなわれたのか、あるいは10月29日なのか、また

他のいつかなのかを判断する材料は、残念ながら我々の手元にはない。納得がいかない箇所があることを承知の上で、ここでは従来の説と同様、この章は10月26日に関する記述とみなすことにする。

聖コスマスと聖ダミアノス (神聖な医師達)

『テュピコン』を見ると、11月1日は聖コスマスと聖ダミアノスのための儀式がダレイオス地区の二人の教会であり、大教会からそこに行進すること¹⁴⁴⁾が書かれている。

一方、『儀式について』第2巻第13章の記述は、再び骨子のみである。

「11月1日。同様に(儀式を)執り行う。神聖な医師達 (=聖コスマスと聖ダミアノス) の記念日である。皇帝達はタ・バシリスクーのこの聖人達の教会へ行く。」¹⁴⁵⁾

タ・ダレイウー (ダレイオス地区) とタ・バシリスクー (バシリスコス地区) とは共に、聖ソフィア港、聖セルギオスと聖パッコススの教会とヒポドロモスの近く、マルマラ海から少し入ったあたりに隣り合っていた¹⁴⁶⁾。他の史料の記述なども踏まえたうえで、ジャンナは二つの隣り合った地区に二つの同じ聖人の教会があったのではなく、一つの教会 (おそらく正確にはダレイオス地区にあった聖コスマスと聖ダミアノスの教会) が二つの名で呼ばれていたと考えている¹⁴⁷⁾。よってこの二つの記述も、同じ行事に関するものと見ることができる。

大天使ミカエル

実は『儀式について』にはこの祭についての独立した記述はない。ただ第20章の最後に、ネア献堂記念祭と同じ要領で、「11月8日(天)軍の長(ミカエル)の祭」¹⁴⁸⁾をおこなうこと、その際に教会内の「(天)軍の長(ミカエル)の礼拝所」を使用することが述べられている。

一方の『テュピコン』は、この11月8日が大天使ミカエルの記念日で、大教会から行進してフォロスで礼拝し、アッダスの聖ミカエル教会で聖体礼儀をおこなうことを述べている。そしてそれ以外にも記念祭を執り行う教会を四つあげており、その中に「新しい宮廷の教会」¹⁴⁹⁾も入っている¹⁵⁰⁾。

ネア、すなわち「新しい」と通常呼ばれるこの教会は他にも「新教会」、「新大教会」などの名で同時代の史料にでてくることが多い。二つの史料で呼び方は異なるが、この日、同じ教会で大天使ミカエルの儀式がおこなわれたことがわかる。

聖母進堂祭

ユダヤ教には生まれた子供を、シナゴークに始めて連れて行く際に祝い事をする習慣がある。11月21日の聖母進堂祭は、マリアがこのしきたりにしたがって、始めてユダヤ教神殿に行ったことを記念する

祭である¹⁵¹⁾。おそらく6世紀にイェルサレムでこの祭は始まり、10世紀にはコンスタンティノポリスでも年中行事の一つとして定着していた。この祭は五つのマリアの大祭の一つで、『コンスタンティノポリスのシュナクサリオン』によると皇帝も参加して、カルコプラティアの聖母の教会で儀式がおこなわれた¹⁵²⁾。

だが『儀式について』には11月21日に関する記述がまったくない。マリアの五大祭、あるいは12大祭のうちで『儀式について』に記述がないのは、この祭だけである。もちろん失われた第10章から第17章にその記述があった可能性は否定できない。しかしより古いグループ2に属する部分には記述がまったくなく、また第37章にも聖母進堂祭の時の皇帝の服装に関する記述は見ることができない¹⁵³⁾。バリーは第37章の成立を900年前後と考えている。もしもポルフュロゲンネトスが聖母進堂祭に参加したとするならば、一つの仮説として以下のような可能性が考えられるだろう。聖母進堂祭は帝都に定着したのが予想よりも遅く、グループ2が成立した際にはまだ皇帝は祭に参加していなかった。その後、皇帝もこの儀式に参加するようになり、グループ1が成立したときにはその内容が記録されたが、この部分は失われてしまった。そして第37章はグループ1が成立した際に、改訂されたが、この祭に関する部分だけ改訂作業から抜け落ちてしまった。あるいはもう一つの可能性として、この祭が帝都に定着するのはさらに後の時代のことで、単にコンスタンティノス7世の時代には、聖母進堂祭には皇帝は参加しなかったとの見方もできる。

いずれにせよ『テュビコン』には、この日、総主教と共に大教会から行進がカルコプラティアの聖母の教会へ進み、そこで聖体礼儀がおこなわれる旨、記されている¹⁵⁴⁾。ちなみに前夜に関連した儀式がおこなわれない祭は、マリアの五つの大祭のうち、この聖母進堂祭だけである。

生誕祭

12月25日におこなわれるこの祭は、イエス・キリストの生誕を祝うもので、通常クリスマスといわれる。12大祭のうちの一つであると共に、教会の暦の上で最も重要な祭の一つである。この祭典は4世紀始めに西方でおこり、5世紀にはキリスト教世界のほとんどに広まった。コンスタンティノポリスでは380年に聖誕祭を祝ったとの記録が登場する。東方でこの祭が浸透するのに比較的時間がかかった理由は、すでに神現祭のなかにキリストの生誕が含まれていたためと考えられる¹⁵⁵⁾。

『テュビコン』を見ると以下のことがわかる。聖誕祭は前に「神聖な祖先達の日の前の日曜日」、「神聖な祖先達の日曜日の前の土曜日」、「聖誕祭の前の日曜日(=神聖な祖先達の日曜日)」¹⁵⁶⁾、と大教会で準備祭があり、さらに22日から24日までの準備祭が大教会である¹⁵⁷⁾。23日、24日の晩には、晩禱と夜の勤めが最も長い形式でおこなわれる。25日には大教会で聖誕祭の聖体礼儀がおこな

れ、さらに晩禱がある。続く26日はブラケルナイの聖母教会で、また直後の土曜日は大教会、日曜日はカルコプラティアの聖母教会で関連した儀式がおこなわれる¹⁵⁸⁾。

一方これに対して『クレートロロギオン』が生誕祭に関して述べているのは、12月25日に大宮殿内の19寝台のトリクリノスでおこなわれる大宴会の次第が中心になっている¹⁵⁹⁾。

『儀式について』は生誕祭について、第1、第2、第23の各章を割いている。このうち第2章は、皇帝が大宮殿からハギア・ソフィアに向かう際に6回、各党のデーモス達の歓呼をうけ、大教会から戻る際に5回、同様の式典が催される様子を書いており¹⁶⁰⁾、教会での皇帝の行動には直接関係がない。

すでに述べたように第23章はグループ2に属し、より古い時代の記録をもとにしている。そして第1章はコンスタンティノス・ポルフュロゲンネトスによって新しく書かれたものである。第1章のこの部分は、おそらく『儀式について』全文中最も重要な箇所の一つである。生誕祭だけでなく神現祭、復活祭、聖霊降臨祭、変容祭も同じ次第に従っておこなわれる旨記されているからである¹⁶¹⁾。ここでは以下、長くなるがこの第1章を第23章と比較して見てみることにする。

まず大教会に行くまでに大宮殿内のどのような礼拝所、あるいは教会を訪れるのかを見てみる。

第一章では以下の記述を見ることができる。

「そして皇帝は最高に神聖な聖母の最初に建設された教会(=ダフネー宮の聖母教会)に行き、ライボシトスから蠟燭を受け取る。これはクービクーラリオスがライボシトスに渡したものである。そして蠟燭と共に三回跪いて神への感謝を表す。その後、前述のように隣にある聖三位一体の礼拝所に行き、そこでも蠟燭を手に三回跪いて神への感謝を示す。それから聖遺物の保管されている狭い場所(ステナキオン)に入り、そこでも蠟燭を手に三回跪いて神への感謝を示す。次に彼等は退出し、洗礼堂に行く。そこには三つの大きな美しい十字架がある。ライボシトスの合図で、クービクーラリオス達は、そこに皇帝が手に持っていた蠟燭を固定する。その後・・・(中略)・・・それから、皇帝はライボシトス達と第一の殉教者聖ステファノスの教会に入り、蠟燭を手に三回跪いて神への感謝を示し、聖コンスタンティノスの大きく、美しさに満ち、価値に満ちた十字架を拜する。そしてそれが終わると、ダフネーの私室に入り・・・」¹⁶²⁾

これに加えて、皇帝がスクレーのトリクリノスのそばの聖使徒の礼拝堂のプロピュライアの中で、蠟燭と共に三回跪いて神への感謝を示すことも、同様に記されている¹⁶³⁾。

これに対して第23章では、

「そこで彼らの先導で、皇帝はダフネーを通り、聖三位一体に入り、そこで蠟燭に火を灯し、ペーマの脇を通って出て、聖遺物の保管場所に入り、そこで蠟燭を灯し、同様に洗礼所の十字架の前でも蠟燭をつける。・・・(中略)・・・(皇帝は)聖ステファノスに入りそこで蠟燭に火をつけて祈り、そこから出

て・・・」¹⁶⁴⁾

となっている。

以上を比較して見ると、第1章と第23章とでは、個々の部分で記述の内容に矛盾はないが、第1章の方が細部まで記されていることがわかる。また上記の聖母の教会のように省略、あるいは記述が抜け落ちている箇所も多い。

さて続いて大教会での儀式に関する記述を見ていこう。当時の教会での儀式は、少なくとも皇帝にとっては、小聖入から始まった。小聖入¹⁶⁵⁾は、御言葉の礼儀を導く行進をさす。動作としては、現在では通常、聖職者が福音書を祭壇からテンプロンの北側の扉を経て、身廊へ持ち出しテンプロンの中央の扉を通して祭壇に戻す、というものである¹⁶⁶⁾。これは象徴的には、キリストのロゴス（御言葉）への体現を表すものである¹⁶⁷⁾。

しかし実際には6世紀以前の段階では、儀式は大がかりな入場によって始められた。これはナルテックス、あるいはアトリウムに集まった聖職者と信徒が、共に福音書を奉じて教会の堂内に入場し、福音書を祭壇上まで運ぶものであった¹⁶⁸⁾。証聖者マクシモスは「神聖な集会への入場」¹⁶⁹⁾、あるいは「教会への入場」¹⁷⁰⁾と述べている¹⁷¹⁾。またゲルマノスは儀式は交唱聖歌で始まり、「福音書と共に入場する」¹⁷²⁾と述べている。このような形式の小聖入は、少なくとも主教が参加するような大きな儀式において、遅くとも12世紀までは執り行われていた可能性がある。おそらく、8世紀から12世紀の間に、かつて儀式の始まりに行われていた、聖職者と信徒全員の教会への入場が変化し、現在の形に近い福音書の信徒への提示へと変化したものと考えられている。

それでは『儀式について』の記述を見ていくことにする。まず第1章である。

皇帝は青銅門（カルケー）、アウグスタイオン、ハギア・ソフィアの時計堂（ホーロロギオン）を通って進む。この間にデーモス達の歓呼がおこなわれる。

「そしてそこからこの場所へと皇帝はホーライア・ビュレーを経て入る。ヴォールト天井の下に、言い換えればナルテックスの前室の中に、釣り下げられた目隠し（カーテン）の中で、侍従（プライポシトス）が王冠を外す。その時、総主教はナルテックスの扉で、仕来り通り従者や部下と共に待つ。皇帝は冠を外した後に、総主教の方へと進み、まず最初に輔祭が支える神聖な福音書を礼拝する。そして総主教に挨拶をし、接吻をする。そして皇帝の門（バシリケー・ビュレー）まで行く。そこで三回、蠟燭を手に神を感謝を込めて礼拝する。総主教が祈りを捧げ終わると、入場が行われる。錫やすべての前出の宝物が入場し、身廊の左右の決められた場所に位置する。ローマ人の標識や旗印は互いにソレアの横に並び、聖コンスタンティノスの十字架はペーマの右側の部分に立つ。マグストロス達、アンテュバトス達、他のシュンクレートス達はバシリコス・アントロポス達と共に、身廊の右側の部分、決められたところに立つ。そこを皇帝

達が通過する。

皇帝は神聖な扉に、紫色の一段高くなったところにつく。総主教だけが障壁の内側に入り、神聖の扉の左（高貴な）側に位置する。蠟燭と共に三回跳き、皇帝達は神への感謝を表し、そして総主教の占めている神聖な扉に跪てから入る。祭壇のところに来ると神聖な布の聖像に接吻する。もちろん総主教がこれを持ち上げて、皇帝達に接吻するよう促すのである。これがすむと習慣通り、二枚の白い聖体布を祭壇の上に広げ、総主教の手によってそこに戻される二つの神聖な杯、二つの神聖な丸い盆と神聖な産着に跳く。そしてその後で、この神聖なペーマの右側の部分を通して、皇帝達は総主教と共に丸い所（アプス）に入る。ここには黄金の神聖な十字架がある。ここでも再び慣例どおり、蠟燭を手に三回跪いて神への感謝を表す。それから総主教が大きな皇帝に香炉を渡し、この十字架に香を焚き、総主教に接吻して暇乞いをし、メータトーリオンの前にある礼拝所に入る。ここでも蠟燭を手に三回跪いて神への感謝を表し、我等が主と神の受難の象徴がすべて刻まれている価値ある十字架に接吻し、メータトーリオンに入る。」¹⁷³⁾

一方の第23章では以下のようにになっている。

「（カルケーの大きな門、アウグスタイオンを経て）・・・皇帝がナルテックスの前に入ると布（カーテン）の中で、プライポシトスが皇帝の頭から王冠をはずし、皇帝はナルテックスに入る。そして彼を総主教が迎える。お互いに跳き接吻した後で、二人は蠟燭を掴み皇帝の門まで通り過ぎ、皇帝はそこに立って蠟燭を灯し、総主教は神の典礼の入場の祈りを捧げる。皇帝はそれを儀式長官に戻す。そして皇帝は汚れなき福音書に接吻して、身廊の中央を通って入り、アンボの横とソレアを通り過ぎる。神聖な扉の前に立ち、蠟燭をプライポシトスから取って祈り、それを再びプライポシトスに戻すと至聖所の中に入る。祭壇に二枚の聖体布を広げると、二つの神聖な杯、二つの神聖な丸い盆、主の産着に接吻する。その後、皇帝はプライポシトスから献納品を取り、これを祭壇の上におく。それからペーマの横を通って退出し、メータトーリオンに入り、蠟燭をつける。」¹⁷⁴⁾

ここでも先ほどと同様の傾向、第1章の記述の方が詳細であること、を確認できる。大筋において再び両者は、ほぼ一致するが、実のところ献納品に関しては第1章には記述がない。第1章が五つの祭典に共通する部分をまとめた点に、このことが起因するのかは不明である。

この後、御言葉の礼儀の中心となる聖書の朗読や聖歌の合唱がおこなわれるが、これに関する記述は『儀式について』にはない。皇帝はメータトーリオンの中で、これらに耳を傾けたものと思われる。

つぎにおこなわれるのは大聖入である。大聖入¹⁷⁵⁾とは即ち、聖体拝受を導く行進のことである。現在は実際のところ、ケルビコンと呼ばれる聖歌とともに、輔祭が聖体をプロテシスから身廊に運びテンプロンを通して祭壇に運ぶ動作をさす。これは一般には、キリストの聖餐への体現化を象徴するものとみなされている。しかし実質的には、信者から納められた奉納品の祭壇への搬入が始まりであると考えられて

いる。マキシモスはこの動作を「神聖な神秘の入場」¹⁷⁶⁾と書いているが、ゲルマノスはより後の時代の記録であるにもかかわらず「輔祭による準備のためのプロセッション」¹⁷⁷⁾と表現している。「大聖入」という用語は12世紀の「アテネのディアクシス」以後、使用されるようになったようである。初期においては、天上の聖餐への天使達のプロセッションを表現したものと、みなされていたが、後の時代では、キリストのイェルサレムへの勝利の入場と同一視されるようになった¹⁷⁸⁾。

この動作について第1章は以下のように記述している。

「祭壇に神聖な贈り物を運ぶときになると、ブライボシトス達は入って皇帝達に注意を促し、彼等に彼等自身のクラミュスを着せる。皇帝達は自分達のクラミュスをつけ、なにかぶらずに出る。そしてこの教会の右側の部分を、クーブクリオンとシュンクレートスと共に、錫や他の宝物を引き連れて通り、アンボの後ろまで進む。そこで神聖な宝物達は待ち、そこに皇帝のあかりを置いて火をつける。皇帝達がそこに来ると、ブライボシトス達があかりを取って皇帝達の手に戻す。皇帝達はあかりを手にシュンクレートスとクーブクリオンと神聖(な贈り物)を護衛して行く。錫や他の宝物はそれぞれの規則に従って立ち、皇帝達はソレアを通して進み、神聖な扉の外に立つ。第一の皇帝が右に、第二のが左にである。彼等は自分達のあかりを神聖な扉の柱につける。神聖(な贈り物)はソレアに入り、そこにとどまる。長輔祭が来て、皇帝達に、それから総主教と祭壇の側の皆に香を振る。その後、神聖(な贈り物)の全員が入り、全員が入った後で皇帝は、総主教に暇乞いをしてペーマの右側の部分の外を通して、メータトーリオンに入る。」¹⁷⁹⁾

「神の典礼をおこなうにあたっては、神聖(な贈り物)が通り過ぎるときに、皇帝はパトリキオス達や他の高官達に先導されて出て、身廊の横を下り、運んできた蠟燭が立っている所へ進み出る。皇帝は自分の蠟燭の立っている場所に近づく。シュンクレートスは横に並んでいて、その中央を通る。それ、つまり蠟燭を掴むために近づいて、ブライボシトスがそれを掴むと、皇帝に渡し、それを掴むと戻って、高官達に先導されて、彼等の後ろを進む。神聖(な贈り物)のを先導してソレアを通り、神聖な扉の脇に来る。蠟燭をブライボシトスに返すと、ブライボシトスはそれを、神聖な扉の横のソレアの上に置く。その脇に立って皇帝はそこで神聖(な贈り物)を待ち、皇帝と総主教は互いに跳く。

再び皇帝はメータトーリオンに入る。」¹⁸⁰⁾

先行する部分と同様、第1章の方が詳細な記録を残してはいるものの、大聖入に関する両者の記述はほとんど矛盾がない。

続いて信者同士が互いに接吻を交わすことになる。これは現在では「平和の接吻」と呼ばれるようだが、『儀式について』では繰り返し「愛」¹⁸¹⁾、あるいは単に「接吻」¹⁸²⁾といった単語が用いられている。第1章、第23章を順に検討してみる。

「全員を従えて再び皇帝は、同じ方法で愛(の接吻)のために出る。そしてメータトーリオンの向かいのペーマの右側の部分で、総主教は障壁の内側に立ち、第一の皇帝が障壁の外に立って総主教と接吻する。そしてその後、顧問僧(シュンケルロス)達、府主教達、主教達、大主教達、大教会の長司祭、そして総主教の高官達(に接吻する)。皇帝達と接吻したすべての人々は、レフェレンダリオスの手に導かれる。その後、(皇帝が)再び総主教と接吻した後に、(総主教は)障壁の少し低いところでシュンクレートス全員と接吻する。彼等は儀式長官の手によって導かれる。そして(皇帝は)総主教に暇乞いをしてメータトーリオンに入る。」¹⁸³⁾

「接吻の時が近づく、再び出て進み出て総主教、府主教達、主教達、教会の高位聖職者達、慣例上、皇帝に接吻してもらう聖職者達に接吻する。三人の新しく洗礼されたものも同様である。皇帝が何時も慣例で高官達に愛(の接吻)を送るところに立つと、パトリキオス達、ストラテゴス達、ドメスティコス達、役所の部長達、デーマルコス達、儀式長官が入る。彼等は全員、それぞれの規則に従って跳き、接吻し、立ち上がり、それぞれの規則に従ったところに横に並んで立つ。皇帝が上記の全員と接吻し終わると、皇帝と総主教は両者互いに挨拶を交わす。再び皇帝はメータトーリオンに入る。」¹⁸⁴⁾

この部分は両者の記述が込み入っている。両者に共通しているのは以下の点である。皇帝はメータトーリオンを出て総主教以下の聖職者と接吻する。皇帝は総主教に挨拶をしてメータトーリオンに入る。おそらく皇帝と総主教とは、第1章に書かれているように、至聖所の障壁越しに接吻するのであろう。その後、第1章には総主教が廷臣達と接吻することが、第23章では皇帝が廷臣達と接吻することが、それぞれ書かれている。おそらくこれは、どちらかが正しいのではなくどちらも正しい、言い換えれば廷臣達は皇帝と総主教の両方と、順番は不明だが接吻するのではないだろうか。

最後に領聖を受けて、教会から退出するまでをしてみることにする。

領聖は聖体拝受ともいい、聖別されたパンと葡萄酒を口にするものである。この行為はキリストとの、さらには父たる神と聖霊との霊的な結合を意味する¹⁸⁵⁾。

このときの様子を第1章は以下のように述べている。

「領聖の時が来ると、皇帝達は再び、既に述べた方法で出て、ペーマの右の部分に進み、そこで神聖な結合を受ける。そして慣例どおり総主教と接吻してから、メータトーリオンに入り、そこでシュンクレートスのうちの高位で親しい人達と食事を取る。皇帝達の食事がすむと、ブライボシトス達が保りの者と入室し、皇帝達に彼等のクラミュスを着せる。その後、このブライボシトス達が総主教を案内し、(彼は)皇帝達と接吻し、神聖な井戸へと続く小さな扉へと彼等を送っていく。この扉の敷居のところ、皇帝達と総主教は立ち、ブライボシトスとアルギュロス(金庫番)はこの扉の外に立つ。そしてアルギュロスの手からブライボシトスは黄金の袋を取り、皇帝に渡す。皇帝はそれを送り、それが受け取られるときにア

ルギュロスは声を張り上げる：「かくのごとき善き主達」。この厚意を皇帝達の手から受け取るのは、長輔祭、オスティアリオス達、歌手達、貧者達、教会の警備員達である。その後皇帝達は総主教と出て、神聖な井戸の中に吊った布の中に入る。そして総主教は彼等に冠を載せる。戴冠の後、総主教の手から祝福、あるいは贈り物を受け取り、プライポシトスにこれを渡す。これを皇帝達に送った後、総主教は（油？を）塗り、皇帝達から献納品をお返しに受け取る。そして接吻をすると皇帝達は神聖な井戸の外に出る。神聖な井戸の外で第一の歓迎がある。」¹⁸⁶⁾

これに対して第2章には以下のようにある。

「そして神との結合が訪れると、儀式長官がプライポシトスに、プライポシトスは皇帝に教える。既に述べたように先導されて出て、我等が主、イエソス・クリストスの汚れなき肉と血を拝受するために、総主教の横に行く。二人のオスティアリオスが広げた布を持ち、価値ある贈り物をその手で受ける。総主教に接吻して段を下り三回合図して神聖な贈り物を拝受する。それからこの段を上り、オスティアリオスが布を彼の下に広げ、総主教によって葡萄酒を授けられる。下りて祈ると、二人は互いに跪く。戻った後、メータトーリオンに入り、命令を受けたパトリキオス達や他の高官達と食事を取る。そしてベストートル達が彼のクラニユスを着せ、（皇帝は）プライポシトスに総主教を呼ぶよう命じる。そして皇帝と共に神聖な井戸まで通り過ぎる。そこで皇帝は立ち止ると、アルギュロスが慣習上、黄金の袋を受け取る者を呼ぶ。プライポシトスはアルギュロスから袋を取り、皇帝に返す。皇帝はアルギュロスが呼んだ者に渡す。そして布の中にクーブクリオンの高官達と入る。プライポシトスは総主教に冠を返し、この者が皇帝に戴冠する。そのあとで、総主教は皇帝に祝福を与え、皇帝はプライポシトスから献納品を取って、総主教にお返しとして渡す。すると総主教はお返しとして塗油する。

そしてお互いに接吻して、皇帝は出て、神聖な井戸のポルティコへ続く門の外に立つ。ここで彼を青党が迎え・・・」¹⁸⁷⁾

この部分の記述は第2章の方が詳しい。そして両者の内容は大体において一致する。唯一異なるのは領聖を受ける場所についてであるが、これに関しては次章で詳しく考察することにする。

以上見てきたようにハギア・ソフィアでの儀式に関して、第1章と第2章とでは、献納品に関する記述以外、大きく食い違う部分はない。またこの記述は『テュピコン』とも矛盾しない。

聖大バシレイオス

『クレートロロギオン』には1月1日に関する記述はない。

しかし『テュピコン』にはこの日がカエサリアとカッパドキアの総主教聖大バシレイオスの記念日で、大教会で儀式がおこなわれることが書いてある¹⁸⁸⁾。

『儀式について』では第2章がこの儀式に当ててある。その中で教会での皇帝の行動を拾いだすと、以下のようになる。

「皇帝は個人的（私的）な方法で個室の（続く）通路を経て、ファロスの最も神聖な聖母のナルテックスに来る。マギストロス達、パトリキオス達、シュンクレートスの残りの者たちは、クーブクリオン達と共に、好天の場合はクリュソトリクリノスのテラスに立ち、好天でない場合はクリュソトリクリノスの中に立つ。そこで皇帝達は行進を最も神聖な聖母から出発させ、行進は聖バシレイオスの教会へ入り、そこで行進は終わり（人々は）神聖な福音書の朗読まで立っている。そして連禱が終わると再び個人的にクリュソトリクリノスへ入る。」¹⁸⁹⁾

この章の記述を見るかぎり、皇帝は宮殿内の儀式にしか参加せず、総主教はこの宮殿での儀式には参加しない。

神現祭

神現祭は光の祭ともいい、キリストがヨルダン川で先駆者ヨハネから洗礼を受けたことを祝う儀式である。かつてはキリストの生誕と合わせて祭がおこなわれていたが、4世紀に生誕祭が分離し12月25日に定着するのにもなって、神現祭自体は1月6日に独立しておこなわれるようになった。不動暦の祭のなかでは生誕祭と共に最も壮麗な祭典に数えられる。とくにこの祭で重要なのは、前夜におこなわれる水を聖別する儀式である。4世紀末にアンティオキアでは、すでにこの儀式がおこなわれていたことが記録されている¹⁹⁰⁾。

この儀式に関して『テュピコン』から見ていくことにする。

この祭は「光の祭の前の土曜日」と「光の祭の前の日曜日」を準備祭として持つ¹⁹¹⁾。そして前日、1月5日には規模の大きい前夜祭がある¹⁹²⁾。まず大教会で総主教も参加して晩禱がおこなわれる。この日は聖書の朗読が12なされるが、これに関して但し書きがある。そこでは総主教が宮殿に行く場合と行かない場合とで、朗読に変更があることが説明されている¹⁹³⁾。そして一連の儀式ののちに総主教は、大教会で水の聖別をおこなう。その様子は以下のとおりである。

「そして総主教は輔祭、蠟燭、香炉と共に祭壇の内側（至聖所）に入り、輔祭は祈り、それと共に総主教は水の祈りを唱える。

水の祝福を執り行ったのち、総主教は出てアトリウムの水盤へ¹⁹⁴⁾行く。聖歌隊はアンボからモード4でトロバリオン（遠くの水から主の声が語る・・・）を始める。この歌の間に全員退出してアトリウムに入る。そして水の祝福の祈りをおこなう。」¹⁹⁵⁾

その後、徹夜の祈禱がある。

この前夜の儀式について『儀式について』は第25章で以下のように述べている。

「・・・(総主教は)第一の(水の)聖別が大教会でなら、その後、聖ステファノスの教会での聖別のために戻り、第一の聖別が聖ステファノスでなら、そののち大教会での聖別のために帰る。」¹⁹⁶⁾

このことから、二つの史料は、総主教が大宮殿と大教会の両方で水を聖別する点で、一致していることがわかる。続けて皇帝は

「聖ステファノスの教会の近くのダフネーの私室に入り、そこで合図と共にプライボシトスは司祭達に、聖ステファノスの教会で神の儀式を始めるように言う。そこでは聖別が行われる。」¹⁹⁷⁾

とあり、さらに

「皇帝は自分のディベーターションとジザキオンを纏い、八角堂(オクタゴノン)に立つ。神の典礼を終えるためである。神の儀式が終わると総主教は聖ステファノスの教会に入る。それは聖別の大礼拝のための動作を始めるときである。すぐにプライボシトスは皇帝に蠟燭を渡し、皇帝は水浴場の後ろに立つ。総主教が全ての祈りを終えるまでである。官官のプロートスパタリオス達は、仕来り通りに皇帝の後ろに立ち、パトリキオス達は帝室の蠟燭を持っている。祈りが終わると皇帝はプライボシトスに、プライボシトスは司祭に、持っている蠟燭を渡す。聖別(された水)を採った総主教は皇帝の手に注ぎかけ、皇帝は手を洗って頭と顔を擦り、そうしなければ飲む。皇帝と総主教は共にお互い挨拶をして、皇帝は自分の私室に行き、戸口の中にあるその場所で総主教の勤めを待つ。つまり聖別(された水)をパトリキオス達、クーブクレイオン達、ストラテゴス達、ドメスティコス達に注ぎ終わるのをである。それが終わるとプライボシトスから知らせを受けた皇帝はプライボシトスに合図を送り、そこから外に出て教会の中にいる総主教を呼び、皇帝と総主教とは共に八角堂(オクタゴノン)で会う。総主教は皇帝に祝福を送り、皇帝はプライボシトスの手から献納品を送る。」¹⁹⁸⁾

と記されている。つまり聖ステファノスでの儀式のうち、大半はこの教会の聖職者がおこない¹⁹⁹⁾、総主教は水の聖別のためだけに、この教会を訪れる。そしてその聖別された水は皇帝と廷臣達を祝福するために使用され、あくる日の儀式とは関係がない。

明1月6日、神現祭当日について『テュピコン』は以下のように述べている。トロバリオンの聖歌の後で「総主教は洗礼盤に上り、洗礼する。新しい洗礼者に洗礼の塗油をおこなったのち」²⁰⁰⁾聖歌の合唱と共に教会の本堂に戻る。その後、儀式は朗読、交唱聖歌、三聖唱、祈禱、領聖と通常の聖体礼儀と同様に進む。そしてそのあと晩禱がある²⁰¹⁾。マテオスはこの日洗礼に使う水は、前夜に聖別したものであるとしている。さらにこののち「光の祭の後の土曜日」、「光の祭の後の日曜日」、そして1月7日のタ・スフォーラキウーにおける洗礼者の儀式が、この日に関連しておこなわれる²⁰²⁾。

この日の儀式に関する『儀式について』の記述は第26章に以下ようになっており、上記の洗礼式に

関しては触れていない。またこの祭は生誕祭に従うことが書かれている。

「ナルテックスに入ると、布(カーテン)に入る。プライボシトスは冠を皇帝の頭から取る。ナルテックスを通して総主教が彼等を出迎える。お互いに接吻すると入り、大きな門の前に立つ。蠟燭を灯すとこれをプライボシトスに渡し、プライボシトスは儀式長官に(渡す)。汚れなき福音書に跪き、身廊に入る。ソレアを通ると神聖な扉の前に立ち、プライボシトスから蠟燭を取って祈り、プライボシトスに蠟燭を返す。そのあと至聖所に入り、二枚の聖体布を祭壇の上に広げ、二つの聖なる杯、二つの聖なる丸い盆、主の産着に接吻する。そしてプライボシトスから献納品を受け取りこれを祭壇の上に置く。そして至聖所の脇から出て、メータトリーオンに入る。神聖(な贈り物)と愛(の接吻)と領聖の時には、仕来りどおり、おこなう。そして昼食の後に神聖な井戸に出て、プライボシトスと布(カーテン)の中に入り、彼に冠を被せてもらう。その後、総主教は皇帝に祝福を送り、それから皇帝はプライボシトスから献納品を取って総主教にお返しに送り、総主教はお返しに皇帝に塗油する。

そして互いに接吻して皇帝は(アウグスタイオン)の中央を通り、カルケーの大きな門から(宮殿)に入る。」²⁰³⁾

以上の記述は大要省略されてはいるものの、第23章に準じるものである。いいかえれば献納品に関する記述を別とすれば、第1章とも一致する。また洗礼式に関する記述がまったくないが、通常の聖体礼儀に洗礼堂での洗礼式が挿入された形式を取っている以上、皇帝の関心を引かなかったとしても無理はないだろう。

またこののち『儀式について』によれば、皇帝は大宮殿に総主教を招待し夕食をともにする。この時の会場は19層台のトリクリノスと呼ばれる大広間だが、総主教は近くのダフネー宮の聖ステファノスの礼拝堂を控室のように使い、そこでみだしなみを整えたりする²⁰⁴⁾。

以上が『儀式について』における記述である。

この日の皇帝主催の晩餐会の様子は『クレートロロギオン』に詳しい²⁰⁵⁾。しかしこの史料は教会での儀式についてはほとんど記述していない。

進堂祭

進堂祭は聖母お清めの祭ともいわれる。本来、この祭は聖母が産後40日目に子供、つまりイエスを連れてユダヤ教の神殿に、お清めのために行ったことを祝うものであった。そのために聖母マリアに関する五つの大祭の一つに数えられている。しかしながらのちの時代には、主イエス・キリストのユダヤ教神殿への進堂とそこでシメオンとの出会いが、祭の主題とみなされるようになった。史料ではこの日の祭典をヒュババンテ²⁰⁶⁾と記す場合が多い。本論分ではこれを進堂祭としたが、元々の意味は「会うこ

と、出会い」であり、聖母のお清めよりも主の進堂の意味の方がはるかに濃厚である。この祭典は4世紀末にイェルサレムはすでにおこなわれていたが、そのときはイエスの生誕を神現祭と共に1月6日に祝っていたために、この祭はその40日後、2月14日におこなわれていた。その後、生誕祭の定着と共に、この祭も生誕祭の40日後、2月2日におこなわれるようになった。しかしまだ7世紀始めの段階でも、この祭の日取りについては混乱があったようである。この儀式は6世紀にユスティニアノス1世の勅令によって帝国内にひろまった²⁰⁷⁾。

まず『テュビコン』でこの日の儀式を見てみると以下のことがわかる²⁰⁸⁾。2月2日にはブラケルナイの聖母の教会で、キリストがシュメオンと出会ったことを祝うことになっている。前夜にカルコプラテアの聖母の教会に行き、総主教参加で晩禱をおこなう。そして明るく日は

「カルコプラテアのアンボで朝の勤めをおこなう。大教会へ、ナルテックスで交唱聖歌がおこなわれとき、総主教は下りて、聖歌隊は教会に入る。総主教は側面から至聖所に入る。そして三聖唱の祈りをおこなう。聖歌隊はアンボで前述のトロバリオン（よろこびたまえ、よろこびにみちて）を歌う。それから行進が出発して、フォロスで聖歌隊は神の栄光を讃える。輔祭は大きな（連禱形式の）祈りを唱え、聖歌隊は同じトロバリオンを歌う。そしてブラケルナイでも神の栄光を讃える。」²⁰⁹⁾

そしてブラケルナイで聖体礼儀をおこなう。

この日の儀式について『クレートロロギオン』は

「2月2日、我等がイエソス・クリストスの進堂の祭をブラケルナイでおこなう。見事な行進が終了したら、帝室の宴会を、（ブラケルナイ宮の）古くはオケアノスと呼ばれた、荘厳なトリクリノスの特別な食卓にておこない・・・」²¹⁰⁾

と述べている。

『儀式について』は第27章でまず、皇帝が望むならば前夜のうちにブラケルナイに行き、その聖母の教会で徹夜の祈りを捧げることが述べている。しかし第2巻第9章聖母就寝祭のブラケルナイを訪れる場合の記述と異なり、徹夜の祈りを望まない場合に関しては何も語っていない。第27章の記述はすぐに明日、祭典の当日に進み、皇帝が廷臣達を従えてブラケルナイ宮のアナスタシオスのトリクリノス、ダニューピオスと呼ばれるトリクリノスを通り宮殿から出てポルティコの右側の部分を通ることが説明される。そして

「ポルティコの外に斜めに配置された列柱を通った皇帝は、そこで行進を従えた総主教を出迎える。ブライボシトスから蠟燭を受け取り、祈り、再びそれをブライボシトスに戻す。そして汚れなき福音書と価値ある十字架に跪く。そして皇帝と総主教は両者互いに挨拶をし、接吻をする。皇帝はブライボシトスから行進用の蠟燭を受け取ると、向きを換えて先程のポルティコを通る。儀式長官は「ようこそ、恩寵に満

ちた神の母よ、童貞女よ」を（歌い）始める。このトロバリオンを前述の皆は奏でつつ、大教会のナルテックスに入り、皇帝はナルテックスの椅子に座り、行進を従えた総主教が到着するのを待つ。パトリキオス達とシュンクレートスは身廊に入りそこ立って、習慣どおり皇帝を待つ。

行列と共に総主教が到着すると、皇帝は立ち上がり、そして皇帝と総主教は両者互いに挨拶をし、両者共に大教会の門の所へ行きそこに立ち、総主教は聖体礼儀の入場の祈りを始める。皇帝はブライボシトスから蠟燭を取って祈り、終わるとそれを再びブライボシトスに、そして彼は儀式長官に渡す。皇帝は汚れなき福音書に礼をし、総主教と共に身廊の真ん中を通り、そしてアンボの脇を通過してソレアに入り、神聖な戸口の前に立って蠟燭を灯して祈り、至聖所へ入る。聖なる覆い（テーブルクロス）に接吻をすると、ブライボシトスから献納品を受け取り、それを祭壇の上に置き、退出する。司祭達は称賛を彼に贈り、

（皇帝は）身廊の真ん中を通る。皇帝が退出してナルテックスに来たときに、大きな門の左側のベンチの上に孤児達が立って、通例通りに歌を歌って皇帝を讃える。（皇帝と総主教）両者共に階段に入ると、皇帝と総主教とは挨拶を交わし、接吻を交わす。総主教は大教会に神の儀式をおこなうために戻り、一方の皇帝は階段を通過して礼拝所へ昇り、そこで十字架へ蠟燭を灯し、ギャラリーの十字架でも同様にする。そして礼拝所に入り、そこに立って神の典礼に参加する。パトリキオス達や他の高官達は皆その外、ギャラリーに立っている。

神との一致が近づくと、命令を受けたブライボシトスは儀式長官に命令し、シレンティアリオス二人を総主教を呼ぶために派遣させる。そして（彼らは）彼（総主教）を、階段を経て、皇帝のいる礼拝所まで案内させる。皇帝は総主教から主の純粋な肉体と血液を受け、自分の私室へ入る。するとパトリキオス達、ストラテゴス達、ドメスティコス達、上級の役所の責任者達が入室し、彼らは総主教の手によって領聖される。全員が外に出て、総主教が下りようとする時に、皇帝は自分の私室の扉の前に立ち、両者は互いに挨拶をする。総主教は行って神の儀式を全て終わらせる。神の儀式が終了すると、皇帝は正装のまま神聖な箱のトリクリノスを通り、クービクーラリオスがそこにある扉とカーテンを開け、そして皇帝は煉瓦の通路を経て螺旋階段を上がり、ダヌーピオス（のトリクリノス）に入る。」²¹¹⁾

となって、皇帝はブラケルナイ宮に戻る。

以上見てきたように、三つの史料は2月2日にブラケルナイの聖母の教会で進堂祭がおこなわれる点で一致している。また前夜の晩禱は、総主教はカルコプラテアで、皇帝は参加するならブラケルナイでおこなう。なおこの点に関しては、この章の最後に進堂祭が四旬節の月曜日と重なった場合の但し書きがあり、これが興味深い。

のちに触れるように四旬節第一週月曜日に皇帝はマンナウラの大広間で市民達と儀式をおこない、そののちハギア・ソフィアに礼拝に行く²¹²⁾。2月2日がこの日と重なったときには、皇帝はマンナウラで

儀式をおこない、青銅門、神聖な井戸を経て大教会に入り、メータトーリオンで礼拝に参加してから、メータトーリオンから出て総主教と挨拶をし

「皇帝は教会堂の右側の部分、ナルテックス、ホーロロギオンを通過して、アテュルへと続く西向きの大きな門を出る。そこから馬に乗りミリオン、フォロス、マウリアノスの大ポルティコ、ベトリオン地区を通過して、そしてブラケルナイの全てに神聖な聖母まで行く。そこに到着すると馬から下りて、ギャラリーに登る。聖なる箱のパラキュンプティコン、ギャラリーの礼拝所と大十字架の外の所で蠟燭に火を灯し、そこから出てアナスタシアコス・トリクリノスへ行き、その後の全ては歓迎と同様に慣例にあるようにおこなう。行進と合流して、神の儀式に入場し、祈るが、すでに説明したこの祭の第一の儀式のやり方に従う。」²¹³⁾

おそらく、この二つの儀式が重ならなくても、皇帝がブラケルナイでの晩禱に参加しない場合は、大教会に寄るか否かはわからないが、このようにしてブラケルナイに行き、儀式の準備をしたものと思われる。

40 殉教者

黒海沿岸のセバステア近郊の湖で、キリスト教徒の兵士40名が皇帝リキニウスの迫害によって殉教したという逸話が伝わっている²¹⁴⁾。このセバステアの40人の殉教者の記念日が3月9日である。

『儀式について』は、第2巻第13書に以下のような簡単な記述がある。

「3月9日。既に述べた仕来りに従い、皇帝達は儀式が行われる町の中の教会へ行く。つまり40人の殉教者の記念日、皇帝はこの同じ殉教者達の聖域に行く。」²¹⁵⁾

だが3月9日に関する記述は『クレートロロギオン』には見当たらない。

そして『テュピコン』には²¹⁶⁾、以下のような記述がある。

「3月9日、サバティアで殉教した40人の神聖な殉教者の儀式。彼等のための集会を青銅の四面門のそばの神聖なこの殉教者達(の教会)でおこない、(前日の)夕方から徹夜の祈りが催される。

ここで総主教は聖体礼儀をおこなう・・・」²¹⁷⁾

この記述から考えるに、『儀式について』に登場する「町の中の殉教者達の教会」は、おそらく『テュピコン』の青銅四面門のそばの教会であろう。青銅四面門は東西に走るメセー(現在のディヴァン・ヨル)と、ドムニノスのポルティコのある南北の通り(現在のバザールを通り抜ける、ウズン・チャルシュ通り、ゲディク・パシヤ通り等様々な名を持つ通り)の交差点、テオドシオスのフォルム(雄牛のフォルム)とフォロスの間にあった²¹⁸⁾。

受胎告知

受胎告知は聖母マリアに大天使ガブリエルが聖霊の到来を告げたことを祝うもので、3月25日におこなわれる。最初はシリア、小アジア等で生誕祭の準備祭の一部としておこなわれていたが、560年のユスティニアノスの勅令によって、3月25日におこなわれることとなった。実際にはこの日付はアンティオキア起源のもので、イエスの磔刑が3月25日だったとの伝説と、異教時代の春分の日の祭とが関係していると考えられている。なお生誕祭の日付は受胎告知から9ヶ月後、進堂祭はさらにその40日後で、キリストの生誕にちなむ一連の儀式の日付は、この受胎告知の日付から計算されたものである。この祭典はマリアの五つの大祭の一つで、また12大祭のうち唯一、復活祭とその前後の一連の儀式と重なる可能性がある²¹⁹⁾。

それゆえ『テュピコン』の記述は大変複雑なものとなっている。最初に語られるのは受胎告知だけの場合である²²⁰⁾。それは以下のようにになっている。

「3月24日、パレスティナのカイサレアの神聖な50人の殉教者の儀式。

この日の夕方、すべてに神聖な汚れなき女主人、我等が神を宿す方(テオコトス)、永遠の乙女マリアが善い知らせを受け取ったこと(=受胎告知)のための晩禱。行進は大教会からカルコブラティアの最高に神聖なテオコトスの教会に、慣例どおり下る。そののち予備聖別の儀式を始める。祭ゆえにいかなる者も(朗読に)追加しない。そして規則どおり徹夜の勤めをする。

明るる日、つまり同じ月の25日、最も神聖な大教会で、(朝の勤めの)詩編50番でモード4のトロバリオンを唱える・・・。

朝の勤め、第三・第六の刻の勤めの後、三聖唱を唱え、聖歌隊はアンボで同じトロバリオンを始める。フォロスで神の栄光を讃え、輔祭が大連禱を唱える。そのあとで聖歌隊が同じトロバリオンを始め、行進は向きを変えてカルコブラティアに下りる。そして神の栄光を讃える。その後、総主教はシュントロノンに上る。」²²¹⁾

それからこの教会で聖体礼儀がおこなわれる。

この3月25日の受胎告知の日について『クレートロロギオン』は以下のように記している。

「3月には注目に値する壮麗な、最高に神聖な女主人、我等が神の母、永遠の乙女マリアの受胎告知の祭がおこなわれる。いつもと同じ行進をカルコブラティアでおこない、皇帝は宮殿に入り・・・」²²²⁾

続けてユスティニアノスのトリクリノスでの宴会の様子が説明される。

一方、『儀式について』ではまず第1章に記述があるが²²³⁾、これはデーモスの行動に関する但し書きで、ほとんど参考にならない。しかしなぜか第30章²²⁴⁾に「最高に神聖な聖母の受胎告知の祭と四旬節第三週の日曜日が重なった時に見られるべきこと」という題でカルコブラティアの聖母教会での儀式

の様子が語られている。四旬節第三週日曜日を取り扱った第29章の記述²²⁵⁾と比較して、重複しない部分を抜き出すと以下ようになる。

まず皇帝は大宮殿内で四旬節第三週日曜日の儀式を執り行う。そののち皇帝は青銅門（カルケー）を経てハギア・ソフィアへと向かう。

「・・・カルケーの大きな門を出ると、デーモスが決められたところに立っていて、皇帝に一回、十字を切る。ノタリオス達は習慣通りに詩を唱える。そして皇帝は神聖な井戸の門に入り、蠟燭をつけて祈る。総主教は教会内から神聖な井戸へと続く門の中で皇帝を迎える。互いに挨拶と接吻をすと、教会に入る。皇帝は蠟燭をつけて、神聖な扉の前で祈り、祈り終わると至聖所に入る。祭壇に跪いて祈り、ペーマから出るとソレアを通る。ソレアを出るときに、彼にプライボシトスが行進用の蠟燭を渡す。そして祭のトクバリオンを始める：「我等が安全の要たる今日」。全員蠟燭を手をしている。皆に先導されて皇帝は、身廊の中心を通り皇帝の門から出て、ナルテックス、アトリウム、アテュル（アトリウム西側の建物）を出て・・・」²²⁶⁾

それから皇帝はフォロスのコンスタンティノス1世を記念する柱のところまで行く。そこには聖コンスタンティノスの礼拝堂がある。皇帝はこの前の段を上り、障壁の右側に立ち、廷臣達はより低いところ、護衛兵は皇帝の左右、他の出席者達はフォロスの真ん中に並んで立つ。

「行進と共に総主教が到着すると、彼等の中央を通り、人々は行列の左側の部分、元老院（の建物）の前に立ち、孤児達は官位ある人々の中央に立つ。そして十字架が段を上るときに、その場所に皇帝は立ち、蠟燭を皇帝は灯し十字架に跪く。それから蠟燭をプライボシトスに、また彼は儀式長官に返し、彼は行進用の燭台にこれを固定する。十字架は中央、皇帝の後ろ、教会の門の脇に置く。総主教は仕来り通りに教会に上り入る。他の聖職者達は皇帝の左側の普通の人々と、低いところに立つ。連禱がおこなわれると、皇帝は蠟燭を灯して跪く。そして蠟燭をプライボシトスに、また彼は儀式長官に返し、彼は行進用の燭台にこれを固定する。皇帝は段を下りて、プライボシトスから行進用の蠟燭を取り、前述の全員に先導されて・・・」²²⁷⁾

そして皇帝はラウソス宮の脇のポルティコを通して、カルコプラティアの聖母教会へ行く。このラウソス宮は5世紀のアルカディオス帝の侍従長であったラウソスによって建てられた²²⁸⁾。ヒッポドロモスとメセーの間に位置し、戦後、発掘調査がおこなわれた²²⁹⁾。宮殿の中心はニッチを左右三つづつ、計6個持つ長方形の広間で、当初は美術ギャラリーとして使用されたが、のちに火災で焼失し6世紀に同様のプランで再建され、邸宅として使用された。しかしこの建物も7世紀に火災に襲われ、10世紀にどのような状態でこの建物が残っていたのかは不明である²³⁰⁾。

「そしてナルテックスに入ると、腰掛けて総主教の到着を待つ。行進を従え総主教が到着すると、皇帝

の門の右側の門から人々と聖職者の一団が入り、孤児達と府主教達、主教達は皇帝の前を通り、彼に跪き、皇帝の門から身廊に入る。総主教が到着すると皇帝は立ち上がり、両者互いに跪く。そして皇帝の門の前に行って立点。総主教は入場の祈りを唱え、一方の皇帝はプライボシトスから蠟燭を受け取って祈り、再びこれをプライボシトスに戻し、この者は儀式長官に（渡す）。

総主教が祈りを終わると、皇帝は価値ある十字架と汚れなき福音書に跪き、両者を手で触れる。身廊の中央を通してソレアに入り、神聖な扉まで行く。そこで蠟燭に火を点け祈り、これをプライボシトスに戻して、至聖所に入る。祭壇に跪き、プライボシトスから献納品を取ると、これを祭壇の上に置く。そして左側の部分の通路を通して外に出て、神聖な箱に入る。神聖な扉の前に立ち、蠟燭を灯し祭壇に跪き、そこに献納品を置く。そしてそのまわりに香を焚き、外に出る。同様にして左側にある礼拝所でも祈り、献納品を祭壇の上に置き、外に出て木の階段を上ってギャラリーへ入り、そこで神の典礼に加わる。さて神との結合の機会には二人のシレンティアリオスが総主教を、皇帝に神聖な肉体と価値ある血液を与えるために戻るよう、呼ぶために下へ行く。領聖を受けた皇帝はメータトーリオンに入り、プライボシトスから合図を受けた儀式長官はシュンクレートス全員を呼び、（彼らは）総主教の手から領聖を受ける。そしてその後、皇帝はメータトーリオンから出て、皇帝と総主教は両者互いに挨拶を交わす。総主教は神の典礼をおこなうために下に行き、一方の皇帝は金の刺繍のスカラマンギオンを脱ぎ真珠と宝石の剣をつける。パトリキオス達とクーブクリオンの高官達はサギオンを脱ぐ。そして神の典礼が終わると総主教は上に来て、皇帝と総主教と互いに挨拶を交わし、皇帝に祝福を与え、皇帝は彼に献納品を渡し総主教は皇帝に塗油をする。

皇帝は冠を総主教に被らせてもらおうと、木の階段を通して左の部分の女性の所へ下り、学校のコンクの段を下りて、ポルティコへ続く門から出て、そこで馬に乗り、プライボシトス達、オスティアリオス達、他の全員も同様にする。・・・」²³¹⁾

そして大宮殿に戻るが、宮殿に入る際に青銅門のそばにある主の教会による。

「・・・パトリキオス達とストラテゴス達は主の門の前で待ち、彼等は皇帝に歓呼する。皇帝が門の中に入ると、クービクラーリオス達は門を閉め、彼等は歓呼する「多くの善き時を」。プライボシトスは皇帝の頭から冠を取ると、皇帝は主の教会に入り、蠟燭を取って祈り、それをプライボシトスに戻す。主の通路（ディアパティコン）を通り（大宮殿内の）トリコンクへ・・・」²³²⁾

そののち招待客と夕食をとる。

以上の引用部分が、もしもそのまま通常の場合の受胎告知の日の儀式と同じだとすると、他の二つの史料と内容的に一致する。またそうでないとする理由も特に見つからない。

この章の最後には、この儀式に関する但し書きが付いている。「風があるとき」と題されたこの段落は、

おそらく嵐となった場合における儀式の変更点を記したものであろう。

「以下のことは重要である。もしもこの日に風があるときは、ポルティコを通り、フォロスの元老院へ上り、元老院の中央に移動式の机があり、そこで以前の説明にあるように全てを終える。そして再び先のポルティコを経て、ラウソス（の宮殿）に下りて左へ曲がりカルコプラティアへ行く。全ての物事をおこなうが、ただし皇帝はこの場合ギャラリーには上らず、神聖な箱にあるトロピケー（に行き）、そこで神の儀式をおこなう。そして外套を身に纏い、（屋外の儀式はせずに）再び宮殿に戻り・・・」²³³⁾

さて受胎告知が他の祭日と重なる場合についてであるが、『テュピコン』はそれぞれの場合について解説している²³⁴⁾。聖枝祭と重なる時、聖木曜日と重なる時、聖金曜日及び聖土曜日の場合、復活祭と重なる場合、復活祭の月曜日と重なる場合、復活祭の火、水、木、金、土曜日と重なる時。以上がそのすべてで、残念ながら四旬節第三週日曜日と重なる場合は特に記されていない。これらのうちで復活祭と重なる場合と復活祭の月曜日と重なる場合は例外で、他の場合は大教会、フォロス、カルコプラティアという枠組みに変更はない。このことから考えて四旬節第三週日曜日と受胎告知とが重なっても、この枠組みに変更はなかったものと思われる。

ちなみに復活祭と重なったときは、大教会からフォロスに行進し、そののち再び大教会に戻って聖体礼儀を執り行う。復活祭の月曜日の場合、大教会での朝の勤めの後で、フォロスに行進しここで聖歌を歌う。それからディアコニッサの聖母の教会へ行き連禱をおこなう。そして聖使徒教会に行き聖体礼儀をおこなうのである。

これに関して『儀式について』では第10章以下のような記述がある。復活祭の月曜日が受胎告知と重なったとき、皇帝は受胎告知のときの衣装でフォロスに行き儀式をおこない、メセーを行進して行く。

「・・・そしてディアコニッサの全てに神聖な聖母（の教会）まで行く。そこに着くと、教会に入り使徒達と汚れなき福音書に祈りを捧げる。礼拝が終わると、皇帝は着ていた受胎告知の服を脱ぎ、この（日の）服を、つまり復活祭第二の（日の服を）を、既に述べたように纏う。そしてアンボの聖歌隊が歌い始める。「キリストはよみがえった」そこから出ると皇帝は行列と進み、儀式長官はトロバリオンを始め、聖使徒の教会まで行く・・・」²³⁵⁾

このことから、受胎告知と復活祭の月曜日が重なった場合の儀式の次第が、『儀式について』と『テュピコン』とで、大体同じことがわかる。

ディアコニッサの聖母の教会は、同じ章の記述から、雄牛のフォルム（フォルム・タウリ）とフィラデルフィオンの中間のメセー沿いにあったことがわかっている²³⁶⁾。フィラデルフィオンは現在のシェハザーディ・ジャーミーあたりのことで²³⁷⁾、ここでメセーが大きく向きを変えていた。かつてはこの教会はカレンデルハネ・ジャーミーと同一視されたり、ベヤジット・ジャーミーあたりだと考えられた

りもしたが、現在では否定されている²³⁸⁾。

ネア献堂

通常「ネア（=新しい）」と呼ばれる教会は大宮殿にバシレイオス1世によって建設された²³⁹⁾。それゆえこの教会の献堂を記念するこの儀式は、大変新しいものである。

『クレートロロギオン』にはこの教会の献堂記念祭について、以下のような記述がある。

「5月1日、新教会の献堂の記念をおこなう。ファロスの聖母の教会から行進、神の典礼の後に、素晴らしいクリュソトリクリノスにて皇帝の宴会・・・」²⁴⁰⁾

『儀式について』には以下のような儀式が描かれている²⁴¹⁾。

まず皇帝は総主教とクリュソトリクリノスで待ち合わせをする。宮廷の高官達は新大教会のナルテックスに下り、ここで待っている。そして「全てのクーブクリオンはホーロロギオン、クリュソトリクリノス、パンテオンのヴォールトとフュラクスを通り、一つ扉（モノテュロン）を越えるとファロスの最も神聖な聖母の教会に着く。そこで主人達は立ち上がると、総主教と密かに秘密の（戸口）をくぐり個室の（続く）通路を経て、ファロスの最も神聖な聖母の教会へとやって来る。ここで主人達はナルテックスに立っているが、総主教は祭壇まで入り、いつもと同じ祈りを行い、トロバリオンの聖歌を捧げる。そして総主教は神聖な福音書を持って祭壇から出ると、この礼拝堂の皇帝の門へ行く。もちろん輔祭の長は行進用の十字架を運ぶ。主人達はプライポシトスから蠟燭を受け取り、蠟燭と共に三回礼拝して神への感謝を表し、そして福音書と十字架に接吻し、輔祭は香を焚く。皇帝は総主教と連れ立って教会から出て、テラスへ向かって続く門から出るとプライポシトスから行進用の蠟燭を受け取り、行列を通り抜け、テラス（ヘーリアコス）の真中、一つ扉の通路を経て、ブーコレオンの階段を下り、右に曲がって新教会のナルテックス（ここにはシュンクレートスが立っている）へ向かって下る。そして献堂祭の入場の勤めをおこなう。皇帝達は仕来り通りに、総主教と共に至聖所に入るが、総主教が先に入り、皇帝達は神聖な扉の外に立って、プライポシトスから蠟燭を取り、蠟燭をてに三回跪いて神への感謝を示し、その後、至聖所に入る。まず第一に神聖な扉に、それから祭壇の布に接吻する。そして祭壇に献納品を置いてベーマを通り退出する。このベーマでは蠟燭をつけて、習慣通り布に接吻する。側廊を通って退出するが、神の友の皇帝バシレイオスのアイコンのところで蠟燭を灯す。そして総主教に暇乞いをして、退出しこのプロセウカディオンに入る。これは海に向かったナルテックスを出たところにある。ここには椅子があり布（カーテン）が吊っており、自分のクラニユディオンを脱ぐ。そして立って神聖な福音書の朗読を待つ。それからプライポシトスから蠟燭を取ると、神聖な福音書に耳を傾ける。礼拝の祈りが終わると座る。そしてアルトクリネース達と共に、宴会の食卓と皇帝の大宴会の表を作る。その後、皇帝達は密かにこのナルテック

スを経て、秘密の階段を通り、これはこのナルテックスのテラスへ上っているが、宮殿に入る。」²⁴²⁾

しかし『テュピコン』の5月1日の項を見ると、預言者ヒュレミオス（エレミア）と使徒ペトロスの記念日ということしか記録されていない²⁴³⁾。

福音書作者聖ヨアンネス

5月8日は福音書作者聖ヨアンネスの記念日である。『テュピコン』はこの日、大教会から行進が夜明け前に出発し、フォロスで礼拝した後、ヘブドモンの聖ヨアンネス教会まで進み、ここで聖体礼儀をおこなうことを記録している²⁴⁴⁾。

しかしこの5月8日の儀式に関して『儀式について』は何も語っていない。

一方の『クレートロロギオン』は、以下の簡単な記述を残している。

「5月8日、ヘブドモンへ福音書作者を記念する行進を行う。ミサの後、宴会を行う。仕来りに従いシュンクレートス全員を机に合わせて招待する。」²⁴⁵⁾

聖コンスタンティノス

『テュピコン』の5月21日の箇所²⁴⁶⁾には以下のような記述を見ることができる。

この日は皇帝コンスタンティノス1世とその皇太后ヘレネの記念日で、大教会、聖使徒教会、ポヌス貯水池の彼等の教会で儀式がある。総主教は皇帝と元老院議員と行進して、そこで聖体礼儀をおこなう。

ポヌス貯水池のそばにはコンスタンティノスをまつた教会は二つあった。聖コンスタンティノス修道院とポヌス宮殿の教会とである²⁴⁷⁾。しかし皇帝と総主教が同行することから考えて、『テュピコン』が述べているのは宮殿の教会のことであろう。ポヌス貯水池は同名のバトリキオスによって7世紀に建設された。場所は不明だが聖使徒教会の北東かと思われる²⁴⁸⁾。

この儀式に関して『儀式について』は第2巻第6章²⁴⁹⁾でふれている。以下にその主要部分を引用する。

前日、皇帝の命令があれば、ポヌスの新宮殿へ行進する。十字架の前で晩禱し、そして当日の第二の刻の頃、皇帝は乗馬して出発する。

「・・・聖使徒へと行き、そこで馬から下りて、アトリウムの大きな門を通過してナルテックスに入る。そしてこのナルテックスで東に向かって左へ曲がり、その釣り下げられた布の中へ入る。なぜならそこには帝室の椅子があって、彼の着替えが用意されているからで、自分のディベーターションとクラミュスをかえ、聖使徒の教会に入る。そして神聖な扉の前で蠟燭と共に三回跪いて、神への感謝を表し、そのペーマで東に向かって左に向きを替え、墓所へと、言い換えれば聖コンスタンティノスへと進む。その場所へ

続く門のところで総主教が彼等を出迎える。そして再びそのペーマで、蠟燭と共に三回跪いて、神への感謝を表し、総主教は香炉を第一の皇帝に戻し、神聖なペーマと正統な（信仰の）皇帝レオンの、神聖な皇后テオファノの、正統にして神聖な皇帝バシレイオスの、善良な諸帝の、そして同様に神聖かつ栄光に満ちた皇帝、最初のそして偉大なコンスタンティノスの墓に香をまく。皇帝が総主教と共にこれらを成し遂げると、総主教はペーマに入って祈りを捧げ、歌手達はトロバリオンを歌う。「あなたの十字架の姿を天に見て・・・」皇帝は総主教に暇いをすると彼に接吻し、マギストロス達、バトリキオス達、シュンクレートスの他の者達と共に行列を組んで、万聖人のアプス（裏側の）の中庭を経て²⁵⁰⁾

外に出ると来た道を戻り、ポヌス宮の庭に入り、玉座について聖職者達の行進を待つ。

「宮殿の庭の門から行列が入ってくるまで歌手達はトロバリオンを歌う。「あなたの十字架の姿を天に見て・・・」そして（行進が）門から入場すると献堂記念祭の聖歌を歌い始める。つまり「あなたの栄光、キリストよ神、使徒達の誇り」を。総主教は、皇帝達の座っている場所に近づき、立ち上がって皇帝達は彼を歓迎する。すぐに献堂記念の続きがおこなわれる。習慣に従い教会の創建式と開館式をおこない、総主教と共に皇帝達は中に入り、聖コンスタンティノスのペーマの中へ進む。（この（二つの）ペーマは、一つが聖ヘレネに建てられ、もう一つにはまた聖コンスタンティノスの銀のキボリオンが聳えている）そこで蠟燭と共に三回跪いて、神への感謝を表し、向きを変えて左から出て段を上り、聖コンスタンティノスの大十字架の前に立つ。汚れなき聖なる福音書を待つ。礼拝が終わると、ここの宮殿に行き、神の典礼が終わると、総主教、シュンクレートス、府主教ら、命じられたものと宴を楽しむ。」²⁵¹⁾

なお『クレートロロギオン』にはこの日の儀式は記載されていない。

聖コスマスと聖ダミアノス

7月1日に関して『テュピコン』は以下のことを述べている²⁵²⁾。この日は神聖な医師、ローマの殉教者コスマスとダミアノスの記念日で、タ・パウリヌーのこの聖人の館で集会がある。朝、大教会から行進してフォロスに行き、そこで祈り、上記の教会まで行って聖体礼儀をおこなう。

『儀式について』の記述は簡単なものである。以下に該当部分を第2巻第13章から引用する。

「7月1日。同様に（儀式を）執り行う。神聖な医師達の記念日である。皇帝達はタ・パウリヌー（パウリヌス地区）のこの聖人達の畏怖の念をおこさせる教会へ行く。出発する皇帝達は騎馬を命令するか船を命令するかである。既に述べたように順番に行進を執り行う。皇帝達がタ・パウリヌーに行くなら馬でも船でも、スカラマンガオンを着て行く。皇帝達は神聖な扉の前で蠟燭を手に折り、神聖な聖遺物に跪き、蠟燭を灯す。外に出てアトリウムに入り、乗馬して宮殿の方に向かい、騎馬を命じるか船を命じる。多くの場合ブラケルナイの宮殿で会食を始め、そして夕方宮殿に入る。この日は皇帝達は聖なる至聖所には入

らない。」²⁵³⁾

タ・パウリヌーはテオドシウス2世の幼なじみにちなんだ地名で、市壁の外、現在のエユップの丘の上である²⁵⁴⁾。ここにはコスミディオと呼ばれる両聖人の修道院があった²⁵⁵⁾。

なお『クレートロギオン』にはこの日の儀式は記載されていない。

教会和解

この祭日は、レオン6世の四重婚問題で生じた教会と宮廷の不和が、解消され両者が和解したことを祝うものである²⁵⁶⁾。

ヴォクトはこの儀式が7月6日(あるいは9日)と12日の間におこなわれると述べているが²⁵⁷⁾、『テュピコン』の該当部分にはこのまつりに関する記述はまったくない。また『クレートロギオン』も、成立年代から考えて当然のことだが、この日のことには何も触れていない。

唯一『儀式について』だけが、第1巻第36章²⁵⁸⁾でこの儀式について述べているが、それも簡単なものである。通常教会に行く場合の慣例に従うことが記されたのちに、以下の引用部分がくる。

「皇帝は神聖な井戸に行き、そこで王冠を外す。そして彼を迎えた総主教と二人は聖エイレーネーに行く。そして全ての教会の行事がきちんと終わると、この聖エイレーネーの教会から行列を組んで、行列の状態のまま聖ソフィアに戻り、この教会の側廊を通りナルテックスに入る。ここで行進の儀式をおこない、入場する。そして皇帝と総主教は他の司祭達すべてと共に、入り、他の行進の時と同様に戻るようにする。」

預言者エリアス

『テュピコン』は7月20日の項²⁵⁹⁾で以下のことを書いている。

この日が預言者エリアスの昇天の記念日だということ。大教会からフォロスへ行進しそこで祈りを捧げたのちに、ベトリオンの預言者の教会へ行き聖体礼儀をおこなうこと。ネアで皇帝、元老院、総主教が出席する儀式があること。

ベトリオンというのは人名(ペトロス)に由来する地名で、金角湾沿い、現在スルタン・セルム・ジャーミーがあるあたりから海にかけてである²⁶⁰⁾。残念ながらこの教会は現存せず、場所も不明であるがスルタン・セルム・ジャーミーがこの教会の敷地に建っているとする説もある²⁶¹⁾。

『クレートロギオン』はこの儀式について

「7月20日、預言者エリアスを記念して、宮殿内で礼拝者の行列がおこなわれる・・・(中略)・・・官僚達の礼拝者は聖母の教会から壮麗な大新教会の教会へ向かって行進し、神聖な儀式が終わると皇帝の宴席がクリュソトリクリノスで催され・・・」²⁶²⁾

と書いており、『テュピコン』と内容の一致を見る。

しかしこの儀式に関して最も詳細な記述は『儀式について』のものである。以下この祭日に関して述べた第19章²⁶³⁾を見ていくことにする。

まず前の夜に元老院の面々はクリュソトリクリノスを通して

「ファロスの最も神聖な聖母の教会に入る。紫の大理石の中のアナトリカ(という名の戸口)には帝室の(蠟燭)を持った門番がディアタリオス達を従えている。そしてシュンクレートス達がそこを通ると、それぞれに帝室の(蠟燭)をくれる。シュンクレートス達が最も神聖な聖母の教会に実際に入ると、出席者達は蠟燭の儀(=晩禱)を初める。それが終わり、最後の祈りの時には、最も賢明にして善良な皇帝レオンが作った「汝と共に埋め」ののって聖歌を唱え、この演奏は交唱聖歌の(形式で)クーブークリオン達と帝室の聖職者達が歌う。この詩編の詠唱が終わるとマギストロス達、プライボシトス達、アンテュバトス達、パトリキオス達、オッフキアリオス達は、皇帝から小さな銀の十字架の贈り物を受け取り、総主教は明るく日の神の典礼を終わらせるために、いつ戻って来たらよいのか教えられる。」²⁶⁴⁾

そして夜明け時から皇帝と元老院議員は準備し、皆で大新教会のナルテックスへ下りて総主教を迎える。そののち一旦クリュソトリクリノスに入り、そこから

「出るとプライボシトス達は彼らのまさに全員を導き、主人達は通常通りに彼らと密かに秘密の(戸口)をくり個室の(続く)通路を経て、ファロスの最も神聖な聖母の教会へやって来て、そして聖エリアスの礼拝堂へと入る。ここで主人達はナルテックスに立っているが、総主教は祭壇まで入り、いつもと同じ祈りを行い、トロバリオンの聖歌を捧げる。そして総主教は神聖な福音書を持って祭壇から出ると、この礼拝堂の皇帝の門へ行く。もちろん輔祭の長は行進用の十字架を運ぶ。主人達はプライボシトスから蠟燭を受け取り、蠟燭と共に三回礼拝して神への感謝を表し、そして福音書と十字架に接吻し、輔祭は香を焚く。皇帝は総主教と連れ立って教会から出て、そして自分達でファロスの教会の真ん中を通り、テラスへ向かって続く門から出るとプライボシトスから行進用の蠟燭を受け取り、行列を通り抜け、テラス(ヘーリアコス)の真中、一つ扉の通路を経て、ブーコレオンの階段を下り、右に曲がって新教会のナルテックス(ここにはシュンクレートスが立っている)へ向かって下る。そしていつもの教会の入場の勤めをおこなう。皇帝達は仕来り通りに、総主教と共に新教会の聖エリアスの礼拝所の至聖所に入るが、総主教が先に入り、皇帝達は神聖な扉の外に立って、プライボシトスから蠟燭を取り、蠟燭をてに三回跪いて神への感謝を示し、その後、至聖所に入る。まず第一に神聖な扉に、それから祭壇の布、そしてここに保存されている神聖な預言者の羊の皮に接吻する。そして祭壇に献納品を置いてペーマを通り退出する。このペーマでは蠟燭をつけて、習慣通り布に接吻する。側廊を通って退出するが、神の友の主バシレイオスのアイコンのところで蠟燭を灯す。そして総主教に暇乞いをして、退出しここのプロセウカディオンに入る。これ

は海に向かったナルテックスを出たところにある。ここには椅子があり布（カーテン）が吊っており、自分のクラニディオンを脱ぐ。そして立って神聖な福音書の朗読を待つ。それからプライボシトスから蠟燭を取ると、神聖な福音書に耳を傾ける。連祷が終わると座る。そしてアルトクリネース達と共に、宴会の食卓と皇帝の大宴会の表を作る。その後、皇帝達は密かにこのナルテックスを経て、秘密の階段を通り、これはこのナルテックスのテラスへ上っているが、皇帝達は宮殿に入る。」²⁶⁵⁾

最後にこの後、慣例どおりに晩餐会をおこなうことが記されている。

聖パンテレエモン

『テュビコン』の7月27日の部分²⁶⁶⁾には、この日、聖パンテレエモンの記念祭をおこない、大教会からフォロスへを行進し、ここで礼拝したのちさらに進んで、この聖人の教会で聖体礼儀をする。しかしどの聖パンテレエモンの教会かは書いてない。

一方、『儀式について』には以下のような記述がある。

「7月27日。同様に（儀式を）執り行う。聖パンテレエモンの記念日である。皇帝達はタ・ナルスー（ナルセス地区）のこの聖人の畏怖の念をおこさせる教会へ行く。・・・（中略：もし皇帝が船を使うならばタ・カニクレイウー（秘書官地区）で高官は待ち、側近は皇帝と共に船で行ってタ・カニクレイウーの船着き場で合流、馬で進むことが、ここでは書かれている）・・・ポルティコのプロピュライアまで行き、そこで馬から降りる。階段を上りアトリウムの東に向かって右側の部分を通る。そこにはマグストロス達、パトリキオス達、帝室の者達がいて、皇帝達を歓迎する。そしてそこから皇帝達はナルテックスに入り、金で飾られたサギオンを纏い、蠟燭を点けて皇帝の門に入る。そして入ると身廊の真ん中とソレアを通り、神聖な扉の外で再び蠟燭を灯す。そして神聖な至聖所に入り、布と殉教者の聖なる頭に接吻し、ペーマの東に向いて左の部分を通って、そこにあるテトラセロンに入る。そして再び聖職者達が神聖な頭を持ってきて、再び蠟燭を手に皇帝達は跳き、それ（頭）から神聖なアポミュリスマ（＝聖水？香油？²⁶⁷⁾）を取る。そして外に出て中庭に入り、そこのアナデンドラディオ（＝植物園？）に入る。そこで影に入ると、スカラマンガオンを脱ぐ。そしてコロビアを纏うと、戻ることし宮殿までの乗馬を命じるか、帰り道もそうしたいならば船を命じる。」²⁶⁸⁾

タ・カニクレイウーは秘書官（ホ・エビ・トゥー・カニクレイウー）という単語に由来する。位置はおそらく現在のシュレイマン・ジャーミーの北の金角湾沿いの何処かであろう²⁶⁹⁾。タ・ナルスーはナルセスという人名に由来するが、どのナルセスなのかは諸説ある。また具体的にどのあたりをさすのかも諸説あるが、ジャンンは『儀式について』のこの部分の記述から現在のシュレイマン・ジャーミーの北東の一帯だとしている²⁷⁰⁾。だがこの地区のパンテレエモンの教会は現存しないし場所も不明である²⁷¹⁾。

上記の『儀式について』と『テュビコン』の記述は同じ儀式に関するものなのだろうか。マテオスはそう考えているようである。つまりかれは『テュビコン』で述べている教会はタ・ナルスーのそれ、つまり『儀式について』で言及されているものだとしている。しかし『儀式について』の記述には、例えば総主教の登場のような両者の関連を決定づける要素は見られない。ここでは特に否定する理由もないので、マテオスに従うことにする。

なお『クレートロロギオン』はこの日の儀式には触れていない。

十字架の提示

『テュビコン』の8月1日の項には²⁷²⁾、一番最後に簡潔に

「この日、貴重な木を水に浸す儀式がある。」

とだけ書いてある。また『クレートロロギオン』にはこの日に関しては何もっていない。そして『儀式について』第二巻第八章²⁷³⁾にこの日の儀式についての記述があるが、これは大宮殿の中で完結したもので、おそらく『テュビコン』の儀式とは別のものであろう。それは以下のようなものである。

「早朝の頌歌を歌うと、スケウオフェラキオンに（価値ある木を）おく、そして教会（ネア？）の中、皆が跳く所で、長司祭は水をかける。早朝（の儀式）が終わると、すべての帝室の聖職者が近くに立ち、十字架を踏える聖歌（スタウローシマ）を歌う。そして命令をする皇帝達は、入ると価値があり生命のある十字架に接吻する。」²⁷⁴⁾

このあと、正装して蠟燭を持った門番、皇帝の聖職者（ネアの聖職者）達、ダフネーの聖ステファノスの聖職者達、宮殿の人達が、この十字架を掲げて行進し、宮殿内を練り歩いてダフネー宮の聖ステファノス教会におく。

同様な儀式が8月13日にもおこなわれる。

変容祭

ペトロス、ヤコボス、ヨアンネスの3人がキリストと山に登ったところ、彼の顔が太陽のように輝き服が光のように白くなり、モーゼとエリ阿斯と語り合っているのが3人には見えた。この事件を記念したのが変容祭で8月6日に執り行われる。この祭日は比較的新しく6世紀前後の成立で、帝都に入ってきたのは8世紀初頭、おそらくイェルサレムから来たものと思われる。この祭は12大祭の一つに数えられている²⁷⁵⁾。

『テュビコン』には大教会で前夜に晩祷と徹夜の勤め、当日の早朝に勤めがあったのち、聖体礼儀がおこなわれることが書いてある²⁷⁶⁾。

また『クレートロロギオン』には以下の記述がある。

「8月6日の日に、神の大きく普遍的な教会（ハギア・ソフィア）で変容の行進がおこなわれ、神聖な儀式が終わると・・・」²⁷⁷⁾

ユスティニアノスのトリクリノスで宴会がおこなわれる。

前章ですで見たと同じように『儀式について』には、この祭日を独立して取り扱った章はない。第1章の記述から生誕祭に準じることがわかるだけである²⁷⁶⁾。しかしながら、これらの記述から生誕祭、神現祭と同様にハギア・ソフィアで儀式がおこなわれ、皇帝もそれに参加したことがわかる。

聖母就寝祭

この祭は聖母マリアの死を主題としている。おそらく起源はイェルサレムで、6世紀には8月15日にこの祭がおこなうことが慣例となっていた。この祭日もマリアの五つの大祭の一つである²⁷⁹⁾。

『テュピコン』を見ると8月15日の項²⁸⁰⁾には、以下のことが記されている。聖母の就寝祭はブラケルナイの聖母教会でおこなうが、早朝、行進してベトリオンの聖エウフェミア教会を経てブラケルナイまで行くこと。前夜、総主教参加でカルコプラティアで晩禱、そののち徹夜の勤め。当日は朝の勤めののち、総主教はベトリオンへ行く。そこで礼拝後、ブラケルナイへ行進し、ここで聖体礼儀。

ベトリオンというのは前述のように金角湾沿い、現在スルタン・セリム・ジャーミーがあるあたりから海にかけてである²⁸¹⁾。しかし残念ながらこの教会も現存していないようである²⁸²⁾。

また『クレートロロギオン』には以下のような部分がある。

「8月15日には、人々は最も神聖な女主人、我等が聖母の就寝の行進をブラケルナイのすべてにおいて至高の彼女の教会へおこなう。そして神聖な典礼が終わると、海の宮殿の下のトリクリノスの特別の食卓で宴会を催す。」²⁸³⁾

一方、『儀式について』では第2巻第9章²⁸⁴⁾にこの祭日の記述を見ることができるのだが、しかし実は、前夜ブラケルナイで礼拝に参加するか否か、参加しない場合、天候が良ければ船で、悪ければ馬で行くこと、ブラケルナイ宮での準備の儀式、等が記述の中心となっており、教会での儀式が始まるところで章が終わっている。以下に引用したのはその最後の部分である。

「彼ら（廷臣達）に先導されて皇帝は再び（教会の）ポルティコの外に斜めに配置された列柱を通り、そこで行進を従えた総主教を出迎える。プライポシトスから蠟燭を受け取り、祈り、再びそれをプライポシトスに戻す。そして掲げられた福音書と命ある十字架に跳く。そして皇帝と総主教は両者互いに挨拶をし、接吻をする。皇帝はプライポシトスから行進用の蠟燭を受け取ると、向きを換えて先程のポルティコを通る。儀式長官はトロバリオンを始める。「守護に満ちた処女の産み出した者において。」このトロバ

リオンを前述の皆は奏でつつ、大教会のナルテックスに入る。官位の他の者達は進堂祭に従って、この祭を見る。」²⁸⁵⁾

ブラケルナイの聖母教会での聖母就寝祭の儀式が進堂祭に準じることは、この部分からわかる。ちなみに引用部分は、進堂祭に関する第1巻第27章の教会への入場に関する部分の記述と、そっくり同じである。

そうするとこの三つの史料の内容は、互いに矛盾しないことになる。

聖ディオメデス

『テュピコン』8月16日の項²⁸⁶⁾には、聖ディオメデスの記念祭が黄金門のそばの聖母の教会の中のこの殉教者の堂でおこなわれることが書いてある。

また『クレートロロギオン』には以下の記述がある。

「同じ日（聖母就寝祭）の午後、皇帝は聖ディオメデスの教会に行く。そして明るむ日、典礼をおこなう・・・」²⁸⁷⁾

しかし残念ながら『儀式について』にはこの日について記載がない。

洗礼者聖ヨアンネス（あるいは皇帝バシレイオス）

まず8月29日が、三つの史料でそれぞれどのような日として扱われているのか、比較して見たい。

『テュピコン』のこの日の項は以下のようになっている²⁸⁸⁾。

「同月（＝8月）29日、先駆者にして洗礼者、聖ヨアンネスの高貴な頭が切り落とされた記念日。彼の儀式をタ・スバラキウー（マ）の最も神聖な彼の預言（の教会）でおこなう。あげがた大教会から行進が」²⁸⁹⁾

ハギオス・スタウロス修道院の写本は、ここから先が失われている。マテオスはこれをバトモス島の福音書作者聖ヨアンネス修道院の写本で補っているが、基本的内容は矛盾しないようである。ジャンンはこの「タ・スバラキウー²⁹⁰⁾」を「タ・スフォーラキウー²⁹¹⁾」の異なる綴りの一つとしている²⁹²⁾。タ・スフォーラキウー（スフォーラキオス地区：人名に由来する）の洗礼者のそれはミリオンからフォロスへ行くメセーの北側にあり、10世紀の洗礼者信仰の中心の一つであった²⁹³⁾。

しかしながら『クレートロロギオン』の記述は、これとはまったく異なっている。「同じ月（8月）の29日、神聖にして正統な偉大な皇帝、我等がバシレイオスの記念（祭）をおこなう。スカラマンギオンをつけて、皇帝達のしたように聖使徒の教会に行進し、神聖な典礼を終え、栄光と共に同様に引き返し、ユスティニアノス・トリクリノスで宴会をおこなう・・・」²⁹⁴⁾

ところがこれに対して『儀式について』では、以下のように述べている。

「8月29日。同様に（儀式を）執り行う。洗礼者（前を行くもの：プロドロモス）聖ヨアンネスの斬首（の記念日）である。皇帝はタ・ストゥーディウー（ストゥーディオス修道院地区）のこの聖人の教会へ行き、既に述べた聖パンテレエモンの記念日のやり方に従う。・・・（中略：あげがた皇帝は海路を行き、廷臣達は教会の海側の門の外に集合、訪問先の修道院の修道僧達と皇帝の近侍は港で待ち、そこで皇帝と合流して教会に向かう）・・・皇帝達が門に近づくと、そこにはマグストロス達、パトリキオス達、オフィキアリオス達がいる。皇帝達に彼等はひれ伏して挨拶をする。そして立ち上がると順序よく彼等の後ろにつく。前を行く皇帝達は中庭を通って上り、その通路、ナルテックスの東に向かって右の部分を通って入り、そこで自分の金で飾られたサギオンを纏い、蠟燭を灯す。そして聖職者達と共に入る。再び蠟燭を灯す。聖体礼儀への入場をおこない、プライボシトスから香炉を取ると、香を焚き、ペーマの右側に進む。（ここにはプロドロモスの神聖な頭が置かれているからだ。）ここでも蠟燭を灯し、それに接吻して退出し、このメータトリーオンに入る。そしてスカラムギオンを脱ぎ、コロピアを纏い、側廊に入り、ペーマの東に向かって右の部分に入る。そして蠟燭を灯し福音書を拝聴する。その後、出るところこのアナデンドラディオン（植物園？）に入り、食事をする。もしも高官達に命ずる気があれば、修道士達との食事の間は待たせる。食事の後で立ち上がると（往に）通った道を抜け、前述のように先導されて高速船に乗る。」²⁹⁵⁾

先駆者は帝都でも早くから信仰の対象となっていた。しかし、彼を対象とした祭典は長い間、コンスタンティノポリス起源と思われる二つの祭、9月23日の受胎の記念日と、6月24日の生誕祭であり、この二つの祭は特に大掛かりな物ではなかった。8月29日に、斬首の記念を大掛かりな祭典としておこなうようになるのは、エルサレムでは5世紀のことだが、首都においては10世紀のストゥーディオス修道院が始めてのようである²⁹⁶⁾。この修道院は10世紀始めから、先駆者の頭部の聖遺物を持っていることでも有名になった²⁹⁷⁾。

以上の事実から考えて、おそらく『クレートロギオン』と『儀式について』の二つの史料の間で、8月29日の位置付けが大きく変わったものと思われる。ジャンンは先の聖遺物の獲得とあわせて、当時ストゥーディオス修道院が宮廷での評価を高めるために、積極的に活動していたことも記している。またこの修道院は9世紀においては政治的に総主教とも皇帝とも結ばず中立を保っていたが、10世紀初頭のレオン6世の「四重婚問題（レオンは世継ぎが生まれぬのを理由に、総主教の反対を押し切って、四人の女性と繰り返し結婚をした）」においては、皇帝側について論陣を張っている²⁹⁸⁾。このような背景と、前章で述べたこの部分の成立時期に関する問題を合わせて考えると、10世紀前半のある時期に変更があった、それまで聖使徒教会で皇帝バシレイオスの記念祭をしていたものを、先駆者の斬首の記念祭をストゥー

ディオス修道院でおこなうようになったのではないだろうか。

一方、総主教は上記の8月29日、9月23日、6月24日だけでなく、2月24日の先駆者の頭の発見記念祭も、さらに加えて1月7日と復活祭の土曜日におこなわれる先駆者のための儀式もすべて、タ・スフォーラキウーでおこなっている。また『儀式について』の記述には修道僧以外の聖職者は登場しない。ジャンンやマテオスはこのことをストゥーディオス修道院で儀式をおこなった時代とタ・スフォーラキウーでおこなった時代とがあるかのように述べている²⁹⁹⁾。しかし上記の歴史的背景を鑑みると、むしろ皇帝はストゥーディオス修道院で、総主教はタ・スフォーラキウーでそれぞれ別に儀式を執り行ったとみる方が、より自然である。

1-2 動暦の祭

乾酪を断つ週の火曜日

『クレートロロギオン』には謝肉祭の宴会（この日の教会の儀式には触れていない）に続いて以下の記述がある。

「テュロファゴスの第三日（乾酪を断つ週の火曜日）にはコンスタンティノポリス大主教が皇帝とシュンクレートス全員を総主教宮殿の大きな聖域に招待する。神聖な典礼が終わると総主教宮殿の大祭具室で宴会がおこなわれる・・・」³⁰⁰⁾

しかし『テュピコン』はこの催しについてなにも語っていない。『儀式について』にもこの儀式について言及はない。

四旬節第一週月曜日

この日は四旬節の最初の日であること以外に、宗教上の催しはない。しかし『儀式について』第2巻第10章によると皇帝はこの日、大宮殿のマンナウラ（マグナウラ）の広間で儀式をおこなったのち、ハギア・ソフィアに行って第三第六の勤め（トリトエクテ）に参加する。

この宗教儀式は四旬節中は毎日、それ以外は土日の日中おこなわれ³⁰¹⁾、形式上は通常の聖体礼儀の前半、御言葉の礼儀だけを独立させたものである³⁰²⁾。それゆえ構成は交唱聖歌、入場、聖歌、連禱からなっている。昼の第三の刻から第六の刻の間におこなわれるため、このような名前がついたようだ。

ちなみに当時の時間は日の出から日の入までを12等分して昼の刻、日の入から日の出までを12等分して夜の刻とし、日の出を（昼の）第一の刻と呼び、以下第二の刻、第三の刻と続いていた³⁰³⁾。第三の刻と第六の刻の間とは、午前中、おおよそ8時前後から11時前後までをさす。

さてここで『儀式について』の前述の部分を見てみると以下ようになる。

マンナウラでの儀式のあとで、皇帝は青銅門を通り神聖な井戸に行く。

「そこで蠟燭を点けて神聖な井戸に接吻する。総主教は彼と会って、神聖な井戸から大きな門に入り、貴重な十字架に型通りに跳く。そして総主教は型通りに主人達に香をまき、彼に接吻する。そのあとでそこに置かれた門を通してペーマの右側の部分に向かって入る。シュンクレートス全員がバシリコス達とクーブクリオン達と共にいて、主人達を称賛する。そこから神聖な扉に入り、慣例どおり蠟燭を点け、型通り順番に物事をおこなう。そののちカストレーシオスの手から総主教は香炉を取って、皇帝に渡し皇帝は祭壇のまわりに香をまく。そののちペーマの右側の部分を通して、小さな神聖な扉から出て、主人達は総主教と紫の列柱まで行き、そこで暇乞いをして彼に接吻する。そして総主教はペーマに入り第三第六の勤

めをおこなう。一方皇帝はメータトリーオンに入り、第三第六の勤めが終わったのちに、密かにメータトリーオンの階段を通してギャラリーへ登る。そして通路を通して密かにマンガラピトスとヘタイレイアスに先導されて神の加護ある宮殿に入る。」³⁰⁴⁾

四旬節第一週日曜日：正統信仰（の勝利）の日

843年3月11日、イコン破壊運動が最終的に失敗に終わり、イコン崇拜が正統な信仰として復活したことを記念して、イコン擁護派の中心であったブラケルナイの聖母教会から正教会の中心であるハギア・ソフィアへ行進がおこなわれた。このことを記念した祭が四旬節第一週の日曜日におこなわれる正統信仰の祭である。この祭は9世紀末には年中行事として定着した³⁰⁵⁾。

しかしこれまでに多くの研究者の首を傾げさせてきたことだが、『テュピコン』にはこの祭について、一切、記述がない。

『クレートロロギオン』には、ブラケルナイから行進が発する事は明記されているが、聖体礼儀の場所と次第には言及がなく、すぐに記述は宴会へと移ってしまう³⁰⁶⁾。

『儀式について』は第1巻第28章をこの儀式のために割いている。それによると、前日、総主教はブラケルナイの聖母の教会に行く。そしてそこで徹夜の勤めをおこなう。大教会を含めた街中の教会、修道院でも同様に夜の勤めがある。そして日曜日の朝、大教会へ行列を伴って移動する。ただし皇帝は参加しない。

「皇帝はサギオンをつけて宮殿を出てスパタリキオンの門を通り、自分達のサギオンをつけたクーブクレイオンの者達に先導されて、マンナウラとその高い通路を通り、木の階段から大教会のギャラリーに入る。皇帝はギャラリーに入って祈ると、蠟燭を灯し、彼等すべて規則に従い、白に着替える。行進が近づくと、合図を受けて、皇帝はギャラリーのメータトリーオンから出る。すると彼をパトリキオス達がセクレトン（祭具室）の大トリクリノス（食堂、広間？）でシュンクレートス全員と共に出迎えて地にひれ伏す。それから皇帝の合図を受けたブライボトスは儀式長官にそれを送り、（彼は）言う：「ご命令を」。そして彼等は歡呼する：「永き善き時を」。

そして皇帝は受け皿の（上に立てた）蠟燭を持った皆に先導されて、大きな螺旋階段を下り、復活祭の板のある学校を通して段を下り、大きなナルテックスには入らずに、そのかわりに左に曲がって三角形（？）からメータトン（??）に向かう。段のところで儀式長官が言う：「お進みください、陛下」。そしてアテュルの階段を下り、そこで行進を迎える。蠟燭を灯し祈りを捧げ、価値ある十字架と汚れなき福音書に跳き、総主教に接吻して行進の前を通過していく。儀式長官はトリバリオンを始める：「真の教義の・・・」、そして行進のすべての参加者も歌う。ナルテックスに入った皇帝は、行進と共に総主教が到着する

まで座る。総主教が到着すると皇帝は立ち上がり、二人は皇帝の門の前に立って、皇帝は蠟燭を灯して祈り、総主教は入場の祈りをおこなう。祈り終わると皇帝は蠟燭をプライボシトスに、このものは儀式長官に返す。総主教が祈りを終えると、皇帝は汚れなき福音書に跪き、互いに手を取り合って身廊の中央とアンポの横を通り、曲がってソレアに入り神聖な扉の前に立つ。そこで皇帝は蠟燭を取って祈り、その後でこれをプライボシトスに渡す。皇帝と総主教の両者は跪いてから、(総主教は)至聖所に入り神の典礼を執り行い、皇帝はメータトーリオンへ進み、そこで神の典礼に参加する。この日には皇帝は至聖所には入らない。

重要な点は以下のことである。神聖(なパンと葡萄酒)の行進の際にも愛の(接吻の)際にも(皇帝は)メータトーリオンの扉から出ないが、領聖の際には出て領聖を受ける。神の典礼が終わると皇帝は、メータトーリオンから出て総主教と会い、二人は神聖な井戸まで通り、互いに挨拶をして接吻する。皇帝はそこから退出し、廊下を通過してカルケーの小さな門に入り……³⁰⁷⁾

しかしこれに続く部分では、大変興味深いことが書かれている。

「古いもの(古いこの儀式)はこのような(以上のような)形式であった。現在のところ皇帝は、前述のように、入場まではすべてをおこなう。だが入場の際にはペーマに入り(皇帝達は)祭壇と布に跪き、至聖所の脇とコンクの後ろの螺旋階段を通過してギャラリーに上り、メータトーリオンに入ると、自分のクラムスだけ脱いで神の福音書と連袴を聴く。すべてがすむと食卓係がアルトクリネースと共に入り、招待者の表を書く。皇帝達は出ると総主教のメータトーリオンまで行き、そこに留まり(?)自分のディベーションを脱ぎ、神聖な典礼が終わって総主教が上ってくるのを待つ。プライボシトス達は、総主教の上ってくる通り道に行き行って座る。そして彼が上ってくると手を挙げ、彼に接吻して、彼を皇帝達のところへ案内して行く。そして総主教は習慣通り脱くと、皇帝達を掴み外に出て、彼等と食卓につく。すると招待客が入り彼等と食事をする。それから彼等は立つと皇帝達は、再び通路を通過して宮殿に行く。」³⁰⁸⁾

なお参考までにナルテックスとアテュルの間にある「三角形」と「メータトン」が何なのかは、後で触れるようにはっきりとはわかっていない。

四旬節第三週日曜日

『儀式について』には第1巻第29章と第2巻第11章の二章がこの日に当てられている。第29章はこの日の夕方、パトリキオス達が皇帝とクリュソトリクリノスで会食をする前に、ファロスの聖母の教会へ行き、価値高い木材を拝むことが³⁰⁹⁾書いてある。そして第2巻には以下のようなことがのっている。

四旬節第三日曜日朝、第三第六の勤めのあと、

「スケウオフルキオンにある価値があり生命のある十字架は運び出される。そのあと、(新)教会の

中、皆が跪く所で、長司祭は香水をかける。早朝(の儀式)が終わると、(十字架を)ネアのアナバシオン(ギャラリー)に置き、ネアの聖職者と宮殿の帝室の聖職者が共に上がり、いつもと同じ十字架を讃える聖歌(スタウローシマ)の演奏を捧げる。そして命令をする皇帝達は、入ると価値があり生命のある十字架に接吻する。」³¹⁰⁾

そのあとでネアの輔祭、正装した大宮殿の門番達、皇帝の聖職者達、ダフネーの聖ステファノスの長司祭、宮殿のディアタリオス達が、十字架を掲げ宮殿内を行進する。そしてダフネー宮の聖ステファノス教会に置く。そしてこのうちの一つは、その後、大教会つまりハギア・ソフィアに運び込まれるが、他の十字架は宮殿から外には出ない。

『クレートロロギオン』はこの日のことを記録していない。また『テュピコン』には³¹¹⁾、大教会で聖書の朗読の後、十字架を崇拝する儀式がおこなわれるとあるが、宮殿内の儀式については何もっていない。

さて以上見てきたように、『儀式について』の二つの章は同じ日におこなう二つの異なる儀式について、説明している。おそらくパトリキオス達が祈りを捧げた「価値ある木」は、昼間の儀式で使われた十字架のうちの一つなのだろう。第2巻の記述から、十字架のうち一つはハギア・ソフィアに行く(おそらく返却される)が他は宮殿内に残ることになっている。そのうちの一つがファロスの聖母教会に置かれていても不思議なことではない。またこの教会にはポルフェログネトスが新たに製作させた巨大な十字架があった³¹²⁾。あるいはそれがこの一連の儀式で使用されたのかも知れない。

四旬節第六週日曜日：聖枝祭(椰子の日曜日)

四旬節第六週日曜日は復活祭の前の日曜日にあたる。聖枝祭はキリストが受難の前にイェルサレムに入場したことを記念するもので、4世紀に始まったと思われる。シリアやパレスティナでは6世紀始めには、この祭はすたれてしまったが、帝都では盛大におこなわれ、12大祭の一つに数えられている³¹³⁾。

『テュピコン』は以下のことをのせている³¹⁴⁾。

前日はラザロスの土曜日といわれ、キリストがイェルサレムに入場する前に、ラザロスという男をよみがえらせたことを記念している。この祭が大教会で洗礼式をともなって、総主教によっておこなわれる。そしてこの日の夜、聖枝祭のための晩袴と衾夜の勤めがある。

早朝、総主教は青銅四面門近くの40殉教者の教会に行き、ここで行進を用意する。参加者には聖職者が俗人かを問わず全員に椰子が配られる。礼拝と聖歌ののち、フォロスへ行き、神の栄光を讃え大教会へと行進して、聖体礼儀をおこなう。

ところが『儀式について』はまったく異なった儀式について述べている。この史料では聖枝祭は前夜の

晩禱が第31章³¹⁵⁾、日曜日の儀式が第32章³¹⁶⁾と二つの章が使われている。

まず第31章であるが、以下のように記している。

夕刻、皇帝は聖デメトリオスの教会の聖母のイコンの前に、ヘーリアコンへ続く門の方を向いて立つ。東側の銀の門から出た元老院議員達は、列を作って聖デメトリオス教会に入り、各々皇帝から、季節の花の飾りがついた椰子の枝を受け取る。高官達は小さな銀の十字架ももらう。それからこの教会の別の門を出てファロスの聖母の教会に入る。ここで晩禱に参加し、プライポシトスがクーブークリオン³¹⁷⁾の者達に椰子を分配する。それから皆は象牙の門を通して出る。

次いで第32章では以下のようなのである。

廷臣達はユスティニアノスのトリクリノスで行進の準備をする。皇帝はクーブークリオンと共にクリュソトリクリノスの玉座につく。プライポシトスの合図で次々と人々が入室して、皇帝に挨拶をする。最後に高官達が入り謁見の儀式をおこなったあと、彼等は、トリコンクの水盤へ行く。皇帝はそこで彼等と合流し、行進してダフネーへ進み、聖母の教会に入り、蠟燭を点け、祈り、連禱に参加する。次に十字架の前へ行って祈り、聖ステファノスの教会へ入る。そして祈り、連禱に参加する。そして高官達と分れてクリュソトリクリノスに戻り、ここでも連禱をおこなう。それからファロスの聖母の教会で聖体礼儀に参加して、ユスティニアノスのトリクリノスの食卓につく。

ところが『クレートロロギオン』には次のように説明されている³¹⁷⁾。聖枝祭には宮殿内で儀式をおこない、

「ファロスの聖母の教会からダフネーの三位一体の教会まで行進して」³¹⁸⁾

そのち宴会をユスティニアノスのトリクリノスでおこなう。

これをどう解釈するべきなのだろうか。『儀式について』に記録されている行進は、トリコンクの水盤のそばから始まり、ダフネー宮の教会をまわってトリコンクに戻って終わっている。ファロスの聖母教会には行進とは別に聖体礼儀のために行くのである。二つの記述が一致しない理由は不明である。唯一考えられるのは、おそらく『クレートロロギオン』成立以降の50年間にこの儀式が大きく変わったため、大幅に改訂されたのではないか、という可能性である。

神聖かつ偉大な週（受難週間）

聖大木曜日

『儀式について』第1巻第33章によると、この日の皇帝の行動は以下のようである。

皇帝は午前中に馬で養老院を訪問し、宮殿に戻る。そののち

「神の典礼の時間が来ると皇帝は、ファロスの最も神聖な聖母の教会に行き、神の儀式に参加する。も

しも皇帝が命令するならば、パトリキオス達は呼ばれて行ってそこで儀式に共に参加し、もしもそうでなければ第一の殉教者聖ステファノスの教会に行きそこで神の儀式を終える。神の儀式が終わったら、同じ教会のナルテックスでベンチに腰を下ろし、マグストロス達、パトリキオス達、プライポシトス達、その他の者達は皇帝の手から各々りんご一つと肉柱一つを手取る。もしも皇帝がそこに座るように命じなければ、クリュソトリクリノスの皇帝のヴォールトの下に行き、そこで既に決められているように全てを分配しベンチに腰を下ろす。彼らは皇帝の手に接吻し、歓呼し退出し、その後皇帝も退出し・・・」³¹⁹⁾

友人達との宴席にでる。

当然ながら『テュピコン』にはこれと対応する記述はない。

また『クレートロロギオン』からも、残念なことに以下のことしかわからない³²⁰⁾。宮殿で行進し廷臣達を昼食に招く。そして教会名は上がっていないが、礼拝のあとで、ユスティニアノスのトリクリノスで宴会をおこなう。

おそらく『クレートロロギオン』の教会はファロスの聖母教会なのだろう。あるいは『儀式について』も触れているように、廷臣達の身分や役職によってそれぞれ別の教会、礼拝所を使用したのかもしれない。

聖大金曜日

『儀式について』第34章³²¹⁾から以下のことがわかる。

まず皇帝は第二の刻に乗馬しブラケルナイに行く。

「そして教会に入ったら神聖な扉まで行く。そこで蠟燭に火をつけ祈り、至聖所に入る。香を取り、あたりに香を撒き、祭壇を整え自分の献納品を置き、横から出て、神聖な箱の教会に入る。そして慣例通りに、その教会のその礼拝所の神聖な扉の前で蠟燭に火を着け、至聖所に入り、香を取り、祭壇のまわりに香を撒き、献納品を取ると祭壇の上に置く。その後、向きを変えて馬か船かで宮殿に戻る。」³²²⁾

また第三あるいは第四の刻に、命令を受けたパトリキオス達は聖エイレーネー教会で総主教がおこなうカテーケーセス（聖大土曜日の洗礼式の準備のための聖別に起源をもつ儀式）に参加する。

そしてもしも皇帝が第三第六の動めの前にブラケルナイに戻れば、まず彼は来週の儀式に必要な黄金の台と黄金の器を準備し、それから動めに参加しファロスで神聖な槍を拝む。もしもそれよりあとに戻ったときは、まず動め、そして槍、最後に準備の順でおこなう。

同じ日に関する『テュピコン』の記述³²³⁾を見ると、いくつかの一致に気がつく。それは以下の二点である。

まずこの日、キリストの脇腹を刺した神聖な槍が午前中、開帳され礼拝される。そののちこの槍は大宮殿に戻される。次に第三第六の動めののち、総主教はハギア・エイレーネーに行きカテーケーセスをおこ

なう。なおこの日の儀式は、すべて大教会でおこなわれる。

またこの日に関して『クレートロロギオン』には記述がない。

聖大士曜日

まず『儀式について』の記述から見ていくことにする。第1巻の第1章の最後の部分と第35章が、この日の皇帝の行動を記録している。それぞれ主要部分を引用すると以下のようになる。

まず第1章では宮殿内での出発の準備のようすが語られる。そして皇帝の大教会での行動、帰路おこなわれる儀式、と論は進む。その間、繰り返し受胎告知の例に従うことが語られる。以下は大教会での出来事である。

「・・・そして皇帝達は、前述のように、神聖な井戸を通り、既に述べたように、ベーマに入り、教会での儀式の時の常で、布をかけて、プライポシトスはクービクーラリオスの手からケンテーナリオン（100リトリーの黄金）を取り、皇帝に渡す。皇帝はこれを祭壇の水盤の台に置く。その後皇帝は、受胎告知のときに既に説明した型で、香を焚き、このベーマの左側の部分を通して、スケウオフィラキオン（宝物庫）に入る。ここで皇帝達は聖なる宝物に香を焚き、ここの黄金の椅子に、総主教はここにある玉座に腰を下ろす。

そして総主教は皇帝達に甘松と肉桂を渡す。スケウオフィラキオンのカルトゥーラリオスが彼等に跪いた後で、総主教の祈りがおこなわれ、外に出るとシュンクレートス達に甘松を分配する。この分配が終わってから、皇帝達は総主教と共に外に出て、ベーマの左側の部分を通り、聖ニコラオス（の通路）を通して神聖な井戸へと続く大きな門へ向かって出る。この門の中に総主教と皇帝は立って、総主教は皇帝達に祝福、あるいは贈り物を渡し接吻する。皇帝達はそこで暇をいして、神聖な井戸を通る。皇帝達が神聖な井戸の外に出ると、そこに青党のデマルコスが・・・」³²⁴⁾

第35章で以下のようなことが述べられている。まず皇帝は大宮殿内で準備し、青銅門を通して大教会に向かい、

「皇帝は神聖な井戸に入ると蠟燭をつけ、井戸の堂の中で総主教に歓迎される。両者は互いに挨拶と接吻を交わし、教会に入って神聖な扉まで進む。皇帝は神聖な扉の前に立つと、蠟燭を灯して祈り、至聖所に入る。祭壇のその布を換えると、プライポシトスから100リトリーの黄金を取り、それを祭壇の上の段の上に置く。皇帝はそこに立ったままで、祭壇を換え、プライポシトスからやはり大変高価なもう一つの献納品を取ると、それを祭壇の上に置く。その後、プライポシトスから香炉を取ると、至聖所のぐるりに三回香を焚く。側面左側の部分を出て、スケウオフィラキオンへ行く。入ると蠟燭をつけて祈り、祈り終えるとすべての宝物に香を焚き、しばし総主教と席につく。それからクーブークリオンの者達と他

の高官達が、入室の仕来りにしたがって入室し、宝物庫係から甘松を取る。それから皇帝は立ち上がりスケウオフィラキオンから外に出て、側廊のナルテックス、この大教会の女性輔祭達が仕来りにしたがって立つ場所、を通り、そしてベーマの左側の門を経て退出する。総主教は彼に祝福を贈る。

それから二人はベーマの後ろの聖ニコラオスの細い通路を通して、神聖な井戸まで進む。そして再び総主教は皇帝に祝福を与え、両者互いに接吻をする。皇帝は上記の全員に先導されて退出し、カルケーの小さい門から入り・・・」³²⁵⁾

大宮殿に戻って、ファロスの聖母の教会で聖体礼儀にでる。

「(夕方) 神の儀式の時間になると皇帝は、ファロスへ神の神秘の勤めに行く。もしも皇帝が命令するならば、パトリキオス達は行って同じ場所で儀式に共に参加し、もしもそうでなければ、ヒッポドロモスへ行き、そこの第一の殉教者聖ステファノスの教会で神の儀式をおこなう。そして「よみがえりたまえ、神よ」を歌い初めるときには、クービクーラリオス達は立ち、黄金の戸口（のカーテン）の外に戸口（用のカーテン）を釣り下げ、そして「よみがえりたまえ、神よ」という同じ主題の聖歌を歌い初めるとき、外の戸口（のカーテン）を持ち上げ、金の戸口（のカーテン）だけをそのまま残し、そして神の典礼が終わると、その場所で、「神よ、我等が皇帝に御加護を」と叫ぶ。すぐにトリベトンで楽が奏され・・・（以下略）」³²⁶⁾

そしてそののち晩餐会がおこなわれる。

まずハギア・ソフィアでの儀式を比較してみることにする。両者で異なるのは、至聖所での献納品、スケウオフィラキオンで甘松を分配する場所、スケウオフィラキオンからの帰りの経路、三箇所である。

またファロスでの儀式に関しても、黄金の戸口の前に戸口を置き（あるいはカーテンを吊るし）開閉する部分は、解釈が難しい。またこの聖母教会での儀式は、第1章では記述がその前で終わっているため言及がない。

なお『クレートロロギオン』には、以下のことが簡単に述べられている。

聖大士曜日に皇帝はハギア・ソフィアに行き

「スケウオフィラキオンに入り、香油の分配をおこない」

宮殿に戻ってファロスの聖母の教会で聖体礼儀に参加し、そののちユスティニアノスのトリクリノスで宴会をおこなう³²⁷⁾。

この二つの史料の三つの記述で、細部には問題があるものの聖大士曜日の特別な儀式の大枠は一致する。

一方これに対応する記述を『テュピコン』で探すと以下の次第が記されている³²⁸⁾。

日中：朝の勤めの交唱聖歌、天の神の栄光に三聖唱、聖歌、小洗礼堂で洗礼式、

「第六の刻の前後、皇帝が（ハギア・ソフィアの至聖所に）入り、祭壇の布を替える。そののち総主教

夕方：交唱聖歌のあとで総主教は福音書、司祭、香炉係、照明係と入場、アプスの玉座につく。聖歌、朗読の後、総主教はアプスを下りて大洗礼堂へ行く。着替えて堂に入ると三回香をまき、洗礼盤のまわりを巡ってから、輔祭の助けをかりて決まり通りに洗礼式をおこなう。その間、身廊では朗読と聖歌。洗礼式が終わると総主教は洗礼を受けた人々と、中央の門から教会に入る。聖歌の中、正装した総主教は12人の主教と共に至聖所に入り、玉座につくが、このとき総主教は中央から、主教達は脇の扉から入る。そののち、三聖唱と聖歌、最後に領聖がある。

以上の次第のうち、『儀式について』、『クレートロロギオン』の記述と関連があるのは上記引用部分である。この動作に関して『クレートロロギオン』は何も述べていないが、『儀式について』はどちらも、祭壇の覆いの交換に触れている。ただ、不思議なのは、『儀式について』では二つの記述とも、交換の後、皇帝が香を焚くことになっているが、『テュビコン』では総主教がすることになっていることである。

聖大日曜日：復活祭（復活大祭）

復活祭はキリストの復活を祝うもので、ユダヤ教の過ぎ越しの祭がその原形になっている。3世紀にはすでに、この祭は執り行われていた。現在のように春分の日のあとの最初の満月の日のあとの日曜日と決まったのは、ニカエアの第一回公会議（325年）においてである。復活祭はすでに見てきたように動暦の中心であり、四旬節など動暦のすべての祭が復活祭と関連づけて考えることができる。先に聖大土曜日のところでも述べた、夕方の洗礼式も非常に大規模な祭の準備のための晩禱と見ることができる³³⁰⁾。

『儀式について』で復活祭の日曜日に関して述べているのは第1巻第1章と第4章、それに第9章の後半部分、バリーの説では本来の第18章である。このうち第1章では、生誕祭と同じ儀式を執り行うこと³³¹⁾、大教会へ行く前に宮殿で特別な儀式をおこなうこと³³²⁾、語られる。生誕祭の儀式の次第に関してはすでに述べたので省略する。また第4章は、宮殿と教会の間で、デーモス達がどのような口上を述べるのかが記されており、本論分の主題とは関係がない。そこで以下、引用をもとに第9章の後半部分³³³⁾を見ていくことにする。

記述は宮殿内での準備の儀式の途中から始まる。そののち皇帝は廷臣達と、生誕祭と同様にミリオン、アウグスタイオンを通り、ホーロロギオンの門から大教会に入る。

「そのあとで皇帝はナルテックスの扉の後ろ、メータトーリオンの中、吊るしてある布の中に入る。ブライボシトスは彼の頭から冠をとる。ナルテックスに入ると、総主教が彼と会う。皇帝は福音書と十字架に接吻する。それから皇帝と総主教は互いに挨拶をし、接吻して皇帝の門まで進む。そして総主教は神の典礼の入場の祈りを捧げ始め、一方の皇帝はブライボシトスから蠟燭を取り祈る。二人が主に自分達の祈

りを捧げると、皇帝は蠟燭をブライボシトスに、そして彼は儀式長官に返す。皇帝は価値ある十字架と汚れなき福音書に跪く。（皇帝は）総主教と共に身廊の中央を通って進み、アンボの脇を経てソレアに入る。そして神聖な扉に近づく。総主教は至聖所に入るが、皇帝は蠟燭をつけて祈り、蠟燭をブライボシトスに返す。それから至聖所に入る。入るときには府主教が神聖な扉を遮るように立って、彼は皇帝にかすかに合図をする。皇帝はそこに固定されている十字架にキスをして、至聖所に入る。祭壇の前で祈り、そこに二枚の聖体布を広げ、持って来たものを置く。丸い盆二つ、杯二つ。それから聖なる産着に接吻する。その後、ブライボシトスから献納品を取りこれを祭壇に置く。

そして皇帝と総主教は互いに跪き、皇帝は至聖所から出てメータトーリオンに入る。そこで蠟燭をつけて祈り、肩掛を置く。それから神の典礼に参加するが、神聖（な贈り物）が通り過ぎるときには、皇帝はクラムスを纏い、慣例どおりに人々に先導されて、皇帝の運んだ蠟燭、言い換えればあかり（松明？ランプ？）が立っている所まで進む。パトリキオスの全員はそこに立ち、皇帝は彼等の真中を通る。ブライボシトスが（おいてある）蠟燭を掴み、これを皇帝に返す。皇帝は神聖（な贈り物）と同行している者達を通り過ぎ、ソレアの中に入る。そして神聖な扉の側に進む。ブライボシトスに蠟燭を返すと、彼はそれを神聖な扉の脇のソレアの上、右側のところに置く。皇帝はこの蠟燭の脇に立ち、そこを神聖（な贈り物）が通り過ぎる。そして神聖（な贈り物）が通り過ぎたら、皇帝と総主教は両者互いに跪く。そして皇帝は仕来りにした人が先導されて、至聖所の外を通りメータトーリオンに入る。神の愛（の接吻）の時間が近づくと、儀式長官がブライボシトスに、彼が皇帝に知らせる。皇帝は出て、上記の人々、すなわちクーブークリオンの高官達、パトリキオス達、ストラテゴス達に先導されて、シュンクレートスと共に進み、至聖所の右側の脇に、障壁にもたれるようにして横の移動式祭壇³³⁴⁾に立つ。その場所で皇帝は総主教、府主教達、主教達、教会の高僧達、慣例どおりの人達に愛（の接吻）を送る。その後、皇帝と総主教は互いに跪く。皇帝は下りると自分がいつも行進（に参加している廷臣）のそれぞれに愛（の接吻）を与えるところに立つ。布の中にマギストロス達、パトリキオス達、ストラテゴス達、ドメスティコス達、役所の部長達、デーマルコス達、儀式長官が入る。皇帝に接吻するために入ったこれらの人々全員は、御辞儀をするが、復活祭ゆえにひれ伏しはしない。しかし各々は規則に従って進み出て皇帝に愛（の接吻）を送る。その後、全員は自分達の規則のところに立つ。皇帝と総主教は両者互いに跪き、皇帝はメータトーリオンに入る。そして神との結合が近づくと儀式長官が入室してブライボシトスに、この者が皇帝に教える。皇帝は出ると、上記のものすべてに先導されて進み出て、至聖所の前の帝室の移動式祭壇の前に立つ。そして祈るとそこに上り、総主教の手によって、キリストの生誕に先立つ祭の所で説明した方法で、領聖を受ける。皇帝の領聖の後に、皇帝と総主教は両者互いに跪き、皇帝はメータトーリオンに入る。トリクリノスに出ると、命令を受けた友人達と食事をする。」³³⁵⁾

ここまでの部分で第1章と異なるのは献納品の有無、領聖を受ける場所、以上の二点である。これは生誕祭の場合と同様、第1章の記述は五つの祭に共通の部分であって、細部は第9章の方が復活祭の実際に近いものと思われる。また最後の部分の記述からおそらく、メータトリーオンの中にトリクリノスという名の空間があったことがわかる。

このあとに以下のような皇后に関する記述が挿入されている。

「以下のことは重要である。神の典礼が始めると、クーブクリオンの者達はすぐにギャラリーに上る。皇后はこのギャラリーにあるメータトリーオンから出て玉座に腰を下ろす。クーブクリオンの者すべては横に並んで立つ。宦官のプロートスバタリオス達は皇后の後ろに立つ。皇后の合図を受けたプライボシトスは、杖を持った二人のオスティアリオス達と出て（以下の女性を順に）呼び入れる。・・・（中略：呼ばれる人のリスト）・・・全員が皇后に愛（の接吻）を送った後、プライボシトスに合図を送り、彼は言う：「ご命令を」。そして彼女らは「永き善き時を」（と言ってから）、退出する。皇后は再び立つと、自分の家臣のクービクラーリオス達と共に、メータトリーオンに入る。他のクービクラーリオス達は皇帝のところを下りていく。」³³⁶⁾

皇后が教会での儀式の最中にどうしているのかは、『儀式について』ではほとんど触れられていない。その意味でも上の記述は大変重要なものである。

そしてこののち、再び皇帝の行動が描かれる。この部分では第1章の記述とこの章との間に大きな差はない。

「皇帝は食事の席を立つと、バステートルから肩掛を掛けてもらい、プライボシトスに総主教を呼ぶように命じる。総主教が入室すると、皇帝と総主教とは両者互いに跪く。そして食事をしていたトリクリノスを通ると、神聖な井戸へ出るときに、皇帝は門の中に総主教と立ち、プライボシトスとアルギュロスはこの扉の外に立つ。そこでアルギュロスの手からプライボシトスは黄金の袋を取り皇帝に渡す。皇帝はこれを何時も受け取っている人達に渡す。アルギュロスは大声で言う：「かくも善き主かな」。この彼の厚意を受けることになっているのは、長輔祭、オスティアリオス達、歌手達、教会の警備人達である。その後、神聖な井戸の中につられた布の中に入る。プライボシトスは冠を取ると総主教に返し、総主教が皇帝に戴冠する。そのあとで、総主教は大きな皇帝に祝福を与え、小さなほうにも同様にする。皇帝はプライボシトスから献納品を取って、総主教にお返しとして渡す。すると総主教はお返しとして塗油する。もう一人の皇帝も同じようにする。

皇帝と総主教の二人は互いに跪き接吻する。皇帝はそこから出ると、（アウグスタイオンの）中央を通り、カルケーの大きな門に入る。・・・」³³⁷⁾

そしてこのあと皇帝は大宮殿に戻り、招待客と宴会をおこなうが、このときの様子『クレートロロギ

オン』の記述の中心となっている³³⁸⁾。

さて一方の『テュビコン』からは、この日、通常の聖体礼儀と同じ枠組みだが、遙に長大かつ壮麗な儀式がおこなわれることがわかる³³⁹⁾。

復活の週：光の週（光明週間）

復活祭の月曜日

まず『クレートロロギオン』にはこの日、聖使徒教会で儀式があり、その後、大トリクリノスで宴会が開かれる、となっている³⁴⁰⁾。

また『テュビコン』には以下のことが書かれている³⁴¹⁾。

この日は使徒達の記念祭で聖使徒教会で儀式がおこなわれる。大教会で朝の勤めの後、祈禱と交唱聖歌。総主教は脇の扉から至聖所に入り、輔祭が朗読、アンボからトロバリオン。行進が始まる。行進はフォロスへ行き、そこで聖歌隊が神の栄光を讃える。輔祭が連禱をおこない、総主教は礼拝をおこなう。そののち行進は聖使徒教会へ進む。そこでも聖歌隊が神を讃える。そののち、教会での儀式が始まり領聖をもって終わる。なお大教会でも同じ儀式がおこなわれ、午後の勤めがある。

これら二つの史料が述べている次節を、『儀式について』は第1巻第10章³⁴²⁾でさらに詳細に記述している。以下に主要部分を引用する。

まず皇帝は大教会で準備をし、青銅門をへて大教会へ行く。そして神聖な井戸が納められている堂へ入る。

「・・・皇帝は蠟燭を灯すと祈り、それをプライボシトスに返す。総主教は（教会から）出て神聖な井戸で皇帝と会う。お互いに挨拶し接吻すると皇帝と総主教は教会に入る。彼等は神聖な扉の前まで進み、総主教は至聖所に入るが、皇帝は神聖な扉の前に立って蠟燭を手に祈り、祈り終わると蠟燭をプライボシトスに返して、至聖所に入る。祭壇に跪いて祈ると、ソレアを通りソレアを出るときに、彼にプライボシトスが行進用の蠟燭を渡す。そしてアンボの合唱隊が「キリストは復活された」と始める。

慣習どおり皆に先導された皇帝は、身廊の中心を通り皇帝の門から出て、ナルテックス、アトリウムを通り、アテュル（アトリウム西側の建物）の階段を下り・・・」³⁴³⁾

そして皇帝はミリオンとメセーを通過して、フォロスに行き、コンスタンティノスの柱の礼拝所正面の階段を上る。そして皇帝は壇上に、廷臣達はより低い決まった場所に立って総主教を待つ。

「行進と共に総主教は到着すると、彼等の中央を通る。十字架が皇帝の立っている壇を上るときには、皇帝は蠟燭を点けて価値ある十字架に跪き、跪くと蠟燭をプライボシトスに、この者は儀式長官に戻し、これを儀式長官は行進用の燭台に固定する。十字架は上ると皇帝の後ろの台、教会の門の前に置かれる。

総主教は、仕来りて彼と共に行くことになっている人々と、上って教会に入る。そして聖職者達は低いところで、普通の人々と一緒に皇帝の左側にいる。そして連禱が行われると皇帝は、プライポシトスから蠟燭を取って跪く。それから再びこれをプライポシトスに、プライポシトスは儀式長官に渡し、これを彼は行進用の燭台に固定する。すぐさま儀式長官はパトリキオス達と他の高官達に命じ、彼等は皇帝を先導し始める。皇帝と総主教は互いに挨拶をし、歌手達はトロバリオン「キリストは復活された。」を歌い始める。」³⁴⁴⁾

そこで皇帝は出発してメセーを通り聖使徒教会へと行く。

「ナルテックスに入ると椅子に座って総主教を待つ。そして総主教が行進と共に到着すると、部下の聖職者達と市民達は皇帝の門の右側にある門を通して教会に入り、一方の孤児達は中央の門から入る。府主教達と主教達は皇帝の門から入り、皇帝に御辞儀をするが、ひれ伏したりはしない。総主教が近づいてくると皇帝は立ち上がり、両者は互いに挨拶を交わし接吻をする。そして皇帝の門まで進むと、総主教は神の典礼の入場の祈りを始め、一方皇帝は蠟燭に火を点けて祈り、それをプライポシトスに戻す。そして彼はそれを儀式長官に(渡す)。総主教が祈りを終えると、皇帝は汚れなき福音書と価値ある十字架に跪く。身廊とアンボの脇を通りソレアに入る。総主教は至聖所に入るが、皇帝は、彼にとっていつもどおりに、神聖な扉の前で折り、至聖所に入る。そして聖なる机に跪くと、プライポシトスから献納品を取って、これを祭壇の上に置く。

我等が教父クリュソストモスと神学者聖グレゴリオスの墓に祈り、蠟燭を灯すと、皇帝と総主教、両者共に至聖所の左横を通して出て、聖コンスタンティノスの棺(=墓所)へと行く。そこで折り蠟燭を灯してから出て、(皇帝と総主教は)最も神聖な総主教ニケフォロスとメトディオスの墓所へ行き、そこで皇帝は蠟燭に火を灯し祈り、諸帝の墓所へ行き、そこで蠟燭を灯して退出する。皇帝と総主教の二人は教会の左の部分、即ち側廊を通して、至聖所の向かいで、皇帝と総主教、両者互いに跪き、神聖な典礼をおこなうために戻る。皇帝は側廊を通りナルテックスに出る。そしてアトリウムの左の部分に向かって向きを変える。パトリキオス達は螺旋階段の門の外に立ち、皇帝に歓声をあげる。クーブクリオンの高官達スバタロカンディダートス達、オイケイアコスの方達、マンガラピトンの方達、その他に先導された皇帝は、この左の階段を通して高貴なギャラリーに上る。ギャラリーに吊られている布をシレンティアリオス達が開け、(皇帝は)そこを入ると右側の部分に立ち、習慣に従って行列に加わった者達は位置を決め、神の典礼に参加する。パトリキオス達とストラテゴス達は皇帝の後ろに螺旋階段を通して上り、至聖所の向かいに帝室の移動式祭壇を設置する。ここで皇帝は行進の際に領聖を受ける。

神との結合の機会がくると、命令を受けたシレンティアリオス二人が、総主教を呼びに行く。二人の助けをかりて総主教は、上に向かう。そして螺旋階段の上の方で高貴なギャラリーに入ろうとする瞬間に、

クーブクリオンの高官達は彼(総主教)に出会う。そしてギャラリーに入った総主教は帝室の祭壇に贈り物をおき、プライポシトスはクーブクリオンの高官達を従えて入り、皇帝を呼ぶ。彼等に先導された皇帝は進み出て、総主教の手から領聖を受け、右の布(カーテン)の向こう側に入り、総主教の手からパトリキオス達、ストラテゴス達、仕来りに基づく他の者達が領聖を受けるまで、そこにある椅子に座っている。その後、皇帝は出て、皇帝と総主教は二人とも互いに挨拶を交わし、皇帝は前述の自分が神の典礼に加わっていた場所に行き、総主教は神の典礼を終えるために下に行く。クーブクリオンの高官達は彼と会った場所まで彼を送り、それからシレンティアリオス二人は彼を身廊まで送る。神の典礼が終わると、皇帝はギャラリーの前を通して、中(内側の通路?)を通して神に守られた宮殿に行く。言い換えればそこで自分の私室に入る。また二人のシレンティアリオスが命令を受けて総主教を呼びに下りていき、
・(中略)・
そして皇帝は、自分の紫のサギオンを纏ったクーブクリオンの高官達に先導されて出ると、ナルテックスのギャラリーを通して、クービクーラリオス達の持ち上げる布をくぐり、左側の先程上った螺旋階段を通る。マジストロス達、パトリキオス達がこの階段の外、アトリウムで彼を歓迎し、彼等は皇帝が上っていったときのまま残っていて皇帝に歓声をあげる。皇帝は出ると門で馬に乗り、仕来りに従って各人は行進の用意をする。」³⁴⁵⁾

このあと皇帝はデーモス達の歓呼を受けながら宮殿に戻る。この様子は第5章にも記されている³⁴⁶⁾。

ここで『テュピコン』の記述と『儀式について』のそれとを比較してみると、一つの相違点に気付く。それは『テュピコン』の復活祭の月曜日に関する部分のなかで、唯一、儀式の細部を語っている部分、行進前の総主教の至聖所への入場である。『テュピコン』ではこれは脇の扉からおこなわれる。なおこの史料では、他の項と同様、皇帝の参加は言及されていない。だが『儀式について』では総主教と皇帝が神聖な扉、つまり正面中央の扉から至聖所に入るになっている。

ここで『儀式について』の他の記述をみても、行進前に大教会の至聖所に皇帝が入るのは、聖母生誕祭³⁴⁷⁾と受胎告知³⁴⁸⁾である。この三つの記録すべてで皇帝は神聖な扉から入ると記されている。聖母生誕祭と受胎告知の場合、総主教については明記されていないが、おそらく皇帝と同行するものと思われる。

この食い違いを解く鍵は、おそらく、以下の事実にあるだろう。レオン6世のときにこの日の儀式は若干変更された。皇帝はハギア・ソフィアに寄らず、直接宮殿から馬で聖使徒教会に向かうようになった。この場合、フォロスでの儀式に参加するか否かは不明である³⁴⁹⁾。

ここで総主教は行進前に至聖所に入るときに、通常の場合は脇の扉を使うが、皇帝がいる場合は神聖な扉を使う、と図式的に理解していいのかが不明である。

復活祭の火曜日

この日の儀式について『儀式について』は第11章³⁵⁰⁾で以下のように記録している。

宮殿内で準備をし、ヒッポドロモスへ出る。ここで民衆の歓呼がおこなわれる。

「そして皇帝は皆に先導されて古い部屋（アセークレーテイオン）を通り、聖セルギオスの教会（ハギオス・セルギオス・カイ・バッコス）に入る。皇帝がギャラリーに入った時点で、パトリキオス達とストラテegos達は門の外に留まる。この教会の高位修道僧（ヘーグーメノス）がそこで門をくぐった皇帝を出迎え、香炉を手に皇帝の前で香を炊く。皇帝はギャラリーに入ると、蠟燭に火をつけ祭壇（至聖所）の向い側、皇帝の門（教会身廊の中央の入口）の上で祈る。ギャラリーにある最高に神聖な聖母の礼拝所で礼拝する。そこで蠟燭に火を灯し、折り、外に出る。そして至聖所のパラキンプティコンの中に立つ。その場所に彼は通常は毎回いて、そして神の儀式に参加し、その場所で蠟燭に火をつける。神との一致（領聖）の機会が訪れると、司祭が他の司祭と共に、価値ある贈り物を捧げ持って上がり、価値ある贈り物と共に司祭は入り、皇帝は礼拝所で領聖を受けて外に出、メータトーリオンに入る。クーブークリオン全員も領聖を受け、司祭は携帯用の祭壇を至聖所の向い中央の入口の上に置き、その上に価値ある贈り物を用意し、パトリキオス達、ストラテegos達、そしてシュクレートスは儀式長官の呼び出しで領聖を受け、その後、司祭は神の典礼を終わらせるために下りていく。そして神の儀式が終わると皇帝はギャラリーを通りトリクリノスへ下り、招待の命令を受けた友人達と、その立派な食卓につく。そこで食事をし立ち上がると、ジザキオンを纏い、クーブークリオン、マグラピトン、他の家臣達の高位の者達に先導されてギャラリーを通過して行く。高位の修道僧（ヘーグーメノス）が皇帝の前で、ギャラリーの出てきた門まで香を炊く。皇帝が同じ門を通る時に、パトリキオス達とストラテegos達がその門の中で彼を出迎える。そこは皇帝が入る時に留まった所である。皇帝は、前述のように同じ仕来りにしたがって、彼らに先導され、古い部屋やヒッポドロモスを通り……」³⁵¹⁾

大宮殿に戻る。そしてクリュソトリクリノスで宴会があること、また総主教はブラケルナイに行っているため、聖セルギオスでの儀式には参加しないことが語られる。

さてこの火曜日の出来事として、『クレートロロギオン』にはクリュソトリクリノスでの宴会の様子が書かれており、教会での儀式には言及がない³⁵²⁾。また『テュピコン』からは、聖母の記念祭がブラケルナイであり、総主教は大教会での朝の勤めののち、行進をともなってブラケルナイに行き、そこで聖体礼儀をおこなうことになっている³⁵³⁾。

復活祭の木曜日

『儀式について』第1巻第14章³⁵⁴⁾ではこの日、皇帝がクリュソトリクリノスで総主教以下の聖職

者を迎え接吻をかわす儀式をおこなったのち、ファロスの聖母教会で聖体礼儀をおこない、それからクリュソトリクリノスに戻って聖職者達と会食をすることが記されている。

また『クレートロロギオン』には、この日、聖職者達を皇帝はクリュソトリクリノスでの宴席に招待し、総主教、府主教10名、宮殿内の教会の司祭6名、帝室の修道院の高位の修道僧12名と黄金の食卓につくことが語られている³⁵⁵⁾。

なお『テュピコン』には、この大宮殿内での儀式の記述はない。しかし大宮殿の使徒聖ヨアネスの教会で記念祭が行われることになっている。マテオスはこの教会をトリコンクの近くの教会と考えている。ちなみに総主教は同じ聖人の記念祭を、ハギア・ソフィアでおこなう³⁵⁶⁾。

復活祭の次の日曜日（アンティバスカ）

本論分で取り上げた宗教儀式に関する記録のうち、最も混乱しており解釈が困難なものは、この復活祭の次の日曜日に関するものである。

まず『儀式について』第1巻第6章には以下の記述をみることができる。

「皇帝達が夕方、聖使徒（教会）から宮殿に戻る際に、この祭の時も、その秩序や次第は復活祭の月曜日にやることに従い、歓迎は前述の場所でおこない、歓声は既に述べたようにあげ……」³⁵⁷⁾

つまりこのアンティバスカの日曜日に皇帝は、復活祭の月曜日と同様に聖使徒教会を訪れたことが読み取れる。

また万聖人の祭日に関して述べた第2巻第7章にも、聖使徒教会へ行く際は復活祭の月曜日と復活祭の次の日曜日に従う³⁵⁸⁾、との記述があり、先の記述と一致する。

さらに『クレートロロギオン』には、以下の記述がある。

「復活祭の終わった後の次の日曜日、畏敬の念をおこさせる聖使徒の教会への行進を盛大におこなう。聖なる儀式がおこなわれた後に、月曜日に従い、決まったトリクリノスで宴会をおこなう……」³⁵⁹⁾

以上のことからこの日の儀式は聖使徒教会でおこなわれるようにみえる。しかし『儀式について』第1巻第16章³⁶⁰⁾は

「復活祭後の主の日、皇帝がハギア・ソフィアに行くときに見られるべきこと」

との題目で、大宮殿で準備したのちハギア・ソフィアに礼拝に行き、また戻ることが書いてある。以下の部分はそのうちハギア・ソフィアに関する部分である。

「……そしてスコレーを通過して進む。デーモス達はそこに立っていて、ただ十字の印を切る。ノタリオス達は詩を唱える。そして廊下を通過して、皇帝達とクーブークリオンの者達、シレンティアリオス達だけがギャラリーに入って、聖体礼儀をおこない、総主教と会食する。帰りは皇帝達はディベーターション

とジガキオンを持って、紫のサギオンを持ったパトリキオス達とシレンティアリオス達とに護衛されて、主の教会（のそばの門）から（宮殿に）入る。」

しかし最後に註がついており、

「註：復活祭の次の日曜日に皇帝は、馬に乗って儀式として聖使徒に行く。これは最近おこなわれるようになった。」

となっている。

以上の記述から考えるに、この日の儀式の舞台は、『クレートロロギオン』が書かれた899年以前に、ハギア・ソフィアから聖使徒教会に移ったのであろう。

しかしながら『テュピコン』はこの日、儀式は大教会、すなわちハギア・ソフィアでおこなわれる、と述べている³⁶¹⁾。

史料の成立年代としては『テュピコン』が一番新しい。再びこの日の儀式の舞台は、10世紀後半にハギア・ソフィアに戻ったのであろうか。少なくともポールドヴィンはそう考えているようである³⁶²⁾。

さてでは仮に、この儀式の舞台がもともとハギア・ソフィアで、9世紀後半に聖使徒教会に移り、10世紀中頃に降にハギア・ソフィアに戻ったとして、次に問題になるのは移動の方法である。『クレートロロギオン』や『儀式について』の復活祭の月曜日に関する部分では、この日皇帝は行進をとまってフォロスでの儀式を含め、壮麗に聖使徒教会に進むことがわかる。しかしすでに述べたように、この月曜日の行進は後の時代にはおこなわれなくなり、単なる馬での移動に取って代わられた。一方、『儀式について』の第2巻第7章の万聖人の祭日に関する部分の記述では、この祭日と復活祭の月曜日と復活祭の次の日曜日が、とくに行進の方法について同じであることが記述されていて、それ以外には皇帝が馬で到着することのみ記されている。

おそらくこのことから考えて、この日の聖使徒教会へ向かう移動方法も、先の復活祭の月曜日と同様に、行進とフォロスでの儀式を伴う壮麗なものがまず執り行われ、後の時代、復活祭の月曜日と前後して、これが単純な馬での移動に変化したとみるのことができる。

五旬節中日（メソペンテーコステー）

のちに聖霊降臨祭のところで触れるが、復活祭から聖霊降臨祭までの50日間は、特に重要視されている期間である。この50日間は五旬節と呼ぶ。五旬節の中日、つまり復活祭から25日目は水曜日となり、特別な祭日としてあつかわれていた。

この日に関して『クレートロロギオン』には、皇帝が聖モーキオスの教会で聖なる儀式に参加し、その後そのトリクリノスで宴会を開くことが、書いてある³⁶³⁾。

『儀式について』はこの儀式を主題として、第1巻第17章をまとめている³⁶⁴⁾。

「（前略：皇帝は大宮殿から陸路聖モーキオス修道院へ）・・・そこから（一行は）殉教者聖モーキオスの高貴な教会に入る。皇帝はアトリウムに入ると、ナルテックスに上る階段のところまで通り過ぎ、そこで（手足を）洗うと、ナルテックスを通る。螺旋階段へと続く門の脇にシュンクレートスと共にパトリキオス達とストラテゴス達を立て、各自各々上述のように、皇帝に歓声をあげる。皇帝は高官達とクーブクリオン達、家臣のバシリキオス達、儀式長官、シレンティアリオス達に先導されて螺旋階段を上り、少し左に曲がるとナルテックスのギャラリーを通過して、自分の私室に入る。・・・（中略）・・・皇帝が自分の私室から出て皇帝の門の上のギャラリーに入ると、ベステートル達が入室して皇帝のクラニウスを脱がす。そこでクーブクリオス達はギャラリーに布を吊る。皇帝はこの布を通過して、高官達やクーブクリオン達に先導されて退出する。そこで布の外でパトリキオス達とストラテゴス達が地にひれ伏して挨拶し出迎える。命令を受けたプライボシトスは儀式長官に合図を送り、この者は「ご命令を」と言う。人々は「多くの善き時を」と歓呼する。皇帝は、全員、彼等は自分達の金のタブリオンのついたクラニディオンを運ぶのだが、に先導されて螺旋階段を降りる。そこで、言い換えれば階段の終わったところで、もう一度、皇帝をパトリキオス達、ストラテゴス達がシュンクレートスの全員と共にひれ伏して歓迎し、命令を受けたプライボシトスはシレンティアリオスに合図をし、この者は「ご命令を」と言う。同じように人々は歓呼する「多くの善き時を」。

皇帝はここにいる人々に先導されて、ナルテックスを通ると、大教会の皇帝の門に向かい合った門から出て、階段を降り、左に曲がると門を出る。習慣通りに行列の各人は通り抜けて、メセーで行進と合う。そして蠟燭を灯し祈り価値ある命ある十字架と汚れなき福音書に跪き、その後、皇帝と総主教とは互いに挨拶を交わす。（皇帝は）行進の前を通過して仕来り通りの人々に先導されてアトリウムを通り、ナルテックスへと続く階段を上り、このナルテックスに入り、階段から続く中央の門から左側にある金の椅子に座り、行進を従えた総主教の到着を待つ。そしてそれがおこって、価値ある十字架が左の（誉れある）階段の門から入るときには、皇帝は立ち上がり、総主教は段を上り、皇帝は総主教と共に進み、両者共に皇帝の門の敷居のところ立つ。皇帝は蠟燭を灯し、祈り、総主教は神の典礼の入場の祈りを捧げる。そして祈り終えた皇帝は蠟燭をプライボシトスに返す。この祈りが終わると、汚れなき福音書と価値ある十字架に跪く。皇帝は総主教の手を取ると、真ん中を通り、身廊とアンボの右横を経て、ソレアに入って、神聖な扉まで進む。総主教は至聖所に入り、一方の皇帝は祈り、プライボシトスに蠟燭を戻してから入る。至聖所に入る瞬間に、いつもどおり府主教が皇帝の前の神聖な扉を開け、皇帝はその上に固定されている十字架に跪き、至聖所に入り、祈り、祭壇を綺麗にして、仕来り通り献納品をそこに置くと、総主教と共に至聖所の横を通り、右側から、ペーマの神聖な扉まで通る。総主教は至聖所で神の典礼をおこなうために

残り、皇帝は至聖所を出て女性達の場所の横を通る。パトリキオス達はストラテゴス達、儀式長官、シレンティアリオス達、シュクレートスと共に、螺旋階段へと続く門の外に立ち、皇帝に歓呼する。

皇帝はクーブークリオンの高官達と家臣のバシリコス達に先導されて、秘密の螺旋階段をあがりバラキュブティコンに入り、そこで神の典礼に参加する。もしも皇帝が命じるのであれば、そこで総主教を待ち、もしそうでなければ、ギャラリーを通して、先術の者たちに先導されて自分の私室に入る。会食の時間が来ると皇帝は自分の私室から出て、彼等の先導でギャラリーへ行く。そこには（そなえつけの）価値ある食卓がある。そして招待を受けた総主教が到着し、・・・（中略：会食の様）・・・皇帝はクーブークリオン達に先導されて、先術の西の階段を降りる。彼等全員は紫のサギオンをつけている。かれらをナルテックスの先ほどの階段の門の外でクーブークリオンの高官達が出迎える。そして皇帝からの合図を受けたブライボシトスは、儀式長官に合図を送り、この者は「ご命令を」と言う。

彼等に先導されて皇帝は、階段へと向かうナルテックスの中央の門を出て、そこで馬に乗り・・・（後略：陸路宮殿へ戻る）」³⁶⁵⁾

ところで同じ『儀式について』の第1巻第7章はこの日の帰路のデーモス達の歓呼の台詞を二つ記録しているが³⁶⁶⁾、歓呼する場所については何も触れておらず、復活祭の月曜日に準じると書かれている。

またさらに『テュピコン』のこの日の項は、大教会で儀式がおこなわれることを記している³⁶⁷⁾。

この史料の不一致は、903年5月11日にこの儀式がおこなわれた際にレオン6世が教会内で襲撃され負傷したために、それ以降おこなわれなくなったためであると、多くの研究者は考えている³⁶⁸⁾。何らかの原因で、ふるい記録が編集の際に削除されなかったのだろうか。

すると次に問題になるのが、『儀式について』の第7章の記述である。第17章の最後の部分には、やはり復活祭の月曜日の歓呼に準じる旨書かれており、ここでは誰が何処で歓呼するかのみが書かれていて、台詞のみを記録している第7章と組み合わせて、初めて意味をなす。このことから考えて、明らかに第7章と第17章は対になっている。しかし第7章の成立は、すでに見たように、『儀式について』全体の中で一番新しく、950年以降である。これはおそらく編集時の不手際で不必要な古い記録が紛れ込んだと考えるよりも、編集者はこの記録、すでにおこなわれなくなった聖モーキオス修道院での儀式の次書を、何らかの理由でまだ必要なものと考えたのではないだろうか。当時この儀式が将来、旧来の形でおこなわれる可能性が、まだ残されていたと考えるのは飛躍し過ぎだろうか。

昇天祭

昇天祭はキリストが天に昇ったことを記念する祭で、復活祭の40日後の木曜日におこなわれる。元来、聖霊降臨祭と共に祭られてきたが、4世紀末にアンティオキア周辺で独立した儀式として確立し、帝都で

は12大祭のうちの一つの数えられていた³⁶⁹⁾。

『クレートロロギオン』にはこの日、皇帝はペーゲーの聖母の教会に行進し、神聖な儀式に参加、そのあと総主教と宴会を催す、との記述を見ることができるが、この宴会の場所は記されていない³⁷⁰⁾。

これと同じ内容の、しかし週に詳細な記録を『儀式について』の第1巻第18章³⁷¹⁾に見ることができる。

「（前略：皇帝の一行は船で黄金門まで進み、そこから馬で教会を目指す）そして彼は衆の非常に神聖なる神の母（の教会）まで行く。皇帝が外側の門を通り抜ける前に、パトリキオス達や元老院の皆が馬から下りる。彼等に導かれながら、皇帝は馬に乗ったままアトリウムに進み、そこで馬を下りる。彼はアトリウム右側の扉から入り、そしてそこでパトリキオス達は階段の入り口の前で止まる。部屋付の高官達を引き連れて、皇帝は前述の階段を上り、狭いトリクリノスを通るが、この場所で、その日のために食事が行われる。そして小さなメータトーリオンを通り私室に入る。

ブライボシトスが王冠を取り除くと、彼はそこに待機し、時間を注意しつつ白のディーペーションを着用する。時間が来ると、儀式長官から前もって知らされていたブライボシトスは、入室して皇帝に知らせる。彼の命令にしたがって、儀式長官からシレンティアオン（標識）が渡される。パトリキオス達は前述の階段を上り、そして既に説明した狭いトリクリノスに入る。皇帝は慣習通りにクラミュスを纏い、自分の私室を出て、部屋付の高官の先導で、上記の狭いトリクリノスの入り口まで進む。そこで黄金のタブリオン（帯状の布）のついたクラミュスを持ったストラテゴス達とパトリキオス達が皇帝を出迎えて地面に伏すと、命令を受けたブライボシトスが儀式長官に合図をし、彼は言う。「御命令を。」そして彼等は唱和する。「善き長き時を。」その後、部屋付の高官と元老院に先導されて、彼は先程使った階段を下りる。パトリキオス達とストラテゴス達が元老院とともに階段の下で、新たに彼を出迎える。

皇帝がブライボシトスに合図を送ると、彼はシレンティアリオスに合図を送り、彼は「御命令を」と言う。彼等は唱和する。「善き長き時を。」皇帝は彼等の先導でアトリウムの門を越える。・・・（中略）・・・皇帝は緑党の歓迎から多少離れ、前述の人々に導かれて（総主教の）行列を迎える。そして蠟燭に火を灯し、荘厳な十字架の前で祈りを捧げ、聖なる福音書と荘厳な十字架を礼拝する。その後、二人（皇帝と総主教）は互いに深々と挨拶を交わし、接吻する。皇帝はそのまま戻り、部屋付の高官、パトリキオス、ストラテゴス、元老院に先導されてアトリウム中央の扉から入って、ナルテックスに入り、玉座に着席して総主教と共に行列が着くのを待つ。

行列が着くと皇帝は立ち上がる。二人は深々と挨拶をし接吻を交わした後、前へ進み皇帝の門の敷居の上に立つ。皇帝はブライボシトスの手から蠟燭を取ると、そこで祈る。その間、総主教は聖なる儀式の第一の入場を朗唱する。祈りの後で皇帝は蠟燭をブライボシトスに返し、彼は儀式長官に戻す。総主教が第

一の(朗唱)を終えると、皇帝は聖なる福音書と荘厳な十字架を礼拝し、総主教の手を取り、既に述べた人々全てに先導されて、二人は身廊の中を進みアンボの右側を通して、二人とも、皇帝も総主教もソレアに入る。その間、部屋付の高官達や他の者はソレアの外に止まり、その両側に立つ。神聖な門に着くと、総主教は至聖所に入り、皇帝は神聖な門の前に留まり、蠟燭に火をつけると祈り、それをプライボシトスに渡す。その後、神聖な門に深く礼をすると、至聖所に入り、聖なる祭壇に深く御時宜をし、献納品を奉獻する。至聖所を出ると、昔からの仕来りに従う人々に先導されて身廊の右側を通して、先述の階段を抜けてギャラリーへ上り、通例通りの場所から聖なる儀式に参加する。

領聖の時にはプライボシトスが、命令にしたがって、シレンティアリオス達を派遣する。彼等は総主教を呼ぶ。総主教は前述の階段を上り、ギャラリーを抜けて慣例通りの場所に来る。そこには携帯式の祭壇がある。皇帝は総主教の手から領聖を受ける。その後、総主教は離れ、携帯式の祭壇の方へ立つ。それは皇帝がこの日正餐を取る(場所)門の前である。そこで仕来り通りに高官達が領聖を受ける。その後、総主教は神聖な儀式を終えるために下へ行く。皇帝は、自分が食事をするトリクリノスを通して、自分の私室に入る。神聖な儀式が終了すると、プライボシトスはシレンティアリオス達を送り、彼等は命令に従って総主教を招待する。総主教はシレンティアリオス達の助けを借りて、既に説明した階段を上りギャラリーへ入り、そしてそこで(総主教は)ちょっと留まり、その間にプライボシトスは皇帝に報告する。皇帝の合図を受けると、彼は部屋付の高官と退出して総主教を呼び、総主教は食事の準備が進みつつあるトリクリノスで皇帝と再び会う。・・・(後略:このち会食の様子が説明される)³⁷²⁾

また『儀式について』第1巻第8章にはこのあとペーゲーから皇帝が陸路を通して戻る際に、都市のどの地点で誰がどのような歓呼をおこなうのかが記されている³⁷³⁾。

しかし『テュピコン』にはこの日は以下のように記されている。

「木曜日、あるいは偉大な神にして救世主、我等がイエソス・クリストスの昇天の祭。この祭の儀式を神聖な教会の型に従って、最も神聖な大教会(ハギア・ソフィア)でおこない、(前日の)夕方から徹夜の勤めをおこなう。」³⁷⁴⁾

こののち、総主教参加の晩禱、徹夜の勤め、当日の儀式が順に説明される³⁷⁵⁾。

三つの史料に見られるこの食い違いは、どう解釈するべきなのか。三つの可能性が考えられるのではない。一つ目として『儀式について』と『テュピコン』の間の期間にこの儀式の舞台が移されたということ。二つ目としては、『テュピコン』には晩禱に総主教が参加するとはあるが、当日の儀式に関しては総主教の参加に関して言及はないので、大教会でも儀式をおこなうが総主教はペーゲーに出張するというもの。三番目は『テュピコン』の記述が間違っているというもの。ポールドヴィンも同じ三つの可能性を指摘しており、三番目を好んでいるようである³⁷⁶⁾。しかし、他の祭日に関して明確な理由なしに三つの

史料で内容が食い違う例は少なく、また祭の重要性から考えても明らかな記載事項の間違えというのは説得力が乏しい。また同じ理由から、総主教の出張説も『儀式について』の記述から考えて総主教は行進をともなって来るのであるから、総主教はペーゲーに行くという記述、あるいはペーゲーでも大規模な儀式がおこなわれるという記述が、なぜ残らなかったのか、割り切れないものがある。なおジャンナはケドレノスの年代記から、966年にニケフォロス2世がペーゲーで昇天祭を祝った、という記述を引用している³⁷⁷⁾。参考までに付け加えておく。

聖霊降臨祭

この祭は、キリストの昇天後のある嵐の日に使徒達に聖霊が降りてきて彼等を満たした、という『使徒言行録』の事件と関連があるが、理念的にはこれに代表される救済の神秘を祝うものである。ギリシャ語ではペンテコステというがこれは「50番目」という意味で、復活祭から50日目を意味する。またペンテコステという言葉自体は、復活祭から聖霊降臨祭までの50日間をさす場合と、聖霊降臨祭の祭日のみをさす場合とがある。この50日間は特別な意味を持っており、毎日、聖体礼儀がおこなわれ、洗礼式も集中的に開かれた。なおこの祭日は5世紀には確立し、広く執り行われるようになったようである³⁷⁸⁾。

さて『儀式について』では、残念ながらこの日の皇帝の教会での行動について、独立した記述はない。第1巻第1章に聖霊降臨祭は生誕祭や復活祭と同様におこなう旨記されている³⁷⁹⁾。また同第9章前半部分には、この日デーモス達が何時何処で誰が何を皇帝に歓呼するのかが記録されている³⁸⁰⁾。

また『クレートロロギオン』には、この日、大教会で復活祭と同様な儀式をおこない、そののちユスティニアノスのトリクリノスで宴会を開く、と書いてある³⁸¹⁾。

なお『テュピコン』には以下のことが記されている³⁸²⁾。

前の晩に大教会で総主教参加の晩禱、徹夜の夜の勤め。アンボにて朝の勤め。そののち総主教は洗礼堂にて洗礼式。洗礼の塗油のあとで、身廊に中央の扉から入場。領聖を伴った儀式。その後、午後の勤め。

『テュピコン』の記述を見ると、この史料の他の部分と同様、記述の中心は聖歌や朗読の内容で当事者の詳細な行動は解説されないのだが、洗礼式が入場の前に入る他は通常の順に聖歌、朗読などが進むことがわかる。復活祭や生誕祭とは、規模においてはるかに小さい祭ではあるが、大枠が同じである以上、この日の皇帝の教会での行動は第1巻第1章とほぼ同じで大きな変更点はないとみてよいだろう。

万聖人

万聖人は聖霊降臨祭の次の日曜日である³⁸³⁾。この日の儀式について『テュピコン』は以下のことを

記している³⁸⁴⁾。

前の土曜日に大教会で総主教参加の晩禱、徹夜の夜の勤め。明るる日曜日はすべての殉教者のための記念日で、

「最も神聖な大教会で、(前日の)夕方から徹夜の勤めをし、また大きな聖使徒(教会)のそばの彼等の名前の館で、彼等のための儀式をおこなう。行進は大教会からそこへ出発し、そこで大教会におけるのと同様に神の神秘の儀式をおこなう。」³⁸⁵⁾

以下、聖体礼儀の内容が説明される。

一方、『儀式について』第2巻第7章³⁸⁶⁾にこの祭日のことが書かれている。それによるとこの日は、復活祭の月曜日や復活祭の次の日曜日の儀式に準じることになっている。以下この章を引用する。

「皇帝達は聖使徒のホーロギオンへと通じる同じ教会の門で馬を下り、それからクーブクリオン達に先導されて、指揮官の習慣によって右に曲がり、そして聖使徒³⁸⁷⁾のナルテックスを通り、同じ教会のギャラリーに上り、そこに釣り下げられた布を入れる。・・・(中略)・・・総主教は行列と共に到着すると、聖使徒の中で至聖所の柵の外で立ち、機会が訪れると、総主教は中に入る。皇帝達は自分のクラミュスを纏う。皇帝達が布から出ると、マギストロス達、パトリキオス達が彼等を歓迎し、そこで歓声をあげ、プライボシトスの合図で儀式長官が「御命令を」と言う。そして螺旋階段を下りナルテックスを通して、聖使徒のナルテックスを出ると、・・・(中略)・・・皇帝達は聖使徒のホーロギオンのところの扉から入る。・・・(中略)・・・皇帝達は再び、聖使徒の側廊(=左側廊)の扉から入り、・・・(中略)・・・皇帝達が進むと、総主教が神聖なペーマの柵の外で彼等を歓迎し、両者は接吻する。そして共に至聖所に入る。皇帝は布(祭壇の覆い)と、総主教が掲げ持ってきた神聖な福音書に接吻し、ここで行進をおこない、聖職者達は「あなたの栄光、キリストよ、神・・・」を歌う。(聖使徒教会の)ペーマから出た皇帝達はプライボシトスから儀式用の蠟燭を受け取り、総主教と共に時を同じくして行進を万聖人(の礼拝堂)に向かっておこなう。そして続く開帳の儀式を、言い換えれば更新の儀式を終えると、(万聖人の教会の)ペーマへ入場し、入り、仕来りに従い、そしてそこから、(皇帝達は)東に向かって右側の部分を抜けて、同じ教会の殉教者聖レオンの礼拝所へと行き、そこで蠟燭を手に三回礼拝をして神への感謝を示し、そしてすぐに総主教に挨拶をし、彼に接吻する。そして総主教は万聖人(の礼拝堂)に入る。皇帝達はアプスのある至聖所を通して、皇后聖テオファノの礼拝所へ入る。そこでクラニディオンを脱いで座り、聖なる福音書の朗読を待つ。神聖な福音書が朗読されるときには、この礼拝所から出て、ペーマに向かって吊ってある布の中に立って、神聖な福音書を傾聴する。そして聖なる福音書が終わったら、再び聖テオファノの同じ礼拝所に入り、座って招待者の表を用意する。そして黄金で縁取られたサギオンを身に纏うと、(皇帝は)聖ヒュバティオスの礼拝所のナルテックスを通り、そしてその外へ続く中庭も通り、さら

にそしてそこから木の階段を通るが、これは聖コンスタンティノスから、聖使徒のギャラリーへと昇るもので、そこから聖使徒のギャラリーを通過して宮殿に入る。」³⁸⁸⁾

以上の引用で明かなように、この日の儀式の中心は、言及されている他の二回の儀式とは異なり、聖使徒教会ではなくて、万聖人の礼拝堂である。この点で『テュピコン』と『儀式について』の内容は一致する。なお、聖使徒教会と万聖人の礼拝堂の位置関係については次章で考察する。

ちなみに『クレートロギオン』には、この日に関する記述はない。

1-3 まとめ

さてこれまでみてきた様々な儀式を、ここでは整理してみていくことにする。

まず前章で述べた、各史料の成立年代と、言及されている祭日の関係をまとめると[表7]のようになる。この表においては、聖人の記念祭は『儀式について』における取り扱いが詳細さを欠くこともあり、濃い網をかけてある。また大宮殿内で完結するものには薄い網をかけてある。換言すれば、網のかかっていない祭日は比較的、公的性格が強く、また祭典としても重要度の高いものということになる。

この表からいくつかのことがわかる。

まずこの三つの史料が成立した百数十年の間に、次第の変化が認められる儀式がある。

その一つは行なわれなくなったもの、あるいは縮小されたものである。これらの名を掲げると以下のとおりである。

復活祭の月曜日：聖使徒教会

復活祭の次の日曜日：聖使徒教会

五旬節中日の水曜日：聖モーキオス教会

昇天祭：ペーゲーの聖母教会

表にみるように、もしも『テュピコン』の記述が正しいのであれば、復活祭の月曜日以外の残りの三つは10世紀後半にはこの教会では執り行われなくなり、代わりにハギア・ソフィアで通常の儀礼がおこなわれたことになる。

また復活祭の月曜日は『儀式について』の記述では、皇帝も総主教と同様に行進を伴ってフォロス経由で聖使徒教会に向かうことになっている。しかしすでに述べたように、この行進はレオン6世の時代に執り行われなくなり、皇帝は単に馬で聖使徒教会に移動するだけとなった。同様に、前節ですでに見たように、復活祭の次の日曜日の行進も、儀式の舞台が変更される以前に、途中で廃止された可能性が高い。これらはいずれも帝都の中心部から離れた地域にたつ教会での儀式である。

また逆に新しく加わったことが明らかなものもある。それを以下に列挙する。

聖デメトリオスの記念祭（10月26日）

大天使ミカエルの記念祭（11月8日）

聖大バシレイオスの記念祭（1月1日）

ネア献堂記念祭（5月1日）

聖コンスタンティノスの記念祭（5月21日）

教会和解の記念日（7月6日、12日）

預言者エリアスの記念祭（7月20日）

洗礼者聖ヨアンネスの記念祭（8月29日）

万聖人の祭日

聖デメトリオスの記念祭は後に触れるが、舞台となる教会がレオン6世の造営によるもので10世紀初頭の追加と考えられる。大天使ミカエル、ネア献堂記念、預言者エリアスのいずれの日においてもネアが重要な役割をはたしているが、この建物もバシレイオス1世によって献堂されたものであるから、これらの儀式は9世紀末の追加である。聖大バシレイオスの日には聖ペトロスを使用するが、この教会の造営もバシレイオス1世の業績に数えられている。それゆえこの祭日も同じ時期に属するものと見てよいだろう。以上、五つの祭日は新たに追加されたことが明らかであるが、いずれも宮殿内で完結した次第をもっている。

一方、聖コンスタンティノスの記念祭の舞台になるポーンヌス宮のこの聖人の教会はロマノス1世によって、また万聖人の祭日の舞台となる聖使徒教会の脇に建つ万聖人の教会はレオン6世によって、それぞれ建設された。さらに教会和解の記念日はレオン6世が総主教との確執から和解したことを記念するものである。これらの三つの次第は10世紀前半に属するものと思われる。

また前節で触れたように8月29日の先駆者聖ヨアンネスの記念祭は10世紀に入ってから、先駆者の頭部の獲得に伴う政治的な動きの中で追加された可能性が高い。

また表からは読み取れないが、正統信仰の日は『儀式について』の記述から、途中で次第の細部に変更があったことがわかる珍しい例である。最も大きな相違点は、皇帝が小聖入の際に至聖所に入らなかったものが入るようになったことと、側廊のメータトリーオンから儀式に参加したのがギャラリーのメータトリーオンに変わったことの二点である。

これらに対して大きな変化がないことが確認できたものは、以下のとおりである。

生誕祭

神現祭

聖大土曜日

復活祭

これらはいずれも正教会の年中行事の中核をなす重要な祭典であり、すべての宗教儀礼の中で最も古い歴史と長い伝統をもっている。

さてこれらの儀式は、いくつかのグループに類型化して分けることができる。本章で取り上げた祭日のうち、市内を行進して教会に向かうものをまとめると〔表8〕になる。これは基本的には『テュピコン』の記述をもとにした経路である。このうち『儀式について』で皇帝の参加が明記されているものは以下のとおりである。

まず一つ目は皇帝が大教会で礼拝をした後、行進してフォロスに行きそこでも儀式を行ない、さらに行進と共に進んで他の教会へ行ってそこでミサに参加するものである。この型を持つものは以下の四つである。

聖母生誕祭：大教会→フォロス→カルコプラティアの聖母教会

受胎告知：大教会→フォロス→カルコプラティアの聖母教会

復活祭の月曜日：大教会→フォロス→聖使徒教会

復活祭後の日曜日：大教会→フォロス→聖使徒教会

このとき皇帝は、神聖な井戸の堂を通過してペーマの右側の部分に向いて開いている門から大教会に入り、神聖な扉を経て至聖所にいき、祈る。至聖所を出るとソレアを出るあたりで聖歌が始まり、あるいはアンボの後ろのあたりで再び祈り、ナルテックスを経て退出する。その後、ナルテックスからアトリウム、アテュルを抜けてメセーへ進む。そしてフォロスに入ると、ここで総主教の行進が到着するのを待ち、これを歓迎して共に儀式に参加する。その後、再び皇帝の行進は先に目的地の教会へと進み、そこで総主教の行進の到着を待ち、これを歓迎して、共に小聖入を執り行ないミサを始めるのである。

このような型の行進は、ボールドヴィンの指摘のように³⁸⁹⁾、6世紀以前には一般的でより頻繁におこなわれたものが、重要な祭日に限って9世紀・10世紀まで残ったものと思われる。これに対して上の型から行進の部分が省略されて、派生したと思われる型もある。これは最後にミサが行なわれる教会で、総主教とその行進を迎えるところから皇帝が儀式へ参加するものである。列举すると以下になる。

進堂祭：ブラケルナイの聖母教会

聖母就寝祭：ブラケルナイの聖母教会

五旬節中日の水曜日：聖モーキオス教会

昇天祭：ペーゲーの聖母教会

この型は明らかに、多くの研究者が述べる小聖入の起源を、そのままあらわしているものである。つまり他の教会からの行進の最後の段階として入場がおこなわれるのではなく、かわりに教会堂のアトリウムなどで信徒と聖職者が集合して堂内に入場するのである。ここで取り上げたような大きな祭日は別にして、通常のより一般的なミサの場合は7世紀ごろ、この変化が生じたと考えられている³⁹⁰⁾。おそらくこのような簡略化は、祭日の重要度の低い、あるいは規模の小さいものから生じ、8世紀には日常的なミサは、すでに信徒が堂内で待つ所へ、聖職者達が入場する形で始まるようになった。しかしながら、『テュピコン』の記述からも明らかのように、10世紀においてもまだ重要な祭日においては、より古い完全な形での行進が残っていた。

すでに繰り返し述べてきたように、9・10世紀の百年ほどの期間においても、行進を簡略化する傾向は確認することができる。例えば復活祭の月曜日と復活祭の次の日曜日は、レオン6世以降の時代には、皇帝は行進を行なわず先に馬で聖使徒教会に行って待つようになり、より古いより完全に近い型から、この簡略化された型に移行し、また復活祭の次の日曜日、五旬節中日の水曜日昇天祭は舞台がハギア・ソフィアに移された。

なお正統信仰の祝日は、おそらくこの簡略化された型の変形とみてよいだろう。つまりブラケルナイの聖母教会から行進してきた総主教を、皇帝がハギア・ソフィアの前で出迎え、小聖入をおこなうのである。これに関しては、後に再び詳しく考察することにする。

また史料に明記はされていないが、その内容から考えて、おそらくは皇帝が先に教会に到着して、行進してきた総主教などの聖職者を出迎える、あるいはより基本的な完全な行進をとまった型でおこなわれた、と考えられるのが以下の祭日である。

使徒ヨアンネス（9月26日）

聖コスマスと聖ダミアノス（11月1日）

40殉教者（3月9日）

使徒ヨアンネス（5月8日）

聖コスマスと聖ダミアノス（7月1日）

聖バンテレイモン（7月27日）

聖ディオメデス（8月16日）

なおこのうち、7月1日と27日の儀式は皇帝が先に行き待つ型でおこなわれたことがわかっている。以上の儀式はいずれもが総主教や彼に従う聖職者達が参加するが、次第はほとんど同じでも訪問先の聖職者が中心となる儀式がある。これは8月29日の先駆者ヨアネスの記念日である。

8月29日の儀式はストゥーディオス修道院でおこなわれ、7月27日のそれに準じている。総主教は参加せず、かわりにこの修道院の修道僧達がミサをおこなう。また皇帝と廷臣達の行進はおこなわれない。

なおこれと関連して、たいへんおもしろいのが5月21日におこなわれる聖コンスタンティノスの記念祭と万聖人の祭日である。

5月21日は『儀式について』によると、皇帝はポヌス宮から馬で聖使徒教会へ行きコンスタンティノス1世の霊廟の前で総主教と会う。それから皇帝はポヌス宮に行き総主教を待つ。総主教は行進と共にポヌス宮へ行き、皇帝の歓迎を受けて一緒に宮殿の聖コンスタンティノス教会へと入場し、ミサを行なうのである。ちなみに『テュビコン』にはこの日、総主教が皇帝と元老院議員とこの教会まで行進することになっているが、これはおそらくハギア・ソフィアからではなく、聖使徒教会からポヌス宮までを指すのであろう。

万聖人の祭日は『儀式について』では、皇帝は聖使徒教会へ再び馬でいき行進はしない。そして総主教は行進と共にこの教会へ到着して入場するが、この間皇帝は総主教とは会わない。そして皇帝は聖使徒の至聖所で総主教と会った後、万聖人の至聖所へと行進するのである。『テュビコン』によれば、この総主教の行進はハギア・ソフィアから万聖人の教会に向かっておこなわれることになっている。

この二つの次第は、一見すると都市における教会間の行進を簡略化したものと考えることが可能なようにみえる。しかしこの二つの次第が確立されたのは10世紀前半な筈である。実のところ市内の教会間を移動する大規模な行進は、徐々に減少する傾向にあったわけだが、大宮殿内など限られた空間においては、まったく逆の現象をみることができる。

大宮殿内の教会を用い、大宮殿内で完結するものに関して整理すると、以下の五つの記念祭と聖枝祭が該当することになる。

聖デメトリオスの記念祭（10月26日）

大天使ミカエルの記念祭（11月8日）

聖大バシレイオスの記念祭（1月1日）

ネア献堂記念祭（5月1日）

預言者エリアスの記念祭（7月20日）

聖枝祭

これら六つの次第は多かれ少なかれ、登場する教会堂の建設年代から考えて、9世紀後半以降にできたものである筈である。しかしながらその内容は、以下のようにいずれもが教会間の行進を含んでおり、常に複数の教会堂を一つの祭日で使用している。

まずネア献堂記念祭と大天使ミカエルの記念日では、ファロスの聖母教会から行進を開始し、ネアに入場してミサをあげる。また7月20日の預言者エリアスの記念祭の場合はネア献堂記念祭に準じる儀式がおこなわれるのだが、ファロスの聖母教会内の聖エリアスの礼拝所から行進は出発し、ネアの中の聖エリアスの礼拝所へ向かう。なおこの行進すべてに総主教が参加する。

また1月1日の場合は総主教は参加しないが、ファロスの聖母教会からハギオス・バシレイオスへ行進し、ここでミサをあげる。

そして聖デメトリオスの記念日には、ハギオス・ペトロスの礼拝堂からハギオス・デメトリオスへ行進して、ここで総主教も参加してミサをおこなう。

以上五つの記念祭に共通していることは、いずれもある教会から他の教会へ行進し、その後にミサがおこなわれることである。また皇帝は小聖入には参加するが、献納品については大天使ミカエル、ネア献堂、預言者エリアスの場合にのみ記述がある。皇帝はミサにおいてはこれ以上、儀式の信仰に関与しない。

聖枝祭の場合はもっと複雑である。これは大祭のうちで唯一、皇帝が市内の教会での儀式に参加しないもので、独立して宮殿内でおこなわれる。さらに『クレートロロギオン』と『儀式について』で記述に食い違いが見られる。おそらく宮殿内の教会堂が次々と新たに建設されていく中で、儀式の次第に繰り返し変更があったものと思われる。ここでは『儀式について』をもとに試みていくことにする。

この儀式も大宮殿内で完結したもので、総主教も参加しない。クリュソトリクリノスでの謁見の後、皇帝は廷臣達とトリコンクで集合してダフネー宮の聖母教会へ行進して礼拝しさらに同じダフネー宮のハギオス・ステファノスで連禱をおこなう。そしてふたたびトリコンクまで行進して戻る。その後、クリュソトリクリノスで連禱、ファロスの聖母教会でミサがおこなわれる。この日の宗教儀式における皇帝の行動について、史料はこれ以上の情報は与えてくれない。献納品、領聖などに関してはおそらく、通常、皇帝

が大宮殿内の教会でミサに参加する場合と変わらないのであろう。むしろその意味では、この日の皇帝の行動すべてが、多分に宗教的かつ、特異なものである。

さて次に各祭日の次第における皇帝の行動について、『儀式について』をもとにまとめてみることにする。[表9]はその結果であるが、ここでは本章で取り上げた祭日のうち、皇帝の行動が詳細にわかるものに関してのみ、まとめている。

まず先に触れた市内の行進を鍵としてみていくことにする。行進から入場がおこなわれる、あるいは行進が簡略化して小聖入へと変化した儀式には、いくつかの共通点がある。皇帝が小聖入に参加すること、多くの場合献納品を祭壇上に納めること、それ以外は皇帝は教会堂内、多くの場合はギャラリー、に用意された専用の空間から儀式に参加しそこからは出ないこと、領聖を受ける際にはこの空間の近くまで総主教に来てもらうこと、がその共通点である。ちなみに市内の教会を使用する場合で領聖に関する記述があるのは、進堂祭、受胎告知、聖母就寝祭、復活祭の月曜日、昇天祭の五つで、おそらく復活祭の次の日曜日でも皇帝は領聖を受けたものと思われる。また聖母生誕祭、進堂祭、受胎告知、聖母就寝祭、復活祭の月曜日、五旬節中日の水曜日、昇天祭、そしておそらくはやはり復活祭の次の日曜日において皇帝は小聖入の際に献納品を納めている。

ここで以上の形式の儀式に関してまとめておくと、以下のことがいえる。皇帝の行進への参加は徐々に減り、おそらく立地条件、行進する距離がその決め手となっていた。聖者の記念祭といわゆる大祭とでは扱いが大きく異なり、『儀式について』における記述の密度にも差があるが、献納品の有無にもそれは反映されている。逆に聖者の記念祭の場合は訪問先の教会は記念祭の主題である聖者を奉っており、祭の主題と舞台に密接な関係が見られるが、大祭の場合はマリアの五大祭がカルコプラティアかブラケルナイの聖母の教会だという以外に、とくに関連性は見いだせない。

さてここで以上みてきた型に非常に近い形式を持っていながら、小聖入への不参加という点で珍しいのが、復活祭の火曜日である。この日、皇帝は廷臣達の行進をともないハギオイ・セルギオス・カイ・パツコスに向かう。しかし小聖入には参加せずに、直接ギャラリーの礼拝所に行き、そこから儀式に参加する。当然、献納はしない。しかし領聖の際には司祭に来てもらって領聖を受ける。なおこの儀式には総主教は参加しない。

また先に述べたように正統信仰の日は、ブラケルナイから行進してきた総主教達を皇帝が大教会で出迎えることで儀式が始まる。この日の儀式は新旧二つの次第が記録されているが、先に取り上げた他の祭日

の次第と比較してみると、新しい方の正統信仰の祭の次第との間にいくつかの一致を見ることができる。小聖入で至聖所まで入ること。ギャラリーから儀式に参加すること。儀式の後で総主教と会食をすること。これらのいずれもが新しいほうの次第にのみ見ることができて、古いほうにはない要素である。それゆえに、この次第は、この祭日が毎年催されるようになった段階で、後述するハギア・ソフィアを用いる他の儀式の次第をもとに「古い次第」が作られたが、後に他の皇帝が総主教の行進を出迎える型の次第に合わせて「新しい次第」が作られたと見ることができる。

さてここで目を転じて十字架挙栄祭の次第を見てみると、正統信仰の日の次第と一致する点がある。この日、皇帝は大宮殿からハギア・ソフィアのギャラリーに入り、セクレトンで廷臣達と会ってナルテックスへ行き、十字架の遺物を持った総主教一行と小聖入を行なう。この間の皇帝が通る経路は正統信仰の祝日とまったく同じである。つまり両者で異なっているのは、小聖入の後、皇帝がギャラリーから儀式に参加するのではなく、アンボでの十字架を掲げる儀式に参加し、それから至聖所に入って横から出て、即座に退出してしまう点である。しかしこの日の儀式の中心は、ミサではなく十字架の掲示なのであるから、この後に続くミサは皇帝にとって重要なものではなかったのであろう。もしそうではないとしても、この祭日の次第は、後に述べる生誕祭などの大教会での重要な祭日の次第よりも、正統信仰の日の次第に近いものである。そして史料に明言はされていないが、総主教がセクレトンから行進を組んで十字架の遺物を運ぶのであれば、問題なく皇帝が行進を出迎える型の変形と見ることができるだろう。そして両者に等しく「受け皿のついた行進用の蠟燭」が使用されることから、その蓋然性は高いように思われる。

次に大宮殿内の教会に関してみていくと、大天使ミカエル、ネアの献堂、預言者エリアスの各祭日には小聖入への参加と献納品が、また聖デメトリオスの記念祭には小聖入への参加が明記されている。また多くの場合、儀式の最中には皇帝が専用の空間から外には出ない点も、市内の教会と一致する。しかしここでは領聖に関する記述は一切ない。

最後に特殊な例についてみていくことにする。以上取り上げた祭典のいくつかはいわゆる大祭に分類されていた。しかしこの大祭のうち、皇帝にとって最も壮麗な次第を持つものは以下の五つの祭である。

生誕祭
神現祭
変容祭
復活祭

聖霊降臨祭

この祭日はいずれもほぼ同じ次第に則っておこなわれる。舞台はいずれもハギア・ソフィアである。表からも明らかなように、これらの次第で皇帝は、小聖入に参加し、さらに復活祭、生誕祭、神現祭の時は献納品も納め、大聖入、愛の接吻、領聖の際にもメータトーリオンから出てこれに参加する。つまりここで最も特徴的なのは、皇帝が説教、聖歌以外の行為に何らかの形で積極的に関与している点である。このような行動は他の教会では決してみられず、他の祭日には決しておこなわれない。ハギア・ソフィアとこの五つの祭日の特殊性を反映しているものである。

第2章

皇帝が使用する 教会建築